首都圈中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書35

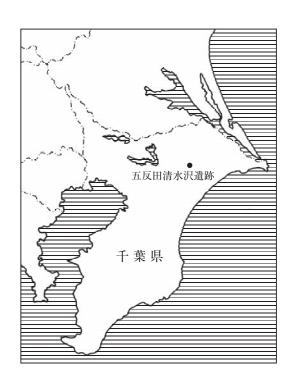
- 多古町五反田清水沢遺跡(1) -

平成31年3月

東日本高速道路株式会社 公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圈中央連絡自動車道 埋蔵文化財調查報告書35

た こまちごたんだ しみずさわいせき
- 多古町五反田清水沢遺跡(1) -



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文 化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的とし て昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、 その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第777集として、首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した多古町五反田清水沢遺跡(1)の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

同遺跡では、縄文時代や古墳時代の竪穴住居跡などが検出され、 この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られ ております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成31年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団 理 事 長 平 林 秀 介

凡例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社による首都圏中央 連絡自動車道(大栄~横芝)建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡多古町林字中ノ峯443-3ほかに所在する五反田清水沢遺跡(1)(遺跡コード 347-021(1))である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速 道路株式会社の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、石器・滑石類を主任上席文化財主事 新田浩三が、それ以外及び編集を同 井上哲朗が 担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、多古町教育委員会、国土 交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
 - 第3・8図 多古町発行 1/2,500地形図「IX-KF 93-4」「IX-LF 03-2」(昭和54年測量・平成10年 修正)及び国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所作 成現況図に基づき一部改編
 - 第7図 国土地理院発行 1/25,000地形図「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1)(平成4年発行) 「多古」(NI-54-19-14-2)(平成4年発行)
 - 第9図 参謀本部陸軍部測量局 1/20,000迅速測図「大里村」・「芝山村」・「多古町」・「八日市場村」 (明治20年~22年製版)
- 8 図版1の航空写真は、国土地理院空中写真 KT831-C10-13 (昭和58年6月撮影)を使用した。
- 9 本書で使用した座標の基本は世界測地系であり、図面の方位は全てその座標北を示すが、一部には併記した。
- 10 遺構及び遺物の凡例は、各図で示したほかは以下のとおりである。

遺構	焼土	柱穴アタリ	床面硬化面
遺物	(断面)繊維含む 縄文土器	(器面)赤彩土1	師器

本文目次

第1章	はじめに		1
第1頁	節 調査の概要		1
第2頁	節 遺跡の位置と環境		······ 7
第2章	縄文時代		14
第1頁	6 概要		
第2頁	6 竪穴住居跡		
第3頁	6 土坑等		32
第4負	节 遺構外出土遺物		
第3章	古墳時代以降		55
第1頁	節 概要		55
第2頁	節 竪穴住居跡		55
第3頁	節 土坑等		74
第4負	节 遺構外出土遺物		74
第4章	まとめ		83
第1頁	節 縄文時代 		83
第2頁	6 古墳時代		88
第3頁	市 中・近世		92
報告書持	少録		
	ाज से		
	押凶	目次	
第1図	五反田清水沢遺跡位置概略図・・・・・・1	第14図	SI016 (遺構・遺物)・・・・・・23
第2図	グリッド設定凡例・・・・・・2	第15図	SI017 (遺構・遺物 (1))·····24
第3図	遺跡全体図3	第16図	SI017 (遺物 (2))······25
第4図	北区遺構配置図4	第17図	SI018・019 (遺構・遺物)・・・・・・26
第5図	南区遺構配置図5	第18図	SI020 (遺構・遺物)・・・・・・28
第6図	自然堆積土層・・・・・・・6	第19図	SI021 (遺構・遺物)・・・・・・29
第7図	遺跡の位置と周辺の地形・・・・・8	第20図	SI023 (遺構・遺物)・・・・・・30
第8図	遺跡周辺地形図(1)11	第21図	SI024 (遺構・遺物)・・・・・・31
第9図	遺跡周辺地形図(2)12	第22図	SK001・002・007・008 (遺構・遺物)
第10図	SI010 (遺構・遺物)・・・・・・17		33
第11図	SI013 (遺構・遺物 (1))・・・・・18	第23図	SK005 (遺構・遺物 (1)) · · · · · · · 34
第12図	SI013 (遺物 (2))·····19	第24図	SK005 (遺物 (2))·····35
第13図	SI014・015 (遺構・遺物)・・・・・・21	第25図	縄文時代ピット群 (遺構・遺物)・・・・・37

第26図	縄文時代遺構外出土土器 (1)38	第40図	SI008 (遺構・遺物)・・・・・・・66
第27図	縄文時代遺構外出土土器 (2)39	第41図	SI009·022 (遺構 (1))······67
第28図	縄文時代遺構外出土土器 (3)40	第42図	SI009·022 (遺構 (2))·····68
第29図	縄文時代遺構外出土土器 (4)・土製品	第43図	SI009·022 (土師器)·····69
	•••••41	第44図	SI009 · 022 (滑石類分布) · · · · · · · 70
第30図	縄文時代遺構外出土石器 · · · · · · · · 43	第45図	SI009 · 022 (滑石類他)·····71
第31図	SI001 (遺構・遺物)・・・・・・56	第46図	SI011・012 (遺構・土師器等)・・・・・73
第32図	SI002 · 003 (遺構 · 土師器) · · · · · · · 57	第47図	古墳時代以降土坑、遺構外出土遺物
第33図	SI002 · 003 (滑石類)·····58		75
第34図	SI004·005 (遺構・遺物)·····59	第48図	縄文時代の集落変遷・・・・・・84
第35図	SI006 (遺構)······60	第49図	縄文土器の分布 (1)・・・・・・86
第36図	SI007 (遺構・土師器 (1))・・・・・・61	第50図	縄文土器の分布 (2)・・・・・・87
第37図	SI007 (土師器 (2))······62	第51図	古墳時代の集落変遷 ・・・・・・89
第38図	SI007 (滑石類他分布) · · · · · · · · 64	第52図	滑石類の遺構別分布・・・・・90
第39図	SI007 (滑石類他) · · · · · · 65		
	表	目 次	
	12	D V	
第1表	遺構一覧6	第9表	土師器観察表78 ~ 80
第2表	周辺遺跡一覧表9 · 10	第10表	古墳時代土製品観察表 … 81
第3表	縄文時代竪穴住居跡計測表・・・・・44~46	第11表	古墳時代滑石類遺構別組成表 81
第4表	縄文土器観察表 \cdots 47 \sim 52	第12表	鉄鏃計測表82
第5表	縄文時代土製品観察表 · · · · · 53	第13表	煙管計測表 · · · · · · 82
第6表	縄文時代石器遺構別組成表 … 54	第14表	銭貨計測表 · · · · · 82
第7表	縄文時代石器組成表54	第15表	縄文土器の時期・遺構別重量85
第8表	古墳時代竪穴住居跡計測表77		
	म्म स्व		
		目次	
図版1		図版4	
遺跡	周辺航空写真(昭和58年)	(1) 北区	[北部空撮(南から)
図版 2		(2) 北区	区南部空撮((北西から)
(1)	遺跡空撮(南上空から)	図版5	
$(2) \ \vec{\mathfrak{z}}$	遺跡空撮(北上空から)	(1) SI01	10床面検出状況 (2) SI013遺物出土状況
図版3		(3) SIO	13全景 (4) SI013炉半裁状況
(1)	遺跡近景(南東から)	(5) SI0	14土層 (6)SI014全景
(2)	上層確認トレンチ調査風景	(7) SIO	15遺物出土状況等 (8) SI015全景
(3)	北区空撮(西直上から)		

図版6

- (1) SI016遺物出土状況 (2) SI016全景
- (3) SI016炉 (4) SI017遺物出土状況
- (5) SI018全景 (6) SI019全景
- (7) SI019炉 (8) SI020全景

図版7

- (1) SI021全景 (2) SK008全景
- (3) SI023全景 (4) SI024全景
- (5) SK002土層 (6) SK002全景
- (7) SK005全景 (8) SK007全景

図版8

- (1) SI001土層 (2) SI001全景
- (3) SI001炉 (4) SI002·003遺物出土状況
- (5) SI002·003全景 (6) SI002·003掘方
- (7) SI004土層 (8) SI004全景

図版9

- (1) SI004重複SK009土層 (2) SI005土層
- (3) SI005全景 (4) SI005炉全景
- (5) SI006全景 (6) SI007遺物出土状況
- (7) SI007遺物出土状況(8) SI007貯蔵穴土層

図版10

- (1) SI007 調査風景 (2) SI007 全景
- (3) SI007 炉半裁 (4) SI008 遺物出土状況
- (5) SI008 全景(6) SI008 炉
- (7) SI009 遺物出土状況 (8) SI009 · 022 全景

図版11

- (1) SI009·022 全景
- (2) SI011·012 遺物出土状況
- (3) SI011·012 器台出土状況
- (4) SI011·012 全景
- (5) SK004 土層 (6) SK004 全景
- (7) SK004 煙管出土状況 (8) SK006 全景

図版12 縄文土器(1)

SI010 SI013

図版13 縄文土器(2)

SI013 SI014 SI015

図版14 縄文土器(3)

SI016 SI017 SI018 SI019

図版15 縄文土器(4)

SI020 SI021 SI023 SI024 SK001 SK002

図版16 縄文土器(5)

SK005 SK007 SK008 Pit

図版17 縄文土器(6)

遺構外(1)

図版18 縄文土器 (7)・縄文時代土製品

遺構外(2)土製品

図版19 縄文時代石器

SI010 SI013 SI018 SI020 SI021 SI023

SI024 SK005 遺構外

図版20 縄文土器(8)・土師器(1)

縄文土器 (SK005 遺構外)

土師器(SI001 ~ SI003)

図版21 土師器(2)

 $SI002 \sim SI005$ SI007

図版22 土師器 (3)

 $SI007 \sim SI009$

図版23 土師器(4)

SI009

図版24 土師器(5) 古墳時代以降土製品・金

属製品

土師器 (SI009 SI011·012)

土玉他 鉄鏃 煙管 銭貨

図版25 古墳時代滑石類

SI001 ~ SI005 SI007 SI009 遺構外

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過(第1図)

首都圏中央連絡自動車道(圏央道)は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善・沿線都市間の連絡強化などを目的として、国土交通省関東地方整備局と東日本高速道路株式会社が共同で計画した、都心から半径40kmから60kmを巡る、延長約300kmの環状の高規格幹線道路である。千葉県内の区間は平成4年度から事業化され、これまで神崎IC~大栄JCT(常総国道事務所)、東金IC~茂原・長南ICおよび茂原・長南IC~木更津IC間(千葉国道事務所及び東日本高速道路株式会社)の工事は終了し開通している。

それに伴う埋蔵文化財発掘調査の結果、平成29年3月まで に当財団では33冊の報告書を刊行している¹⁾。

東関東自動車道と結ぶ大栄JCTから銚子連絡道に接続する松尾横芝ICの18.5km区間の建設事業(略称「圏央道(大栄~横芝)」)については、平成26年3月に千葉国道事務所が、事業地における埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて、千葉県教育委員会に照会した。これに対し千葉県教育委員会は、同年3月に埋蔵文化財包蔵地の所在を回答し、取扱いについて関係諸機関で協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能として、やむをえず記録保存の措置を講ずることとなり、調査を公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになった。

発掘調査委託契約は、平成26年度~29年度が国土交通省 関東地方整備局千葉国道事務所、平成30年度からは東日本 高速道路株式会社との間で締結され、平成26年度に発掘調 査を開始し、現在も調査を継続中である。

本書では、平成28年度に実施した、圏央道(大栄~横芝) 区間のほぼ中央部に位置する多古町五反田清水沢遺跡第1 次調査(以降(1)を付す)について報告する。

本書で報告する発掘調査・整理作業の期間、担当者等は 下記のとおりである。

平成29年度

文化財センター長 上守秀明

調 査 課 長 蜂屋孝之

調 查 担 当 者 上席文化財主事 麻生正信

調 查 期 間 平成29年5月11日~平成29年8月15日



第1図 五反田清水沢遺跡位置概略図

調 査 面 積 (規模) 10,451㎡ (確認調査) 上層794㎡ / 10,451㎡、 下層104㎡ / 10,451㎡ (本調査) 上層2,140㎡ 下層0㎡

整 理 期 間 平成29年11月1日~平成30年3月31日

整 理 内 容 水洗・注記、記録整理、接合の一部

整 理 担 当 者 主任上席文化財主事 城田義友、文化財主事 大久保奈奈

平成30年度

文化財センター長 島立 桂

整理課長田島新

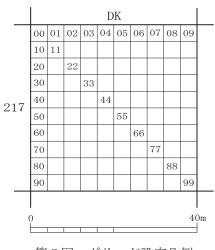
整 理 担 当 者 主任上席文化財主事 井上哲朗、新田浩三

整 理 期 間 平成30年4月1日~9月30日

整 理 内 容 接合の一部、実測、拓本、トレース、挿図、遺物撮影、写真図版、原稿

2 調査の方法と概要 (第2~5図、第1表)

圏央道(大栄~横芝)建設予定地内に所在する遺跡群の調査は、 世界測地系(平面直角座標第IX系)に基づく方眼網で覆い、40m ×40mの区画を大グリッドとした。成田市大栄JCT付近の起点 (1A-00)をX=-20,920.000m・Y=+50,520.000mに置き、この点か 217 ら40mごとに南へ1・2・3・・・を、東へA・B・C・・・Z・ AA・AB・・・を割り当て、両者を組み合わせて、「217DK」など を大グリッドの呼称とした。また、大グリッド内を一辺4mの正方 形区画で100分割して小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は 北西隅を00とし、東へ01・02・・・、南へ10・20・・・と割り振り、南東 隅が99となるようにした。これを大グリッドの名称と組み合わせ

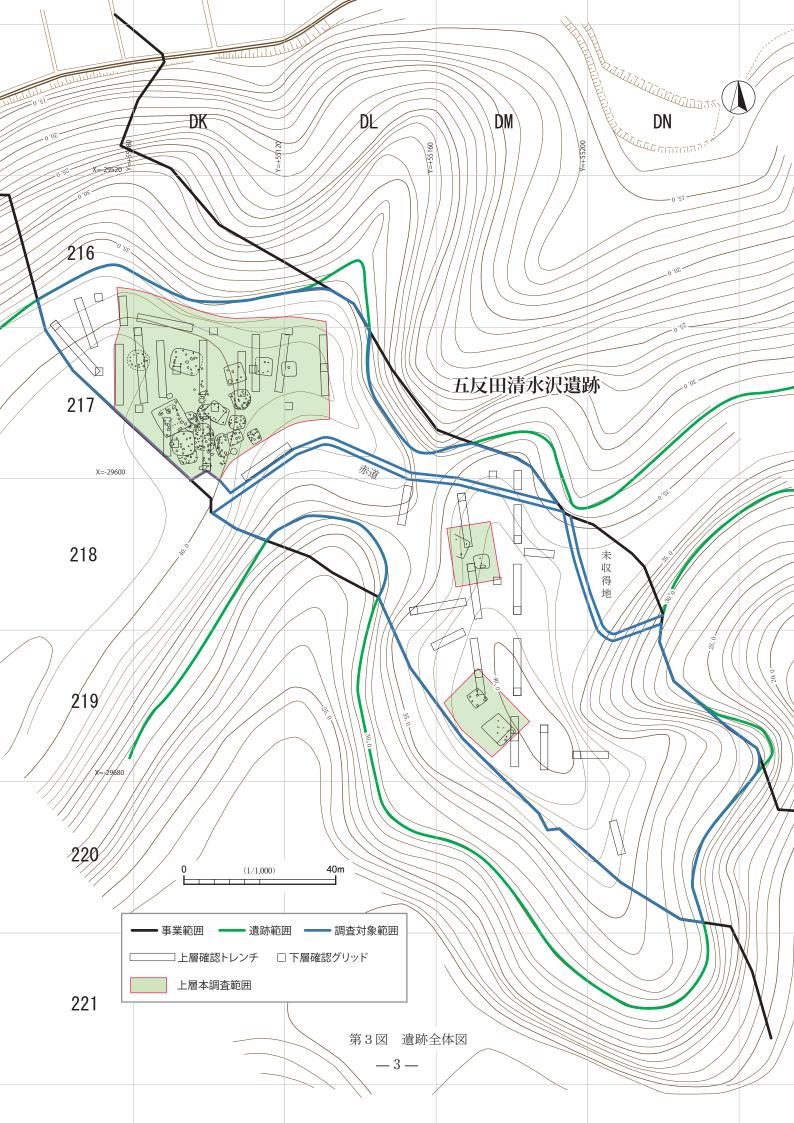


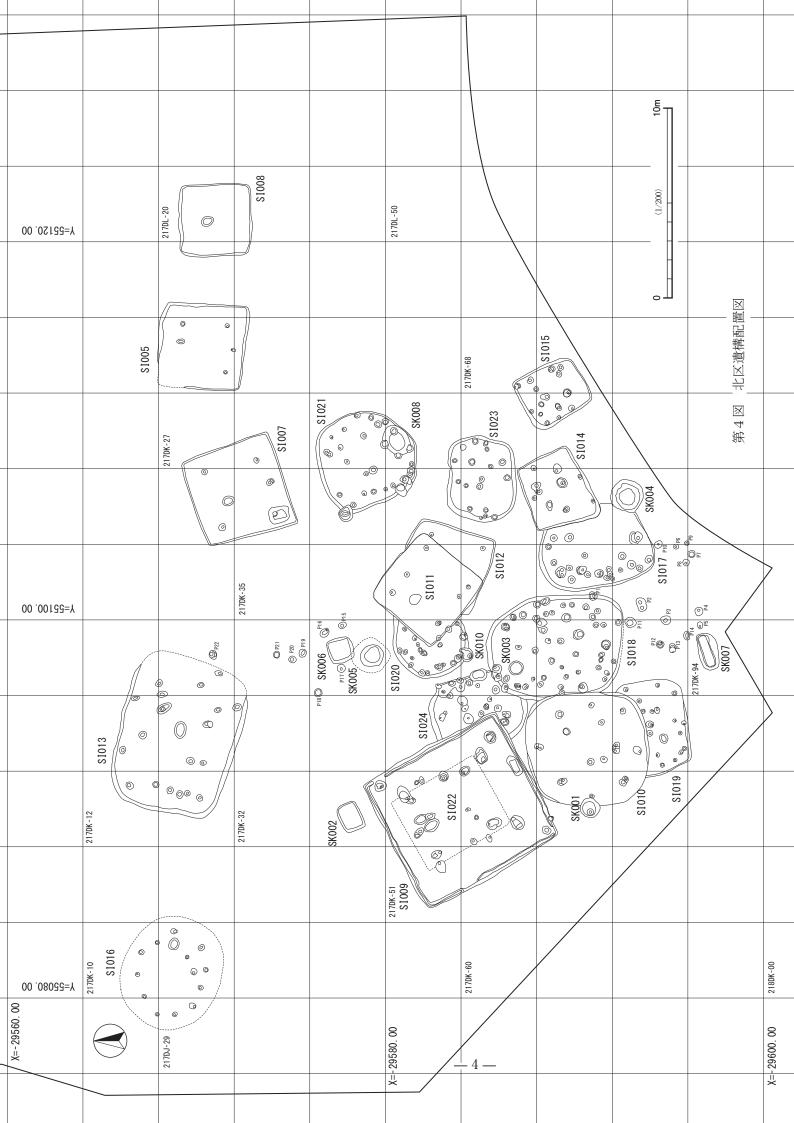
第2図 グリッド設定凡例

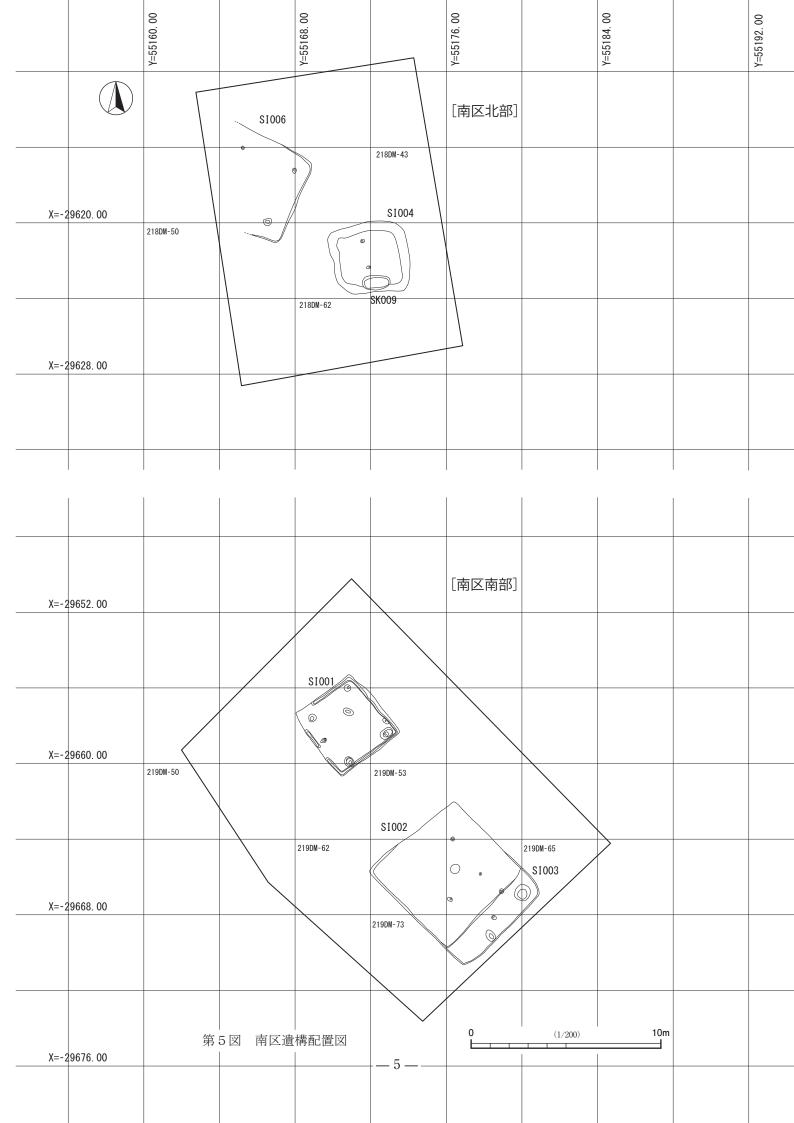
「217DK-55」のように表記し、調査時に検出した遺構や遺物の位置を、この方眼網を基準に測定し記録した(第2図)。また、遺構・遺物の記録時に用いた標高は、東京湾平均海面(T.P.)からの海抜高である。調査前には測量業者に基準点測量を委託し、現場に基準杭を設定した。調査時の補助員等休憩施設等は、南側斜面に段差や道路を造成して設定した。

上層確認調査は、幅 $2 \text{ m} \cdot$ 長さ $8 \text{ m} \sim 20 \text{ m}$ のトレンチを 30 a設定し、重機及び人力により、 794 m° (約7.6%)の表土を除去・清掃した結果、北西部で約1,600 m[°]、南東部で 200 m° 前後の 2 m が、計2,140 m[°]の上層本調査範囲を決定した。また、下層確認調査は、立川ローム層が堆積していない斜面部以外を対象に、上層確認トレンチで遺構が確認できなかった箇所に、上層本調査地点は終了後に実施した。 2 m 四方のグリッドを 26 m 所設定して、 104 m° (約 1 m)を人力により掘り下げたが、石器が検出されなかったため、確認調査で終了した。遺構名については、基本的には調査時の記号を踏襲しているが、整理及び本報告書では、検討の結果、新番号を付したものもある(第 1 表)。

この結果、縄文時代竪穴住居跡12軒・陥穴1基・フラスコ状土坑1基・土坑5基・ピット群2群、古墳時代竪穴住居跡12軒、中・近世土坑墓1基・土坑1基・道跡1条を検出した。遺物は、縄文時代前期~中期阿玉台式期主体に早期~晩期の土器のほか、土製品・石器、古墳時代土師器・土製品・滑石類・鉄鏃、

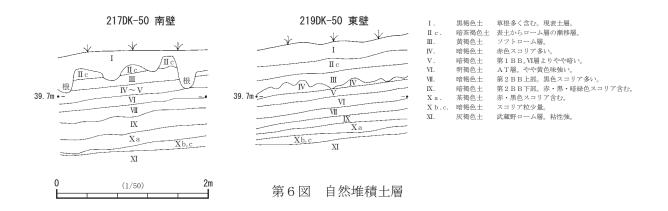






第1表 遺構一覧

遺構名	位置	種 類	時 期	年 代	遺構重複関係、注目遺物等	
SI001	南区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5 c 後	遺物少	
SI002	南区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5 c 後	S1003 を切る	
SI003	南区	竪穴住居跡	古墳時代前期~中期	4 c 中~ 5 c 後	SI002 に切られる	
SI004	南区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5 c 代	住居を切る P3 →新規に SK009 に	
SI005	北区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5 c 後半	遺物少	
SI006	南区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5c代?	西側は急斜面で検出できず。遺物少	
SI007	北区	竪穴住居跡	古墳時代中期	4 c 後~ 5 c 後	土師器・滑石類多量	
SI008	北区	竪穴住居跡	古墳時代前期	4 c 後	遺物少	
SI009	北区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5 c 後	SI022 を拡張か。土師器・滑石類多量	
SI010	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前葉(阿 玉台)	BC3,000 頃	SK001 と重複	
SI011	北区	竪穴住居跡	古墳時代中期	5 c 前	SI012 を切る	
SI012	北区	竪穴住居跡	古墳時代前期	4 c 後	SI011 に切られる。遺物少	
SI013	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前葉(阿 玉台)	BC3,000 頃		
SI014	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前葉(阿 玉台)	BC3,000 頃	SI017 と重複	
SI015	北区	竪穴住居跡	縄文時代前期中葉~中 期前葉	BC3,000 頃	南端は急斜面で不明瞭?	
SI016	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前半	BC3,000 頃		
SI017	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前葉(阿 玉台)	BC3,000 頃	SI014・SK004 と重複	
SI018	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前葉(阿 玉台)	BC3,000 頃	内側で SK003 と重複	
SI019	北区	竪穴住居跡	縄文時代中期前葉(阿 玉台)	BC3,000 頃	SI010 に切られる	
SI020	北区	竪穴住居跡	縄文時代前期中葉~中 期前半	BC3,000 頃	重複する SK006 →新規に SK010 に	
SI021	北区	竪穴住居跡	縄文時代前期後葉~中 期前葉	BC4,000 頃~	SK008 が切る	
SI022	北区	竪穴住居跡	古墳時代前期か	4 c 後か	拡張して SI009 か	
SI023	北区	竪穴住居跡	縄文時代前期後葉~中 期前葉	BC3,000 頃		
SI024	北区	竪穴住居跡	縄文時代前期後葉~中 期前葉	BC4,000 頃~		
SK001	北区	土坑	縄文時代中期前葉	BC3,000 頃	SI010 と重複	
SK002	北区	土坑	縄文時代中期前葉	BC3,000 頃		
SK003	北区	土坑	縄文時代中期前葉	BC3,000 頃		
SK004	北区	土坑墓?	近世	18 世紀後半	煙管	
SK005	北区	フラスコ状土坑	縄文時代中期前葉	BC3,000 頃		
SK006	北区	炭窯?	中・近世	18 世紀頃か	被熱箇所なく、炭化物廃棄土坑の可能性も	
SK007	北区	陷穴	縄文時代早期か	BC7,000 頃か	覆土内土器は中期前葉	
SK008	北区	土坑	縄文時代前期後葉~中 期前葉	BC4,000 頃~	SI021 と重複	
SK009	南区	土坑	古墳時代中期以降	5世紀後半か	SI004 を切る(旧 Pit3 新番号)	
SK010	北区	土坑	縄文時代中期前葉か	BC3,000 頃	SI020 を切る。SK006 重複により新番号	
P1 ∼ 14	北区	ピット群	縄文時代中期前葉か	BC3,000 頃		
P15 ∼ 22	北区	ピット群	縄文時代中期前葉か	BC3,000 頃		
SD001	北区	道路	近世	18 世紀以降	(非掲載)	



近世煙管・銭貨が出土した。特に、縄文時代前期後葉~中期前葉の多様な住居跡や土器群、古墳時代中期 の滑石模造品工房が注目される(第3~5図)。

第2節 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形 (第6~9図、図版1)

五反田清水沢遺跡は、西側の高谷川、東側の多古橋川によって開析されて南北方向に連続する標高40m 前後の台地(十余三台地)内に立地する。特に多古橋川側に開口した東西方向の谷津に挟まれ、当遺跡範囲に比定される標高30m~43mにかかる圏央道事業範囲は、中央部で北東側からと南側の小谷津によって狭まり、北西側と南東側に平坦な台地地形が存在する。台地上平坦部と周辺谷津水田面との比高は約30mで、斜面は急峻である。なお、下層確認調査で石器は出土しなかったが、台地中央部の基本土層を第6図に示す。表土は20cm前後、立川ローム層は100cm前後、以下は武蔵野ローム層で、通常の下総台地で確認される立川ローム層より薄い傾向である。

2 周辺の遺跡 (第7図、第2表)

第7図は、県遺跡分布地図²⁾ に基づき、周辺の主な遺跡の位置・範囲と圏央道の計画位置を示したものであるが、古墳・塚群中の各墳の位置は省略している。おおよそ地形図の東側 3 分の 2 が多古町、西側 3 分の 1 が芝山町である。遺跡番号は、圏央道事業に伴う調査済みと調査予定のある遺跡を 1 ~ 15とし、16 ~ 66を芝山町、67 ~ 113を多古町に、北西から南東方向に振ったものである。五反田清水沢遺跡では、主に縄文時代と古墳時代の遺構が検出されているので、両時代を中心に周辺遺跡の様相を概略する。

旧石器時代

本遺跡の南方 1 km前後に位置する多古工業団地造成に伴う調査³⁾で、各遺跡 (林小原子台 (84)・巣根 (85)・土持台 (86)・林中ノ台 (87)・吹入台 (88)) 全体で石器集中地点が34地点、千田台遺跡⁴⁾で27地点とまとまって検出され、圏央道事業の各遺跡でも少量ずつ出土がみられる。

縄文時代

高谷川流域・多古橋川流域の両岸に点在するが、中央の十余三台地の現在多古工業団地の範囲を中心に 分布が濃い傾向で、当地域は早・前期が主体である。

圏央道事業に伴う調査では、各遺跡で陥穴や前期主体の縄文土器が出土しているが、集落は検出されていない。多古工業団地関連の調査では、全体で陥穴30基・炉穴20基ほどで、土器は早期主体に晩期まで出土している⁵⁾。本遺跡の東方約1.2km~2 kmの住宅団地造成に伴う多古台遺跡(111)では、竪穴住居跡6軒が検出され、縄文土器は早・前期主体である⁶⁾。まとまった遺物が出土した遺跡は、芝山町境貝塚(60)で竪穴住居跡の他、中期(阿玉台式~加曽利E式)、後期(称名寺式~堀ノ内式)、晩期(安行Ⅲ式、姥山Ⅲ・Ⅲ式、前浦式、千網式、荒海式)が出土し⁷⁾、多古町高谷川低地遺跡(15)では縄文時代後期丸木舟が出土している⁸⁾。本遺跡で主に出土した阿玉台式期は少ないが、上記の他に芝山町内堀遺跡(26)、庄作遺跡(37)、小原子大谷遺跡(38)、多古町林小原子台遺跡(84)、巣根遺跡(85)等で出土している。

弥生時代

当地域では少ないが、多古台遺跡(111)で後期の竪穴住居が3軒調査されている⁹⁾。

古墳時代

多古町城では、『古事記』にみえる知多氏が有力者として存在したことが想像されている¹⁰⁾。古墳は第7



第2表 周辺遺跡一覧表 (1) (遺跡名の太字は発掘調査歴及び予定あり。)

	用八た		克久(1)		(子)(3元)加 <u>阿</u> <u>亚</u> 亚汉〇 了 <i>是</i> (37.9.6)	
番号	県分布 図番号	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構/遺物等	調査歴等
1		五反田清水沢遺跡	多古町林	縄文(前)、古墳(前・中)	住居/縄文土器、土師器、滑石	H29·30年度圈央道関連
2	198	かや田遺跡	多古町間倉	縄文	/縄文土器、土師器	圈央道関連調査予定
3	4	間倉遺跡	芝山町菱田 多古町間倉	古墳、奈良・平安	円墳 4 /土師器	H29·30 年度圈央道関連調査予定
4	195	宮台遺跡	多古町間倉 芝山町菱田	縄文、古墳	円墳 2 /縄文土器、直刀	圈央道関連調査予定
5		加茂台遺跡		縄文(前)、古墳	円墳 3、方墳 1、塚群/縄文土器 (浮島)、土師器	H28・29 年度圏央道関連
6	22	一ツ塚遺跡		縄文、古墳、奈・平	円墳 1 /縄文土器、土師器	H28·29 年度圏央道関連
7	27	大塚台遺跡	多古町東佐野 芝山町大里	旧石器、縄文、古墳	円墳 1 /縄文土器、土師器	H29·30 年度圈央道関連
8		五反田栗島遺跡	多古町五反田	縄文	土坑/縄文土器	H29 年度圈央道関連
9	94	長者屋敷遺跡	多古町林	縄文(後)、古墳、奈・平、 中・近世	円墳・塚 9、屋敷/縄文土器、土師器、須恵器	H29 年度圈央道関連
10		水戸塚ノ後1号 塚・2号塚	多古町水戸	奈・平、中・近世	住居/塚2	H29 年度圏央道関連
11	88	千田の台遺跡	多古町千田	縄文、古墳 (後)、奈・平、 中・近世	住居/縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品	H29 年度圈央道県連
12		境砦跡	芝山町宮崎	中世	城館	图央道関連調査予定
13		儘田台遺跡 [20]	芝山町	1. Lake	Ab to Ab Per law and Per law and Ab	图 央 道関連調査予定
14	129	殿部田古墳群	芝山町殿部	古墳	前方後円墳 5、円墳 16 /埴輪	圈央道関連調査予定
15	140	高谷川低地遺跡	芝山町山中	縄文 (後・晩)	/縄文土器(加曽利 B)、丸木舟、木製品	S28 · 29 年調査 H28 ~ 30 年圈央道関連調査
16	7	山木遺跡	芝山町菱田	奈・平	/土師器	
17		根切台遺跡	芝山町菱田	縄文(前)、古墳(後)、奈・ 平、中・近世	/縄文土器、土師器、須恵器	H3・4 年調査
18	9	野中遺跡	芝山町菱田	奈・平	/ 土師器	
19	13	上東谷遺跡	芝山町菱田 多古町間倉	奈・平	/ 土師器	
20	18	台谷遺跡	芝山町菱田	中・近世	牧 (馬土手等)	
21	24	大里田辺台古墳群	芝山町大里	古墳、中・近世	円墳 13、方墳 1、塚 16	H3 年他調査
22	33	小堤遺跡	芝山町大里	奈・平	/ 土師器	
23	27	大殿台遺跡	芝山町菱田	奈・平	/ 土師器	
24	28	大殿台古墳群	芝山町菱田	古墳、中・近世	前方後円墳1、円墳1、塚2	
25			芝山町大里	縄文(後・晩)、古墳(後)、奈・平	/縄文土器(安行)、土師器、埴輪	H6 年調査
26	33	内堀遺跡	芝山町大里	縄文(中・後)	/縄文土器(阿玉台・加曽利 B)	
27		中堀越遺跡	芝山町大里	縄文(後・晩)、古墳(後)、奈・平	/縄文土器(安行)、土師器、須恵器、鉄製品	H1·2年調査
28	59	長寿院台遺跡	芝山町大里	縄文(前)	/縄文土器(浮島)	
29	60	大谷遺跡	芝山町大里	縄文(早·前)、弥生、 古墳(中·後)	/縄文土器 (茅山)、石器、弥生土器、土師器	H4·5年調査
30		遠野台・長津遺跡	多古町東佐野	縄文(中)、弥生(中)、古墳(中・後)、奈・平	古墳/縄文土器(阿玉台)、弥生土器、土師器、須恵器、土製品	S61 年調査
31		浅見遺跡		縄文(後)、奈・平	/縄文土器 (加曽利 B)、土師器	
32	50	平野遺跡		奈・平	/土師器	
33		浅川関遺跡		縄文(中)	/縄文土器(加曽利 E)	
34				縄文(後)	/縄文土器(安行 1) 城鎮 /陶政思	CC1 年確報調本
35	53			中世 縄立(前) 土塘 本.亚	城館/陶磁器	S61 年確認調査
36	61	谷窪・上楽遺跡	之田町7.赤1	中世	城館/縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、玉類、 鉄製品 /縄文土器(茅山·阿玉台)、土師器、須恵器、土製品、	S61 年調査
37			多古町五反田	縄文 (中)、古墳 (後)、奈・ 縄文 (中)、古墳 (後)、奈・	石製品、鉄製品	S60・61 年調査
38	63	小原子大谷遺跡	之山町小原 1	平	/縄文土器(阿玉台・加曽利 E)、土師器	
39		複台遺跡	多古町林	縄文(後)	/縄文土器 (加曽利B)	
40		馬場遺跡		縄文(前)	/縄文土器(諸磯)	
41		石貝遺跡	芝山町山田	<u>古墳</u> 奈・平	/ 土師器 / 土師器	
43	75 79	作尻遺跡 田向遺跡	芝山町山田	奈・平	/ 土師器	
44	157	上細子城跡	芝山町大台	中世	城館	
45	158	宝永作遺跡	芝山町大台	旧石器、縄文(早~後)、 平安、近世	/旧石器、縄文土器、石製品、土師器、須恵器、鉄 製品	S63 年調査
46	96	上吹入・林古墳群	芝山町上吹入	古墳	円墳4/埴輪	
47	156	上吹入城跡		中世	城館	
48	97	上吹入遺跡	芝山町上吹入	古墳 (中)	/土師器	S52 年調査
49	70	山田・宝馬古墳群		古墳	前方後円墳 11、円墳 56、方墳 3 / 埴輪、玉類、鉄製 品	S38·56 年調査
50	89	寺の内遺跡	之田可八日	縄文(早・後)、古墳(後)、奈・平	/縄文土器(茅山・加曽利 B)、土師器、須恵器	
51		中ノ台遺跡	芝山町大台	古墳、平安、近世	/縄文土器、土師器、須恵器、玉類、金属製品	S62・63 年調査
52	85	大台城跡	芝山町大台	中世	城館	
53	166	荒生遺跡	芝山町大台	奈・平、近世	塚7/土師器	

第2表 周辺遺跡一覧表 (2) (遺跡名の太字は発掘調査歴及び予定あり。)

番号	県分布	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構/遺物等	調査歴等
54	図番号 165	稲荷作遺跡	芝山町大台	奈・平、近世	塚2/土師器	Ma Hr de A
55		田向城跡	芝山町小池	縄文(前~後)、古墳(後)、	城館/縄文土器、土師器、須恵器、カワラケ、瀬戸・美濃、	H2・3 年調杏
56	114	谷津古墳群	芝山町小池	奈・平、中世 古墳	常滑、石塔類、金属製品 前方後円墳1、円墳3、方墳1	TIE O WYLE.
57		山中城跡	芝山町山中	中世	城館	
58		宮前遺跡	芝山町近谷津		塚16	
_	160			縄文、中・近世		CC1 左調本
59	161	下吹入東台遺跡	芝山町下吹入	弥生(後)、古墳(前·後)		S61 年調査
60	98	境貝塚	芝山町境 多古町千田	縄文 (前~晩)	貝塚/縄文土器 (黒浜・阿玉台・加曽利 E・称名寺・加曽利 B・安行・姥山・前浦・干網・荒海)	S54・60 年調査
61	99	境谷遺跡	芝山町境	縄文(前)、奈・平	/縄文土器 (黒浜)、土師器	
62	162	宮崎上野台遺跡	芝山町宮崎	弥生	/ 弥生土器	
63	163	宮崎城跡	芝山町宮崎	中世	城館	
64	164	鷲ノ宮遺跡	芝山町境	縄文、古墳	塚1/土師器	
65	128	折戸遺跡	芝山町高谷	縄文(後)、古墳(中)、奈・ 平	縄文土器 (加曽利 E)、土師器	
66	171	殿部田城跡	芝山町殿部田	中世	城館	
67	197	松木台遺跡	多古町間倉	縄文	/縄文土器	
68		遠谷遺跡	多古町飯笹	奈・平	/土師器	
69	14	北宿遺跡	多古町飯笹	縄文	/縄文土器	
70	199	前野台遺跡	多古町間倉	縄文(早)、奈・平	/ 縄文土部 /縄文土器(夏島・稲荷台)、土師器	
71	39	馬場遺跡	多古町飯笹	PEA (十八 京・丁	/ 楓又上命(夏島·相何百)、上岬帝 / 土師器	
_				十一一		
72		辻屋台古墳群 伊田台 1 港牌	多古町飯笹	古墳	円墳	
73	6	保田台 I 遺跡	多古町飯笹	奈・平	/ 土師器	
74	7	保田台Ⅱ遺跡	多古町飯笹	縄文、古墳、奈・平	円墳/縄文土器、土師器	mad a share and a
75	24	儘田台遺跡	多古町飯笹	古墳、奈・平	円墳、方墳/土師器、須恵器	圈央道関連調査予定
76	28	堂山台遺跡	多古町喜多	古墳	/ 土師器	
77	248	大蔵遺跡	多古町飯笹	縄文 (早)	/縄文土器(夏島・稲荷台)、土師器	
78	168	大原遺跡	多古町大原	旧石器、古墳、奈・平	住居、掘立柱建物、土坑、溝/土師器、鉄製品	S60 年調査
79	30	北の内遺跡	多古町喜多	古墳、奈・平、中世	城館/土師器、須恵器	
80	31	向台遺跡	多古町喜多	縄文(前)、古墳、奈・平	円墳/縄文土器(黒浜)、土師器、須恵器	
81	264	東台城跡	多古町水戸	中世	城館	
82	32	五反田遺跡	多古町五反田	古墳	円墳2/土師器	
83	37	林遺跡	多古町林芝山 町小原子	旧石器、縄文、古墳、奈· 平		S52 ~ 55 年調査
84	260	林小原子台遺跡	多古町水戸	 旧石器、縄文(早・中)、 古墳	 石器集中地点、住居、陥穴、小竪穴、溝/縄文土器(田 戸下層・加曽利 E)、土師器	多古工業団地関連 S56·57 年調査、消滅
85	258	巣根遺跡	多古町水戸			S56·57 年調査、消滅
				旧石器、縄文(早・中)、	石器集中地点、住居、方形周溝状遺構、陥穴、溝/縄	
86	262	土持台遺跡	多古町水戸	古墳、奈・平	文土器(夏島・勝坂)、石器、土師器、蔵骨器、鉄製品	S56·58 年調査、消滅
87	261	林中ノ台遺跡	多古町水戸	旧石器、縄文(早)、古墳	石器集中地点、住居、陥穴、小竪穴、溝/縄文土器(夏島)、土師器	S56 ~ 58 年調査
88	259	吹入台遺跡	多古町水戸	旧石器、縄文、古墳、平安	石器集中地点、住居、溝/縄文土器、土師器	S56·58 年調査、消滅
89	99	城ノ台遺跡	多古町水戸	縄文 (中)、古墳、奈·平、 中・近世	円墳 2、城館/縄文土器 (加曽利 E)、土師器	
90	165	千田台遺跡	多古町千田	縄文 (中)、古墳、奈・平	円墳/縄文土器 (加曽利 E)、土師器	S57 年調査
91	91	桔梗地遺跡	多古町船越	古墳、奈・平	住居、土坑/土師器	
92	257	初田遺跡	多古町水戸	中・近世	城館	
93	104	中ノ谷古墳群	多古町水戸	古墳	円墳1、方墳2	
94	105	下巣越遺跡	多古町船越	古墳、奈・平	古墳/土師器	
95	108	堂谷遺跡	多古町船越	縄文、古墳、奈・平	円墳4/縄文土器、土師器	
96	163	戸上台貝塚	多古町牛尾	縄文(早)	貝塚/縄文土器 (茅山)	消滅
97	41	飯笹陣屋跡	多古町飯笹	近世	陣屋跡	
98	212	四角山遺跡	多古町飯笹	縄文、奈・平	/縄文土器、土師器	
99		打手遺跡	多古町飯笹	奈・平	/土師器	
100		向台遺跡	多古町飯笹	古墳、奈・平	前方後円墳 2、円墳 1 /土師器・須恵器	
101	45	三明寺古墳群	多古町飯笹	古墳	前方後円墳 2、円墳 34・方墳 4	
102	183	八田遺跡	多古町多古	縄文、古墳、奈・平	住居、掘立柱建物、土坑/縄文土器、土師器	S56 年調査
103	182	八田谷横穴群	多古町多古	古墳	横穴/須恵器	
103	173	大太良内遺跡	多古町染井	奈・平	/土師器	
105		桜宮遺跡	多古町桜宮	奈・平	須恵器	
106	175	与倉台遺跡	多古町多古	古墳、奈・平	/土師器	NEA N
107		鶴舞窯跡群	多古町多古	奈・平	窯跡/土師器	消滅
108	177	岩坂遺跡	多古町岩坂	古墳、奈・平	住居/土師器	S50 年調査
109	171	宮台遺跡	多古町染井	縄文、奈・平	/縄文土器、土師器、須恵器	
110	172	傍尓台遺跡	多古町多古	縄文 (中)、奈・平	/縄文土器(中期)、土師器	
111	109	多古台遺跡	多古町多古	縄文 (早)、弥生、古墳、奈・ 平	住居、炉穴、円墳、地下式坑、城館跡/縄文土器(早期)、 石器、土師器、須恵器、滑石製品	S50年、H2~6年調査
112	111	松平氏陣屋跡	多古町多古	近世	陣屋	
113	112	多古城出城跡	多古町多古	中世	城館	
				*	•	





図の西端に山田・宝馬古墳群(49)などの広域の古墳群が存在し、高谷川流域では点在、多古橋川流域は 北部に多い傾向である。集落は、高谷川流域では点在し、多古橋川流域は北部に多く、多古工業団地周辺 が濃い傾向がみられる。本遺跡で検出された前・中期の遺跡は少ないが、中期の集落は芝山町遠野台・長 津遺跡(30)、上吹入遺跡(48)、多古町折戸遺跡(65)等でみられる。

発掘調査された遺跡では、圏央道事業で、加茂台遺跡 (5)・一ツ塚遺跡 (6)・大塚台遺跡 (7) で円墳が調査されている。多古工業団地の調査では、土持台遺跡 (86) で5世紀代4軒、6世紀代5軒、7世紀代5軒の集落が検出され、林中ノ台遺跡 (87) では後期の住居跡2軒と円墳2基が検出された¹¹⁾。多古台遺跡 (111) では、前・中期竪穴住居18軒、古墳25基が調査されている¹²⁾。

本遺跡で多数出土した滑石製模造品は、上吹入遺跡(48)、下吹入東台遺跡(59)、林遺跡(83)、土持台遺跡(86)の5世紀代の住居跡、多古台遺跡(111)の5世紀代の古墳、板並白貝古墳群(多古町東部第7図外)¹³⁾等からも出土しており、高谷川と多古橋川に挟まれた当地域は、小規模ながら石製模造品製作遺跡の集中地点である¹⁴⁾。

奈良・平安時代

当地区は、古代では匝瑳郡茨城郷の内に推定されている¹⁵⁾。多古工業団地の事前調査では、吹入台遺跡 (88) でまとまった集落が、また、全体で方形周溝遺構10基、骨蔵器埋納が計6地点で検出されている¹⁶⁾。また、南側に近接する千田台遺跡 (90) や千田の台遺跡 (11) でも集落が検出されて集中する。圏央道関連では、ほかに大塚台遺跡 (7) で集落や骨蔵器が検出されている。

中・近世

千田の台遺跡で台地整形区画や地下式坑群が検出され、文字どおり「千田庄」の中心部分の可能性がある。また、千葉氏の拠点の一つであり、戦国時代初めには一族内乱の地であり、後半には戦国大名後北条氏の配下となった井田氏の領域であったことからか、河川流域沿いの台地突出部分に多くの城館が築かれる。近世塚も多く、圏央道事業では水戸塚ノ後1号塚・2号塚(10)などが調査されている。

注

- 1 (財) 君津郡市文化財センター 2004・2005『首都圏中央連絡自動車道(木更津~東金)埋蔵文化財調査報告書 1・2』、 (公財) 千葉県教育振興財団 (2012年度(財)~(公財)) 2004~2016『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書』 1~33
- 2 (財) 千葉県文化財センター 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図 (2) -香取・海上・匝瑳・山武地区 (改訂版) -』 及び 千葉県教育委員会HP内「ふさの国文化財ナビゲーション」
- 3・5・11・16 三浦和信ほか 1986『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台・巣根・土持台・林中ノ台・吹入台-』 (財) 千葉県文化財センター
- 4 矢本節朗・渡辺高広 1996『多古町千田台遺跡-BR / W南側NDB用地 (無線施設) 埋蔵文化財調査報告書-』 (財) 千葉県文化財センター
- 6・9・12 柿沼修平ほか 1976『多古台遺跡群調査概報』日本文化財研究所、黒沢哲郎ほか 1992・2002・2003『多古 台遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(財) 香取郡市文化財センター
- 7 西山太郎ほか 1995 『芝山町史 通史編 (上)』 芝山町
- 8 · 10 · 13 · 15 多古町 1985『多古町史 上巻』
- 14 山口典子 2004「第2章 第4節 古墳時代 2 遺物(6) 玉類の生産」『千葉県の歴史 資料編 考古4』千葉県

第2章 縄文時代

第1節 概要

五反田清水沢遺跡(1)で確認された縄文時代の遺構は全て北区であり、竪穴住居跡12軒、陥穴1基、フラスコ状土坑1基、土坑5基、ピット群2群である(第4図)。これらの遺構の帰属時期は、おおむね前期後葉浮島式期~興津式期、中期前葉阿玉台式期に比定され、出土土器の主体を占めるが、他時期の土器も出土している。ここでは出土している土器について、事実記載のための便宜的な分類を群別して示す¹⁾。第1群 早期の土器

出土量はわずかであるが、沈線文系の田戸下層式、条痕文系の野島式が出土している。なお、条痕文の み施される土器は広義の条痕文系土器とした。

第2群 前期の土器

複数の土器型式が含まれるため、以下に類別する。

- 1類 前期中葉の黒浜式で、単節縄文や附加条縄文等による羽状縄文、半截竹管や篦状工具に沈線文などが施される。
- 2類 前期後葉西関東系の諸磯 c 式で、出土量は少ない。地文に集合沈線が施され、口縁部には棒状貼付文が付される。
- 3類 前期末葉西関東系の十三菩提式で、出土量はわずかである。地文に縄文を施し結節浮線文、ソーメン状貼付文、半隆起線文を施す。
- 4類 前期後葉東関東系の浮島式。結節浮線文や鋸歯状モチーフとなる重畳した沈線文が施される I 式がわずかにあるが、貝殻腹縁を振復させた波状貝殻文が施される II ~ II 式が主体となる。
- 5類 前期末葉東関東系の興津式で、いわゆる磨消貝殻文が施されるもの、貝殻腹縁を振復せず押し引いた押引貝殻文が施されるものが主体となる。
- 6類 東関東系のいわゆる前期末縄文。折り返し口縁、口縁端部上への加飾、結節縄文の多用などを特徴とする。
- 7類 前期後半の縄文施文の土器で、諸磯式の範疇に含まれる。
- 8類 前期後半の沈線・条線施文の土器で、多くが浮島式の範疇に含まれる。

第3群 中期の土器

複数の土器型式が含まれるため、以下に類別する。特に本遺跡の出土土器の主体となる中期前葉阿玉台は II 式が中心となるが、全体を文様要素等で類別した。

- 1類 中期初頭の五領ヶ台式、五領ヶ台Ⅱ式~阿玉台 I a 式、阿玉台 I a 式、五領ヶ台式に併行する東北地域の大木 7 a 式を本類としたが、出土量は少ない。
- 2類 枠状文(枠状区画)に単列の角押文、有節線文が付随する口縁部で、中期前葉阿玉台 I b式に比 定される。
- 3類 隆起線に単列の角押文、有節線文が付随する胴部で、阿玉台 I b式に比定される。
- 4類 枠状文(枠状区画)に複列の角押文、有節線文が付随する口縁部で、阿玉台Ⅱ式に比定される。

- 5類 隆起線に複列の角押文、有節線文が付随する胴部で、阿玉台Ⅱ式に比定される。
- 6類 隆起線に複列の沈線文が付随する胴部で、阿玉台Ⅱ式に比定される。
- 7類 単列の角押文、有節線文が施される胴部で阿玉台 I b 式に比定されるものと、複列の角押文、有 節線文が施される胴部で阿玉台 II 式に比定されるものを含む。
- 8類 単列の沈線文が施される胴部で阿玉台 I b式に比定されるものと、複列の沈線文が施される胴部で阿玉台 II 式に比定されるものを含む。
- 9類 無文に隆起線が垂下する胴部で、阿玉台 I b~Ⅱ式に比定される。
- 10類 基本的に無文であるが輪積修正痕が認められる胴部(一部口縁部含む)で、阿玉台 I b ~ Ⅱ式に 比定される。
- 11類 連続爪形文あるいはひだ状文が施される胴部で、阿玉台Ⅰb~Ⅲ式に比定される。
- 12類 枠状文(枠状区画)が形成される無文の口縁部で、阿玉台Ⅱ~Ⅲ式に比定される。
- 13類 地文条線文に隆起線が付く胴部で、阿玉台Ⅱ~Ⅳ式に比定される。
- 14類 枠状文(枠状区画)に沈線文が付随する口縁部で、阿玉台Ⅲ~Ⅳ式に比定される。
- 15類 隆起線に幅広な角押文(キャタピラ文)が付随する胴部で、阿玉台Ⅲ式に比定される。
- 16類 無文の胴部で、広義の阿玉台式に比定される。
- 17類 阿玉台式の底部を本類とした。
- 18類 阿玉台式に併行する関東西部~中部地域の勝坂式、南東北~北関東地域の七郎内Ⅱ群土器を本類としたが、出土量は少ない。
- 19類 中期中葉中峠式と中期後葉加曽利E式を本類としたが、出土量は少ない。

第4群 後期の土器

出土量は少ないため、2つに類別した。

- 1類 後期前半に含まれる称名寺式、堀之内式を本類としたが、出土量は少ない。
- 2類 後期後半に含まれる粗製土器を本類としたが、出土量はわずかである。

第5群 晩期の土器

晩期後半の撚糸文施文の土器を本群としたが、出土量はわずかである。

石器は総計253点出土した。遺構別組成・石器組成は第6・7表のとおりである。遺構出土が140点(55%)、遺構外出土が113点(45%)である。遺構出土のものは、SI013が33点で最も多く、次にSI017が18点、SI014が15点、SI021が12点、SI010が10点で、そのほかは10点以下である。主要器種は、石鏃18点、楔形石器4点、石核1点、打製石斧2点、磨製石斧9点、敲石5点、凹石1点で、石鏃・磨製石斧の占める割合が高い。主要石材は、黒曜石101点、チャート54点、ガラス質黒色安山岩24点、砂岩24点、流紋岩17点で、黒曜石・チャートの占める割合が高い。

第2節 竪穴住居跡

縄文時代の各住居跡出土遺物には幅があり、詳細な時期の決定が難しいため、基本的には遺構番号順(調査順)に説明する。主軸については、住居内の炉の偏る位置方向と縦長を基本とし、柱穴の位置からも類推すると、基本的には北西方向が多いので、不確実なものはその方向を基本として推測した。なお、計測

値等の詳細は縄文時代竪穴住居跡計測表(第3表)に、遺物の詳細は 縄文土器観察表(第4表)、縄文時 代土製品観察表(第5表)に記した。特に、縄文土器の施文や胎土は内容が多いため、参照されたい。

SI010 (第10図、第3~7表、図版5·12·18·19)

北区南部の217DK-73他に位置する。円形で、短軸5.95m・長軸6.50m・深さ0.20m前後である。覆土は暗褐色土のレンズ状堆積である。炉は検出されず、ピットは重複も含めて17か所検出され、P1~P8が壁沿いに円周し、内部のやや南寄りにP9~P13が造られている。短径25cm~40cmのものが多く、深さはP2が137cm、P5が60cm、P6-1が45cm、P10が50cmと深いが、他は15cm前後と浅い。主軸は不確実であるが、強いて推定すれば、N-5°-Wの可能性がある。重複関係は、南側の縄文時代住居跡SI019を切り、西端で土坑SK001に切られる(後述)。

遺物は少量だが、ほぼ床面近くで出土した。図示した出土遺物の1~31は縄文土器、32は土製円板、33・34は石器である。

縄文土器片は約2,600g出土した。型式及び施文については、1・2は2群1類(黒浜式)、3は2群4類(浮島Ⅱ~Ⅲ式)、4は2群6類(前期末縄文施文)、5は2群7類(前期後半縄文施文)、6は3群1類(五領ヶ台Ⅱ~阿玉台Ia式)、7~13は枠状文(枠状区画)に単列の角押文、有節線文が付随する口縁部の3群2類(阿玉台Ib式)で、14~19は枠状文(枠状区画)に複列の角押文、有節線文が付随する口縁部の3群4類(阿玉台II式)で、20は複列の沈線文が施される胴部の3群8類、21~24は無文に隆起線が垂下する胴部の3群9類で、20~24は阿玉台Ib~II式、25は連続爪形文あるいはひだ状文が施される胴部の3群11類(阿玉台Ib~II式)、26は枠状文(枠状区画)が形成される無文の口縁部の3群12類(阿玉台II~II式)、27は地文条線文の隆起線が付く胴部の3群13類(阿玉台II~IV式)、28・29は隆起線に幅広な角押文(キャタピラ文)が付随する胴部の3群15類(阿玉台II~IV式)、28・29は隆起線に幅広な角押文(キャタピラ文)が付随する胴部の3群15類(阿玉台II式)、30は中期中葉中峠式と後葉加曽利E式の3群19類、31は後期後半に含まれる粗製土器の4群2類に比定される。全体では、阿玉台Ib~II式(3群)が主体である。

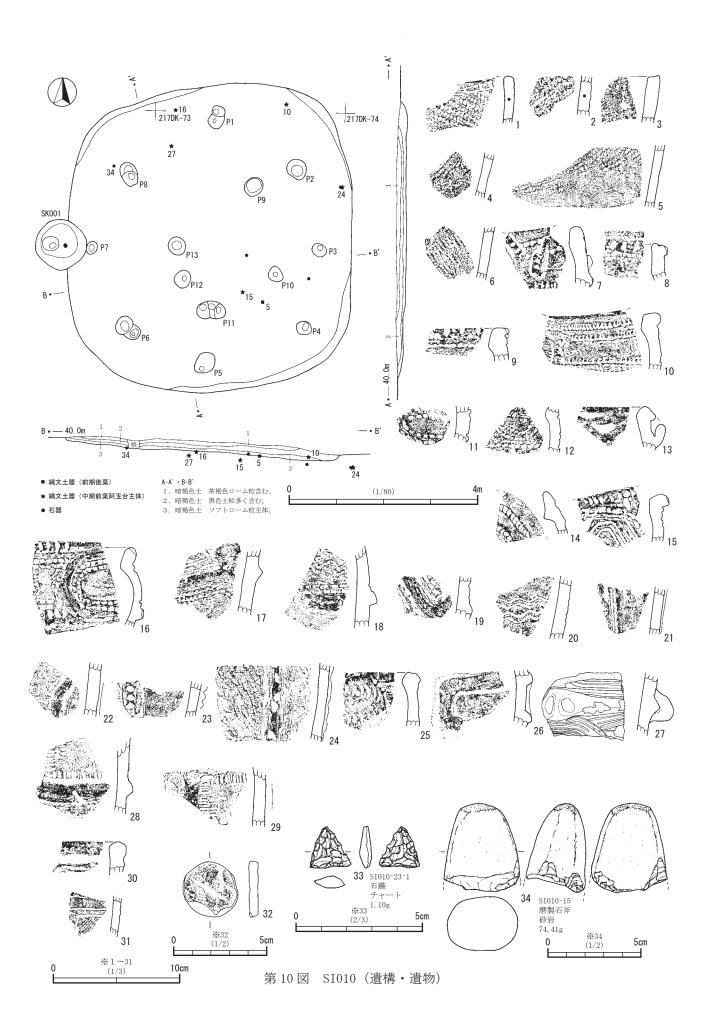
土製円板(32)は、最大径28.5mm・最大厚4.8mmで、無文であるが、周辺土器の様相から、前期後半~阿玉台式土器と推測される。

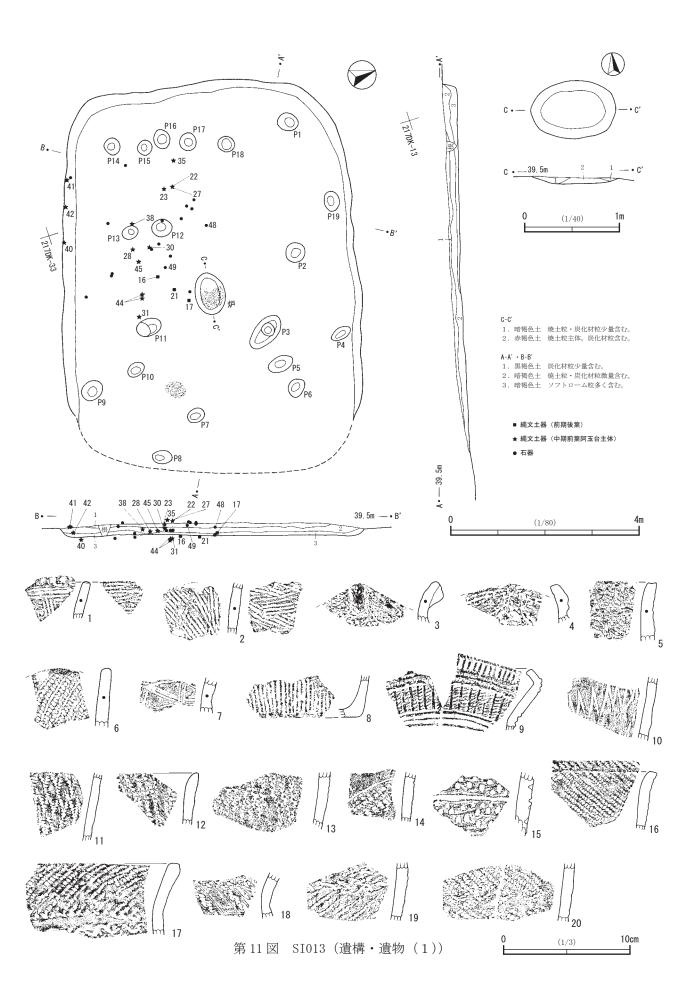
石器は総計10点出土した。33は石鏃である。正三角形を呈し、脚部の抉りはみられない。34は定角式磨製石斧の頭部残存品である。楕円形礫を素材として、全面を研磨している。破損面を打面として縁辺に細かい剥離面がみられることから、敲石に転用したものと推測される。

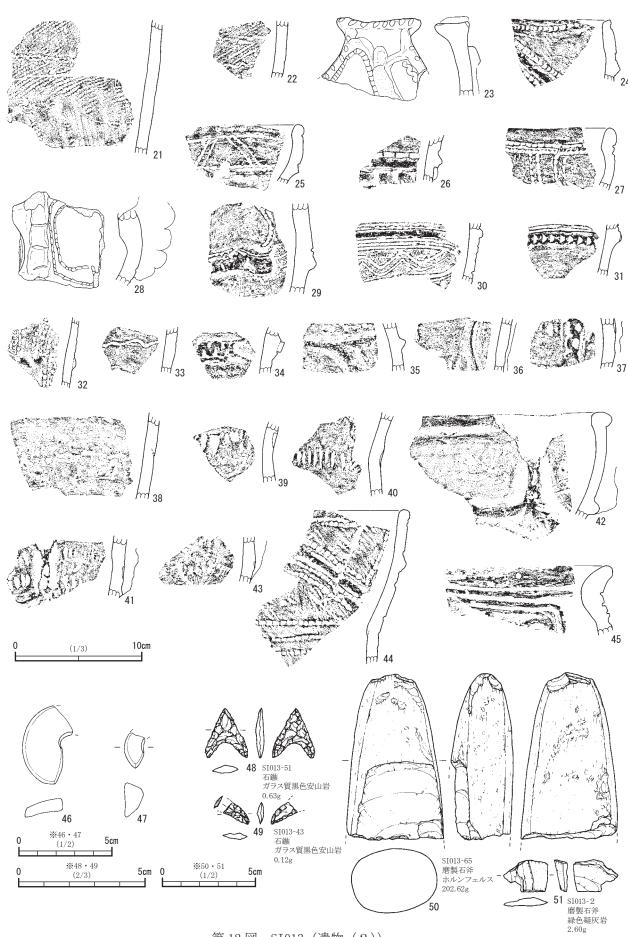
SI013 (第11·12図、第3~7表、図版5·12·13·18·19)

北区北部の217DK-23他に位置する。隅丸長方形で、西辺は壁が残存しておらず推測だが、短軸6.30m・長軸8.30m・深さ0.25m前後である。覆土は焼土粒・炭化材粒を微量含む暗褐色土のレンズ状堆積である。炉は中央部で61cm×90cmの楕円形、ピットは18か所で、西辺近くで5つのピットが南北に並ぶほかは、大きな規則性はみられない。径20cm前後が多く、深さはP1・2が140cm前後、P3が97cm、他が20cm~30cmである。主軸は、住居と炉の長軸がほぼ東西で、ピットの密度の少ない東側を出入口側と想定し、N-73°-Wに推定される。

遺物は南西側で多く出土したが、覆土の上層から下層まで分布がみられた。 図示した 1 ~ 45は縄文







第12図 SI013 (遺物 (2))

土器、 $46\cdot47$ は玦状耳飾、 $48\sim51$ は石器である。覆土下層から床面にかけて出土した遺物は、 $16\cdot21\cdot31\cdot40\cdot44$ 等である。

縄文土器片は約8,200g出土した。分類・型式については、 $1\cdot 2$ が1群 (早期条痕文系)、 $3\sim 7$ は2群 1類 (前期黒浜式)、8は2群 2類 (諸磯 c 式)、9は2群 3類 (十三菩提式)、 $10\cdot 11$ は2群 4類 (浮島 $\mathbb{I}\sim\mathbb{I}$ 式)、 $12\sim 15$ は2群 5類 (興津式)、 $16\sim 22$ は2群 6類 (前期末縄文施文)、 $23\sim 25$ は3群 2類、26は隆起線に単列の角押文、有節線文が付随する胴部の3群 3類 ($23\sim 26$: 阿玉台 \mathbb{I} b式)、 $27\sim 31$ は 3群 4類 (阿玉台 \mathbb{I} 式)、32は単列の角押文、有節線文が施される胴部、または複列の角押文、有節線文が施される胴部の3群 7類、33は 8類、 $34\sim 37$ は 9類、38は基本的に無文であるが輪積修正痕が認められる胴部(一部口縁部含む)の10類、 $39\sim 41$ は11類($32\sim 41$: 阿玉台 \mathbb{I} b $\sim \mathbb{I}$ 式)、42は 3群 12類(阿玉台 $\mathbb{I}\sim\mathbb{I}$ 式)、43は 3群 15類(阿玉台 \mathbb{I} 式)、44は阿玉台式に併行する南東北〜北関東地域の七郎内 \mathbb{I} 群 土器を含む 3群 18類、45は 3群 18類・19類(中峠式)に比定され、前期後葉〜中期前葉阿玉台 \mathbb{I} b $\sim \mathbb{I}$ 式 主体である。

土製品の玦状耳飾 (46・47) はいずれも破片である。46は現長41mm・最大幅20mm・最大厚 7 mm、47は現長18mm・最大幅10mm・最大厚18mmである。いずれも無文であるが、周辺出土土器群の様相から、2 群 4 類 (浮島〜興津式) または 2 群 5 類 (前期末縄文施文土器) に推定される。

石器は総計33点出土した。48・49は石鏃である。炉の北側に近接して出土している。48は二等辺三角形を呈し、脚部の抉りが深い。49は脚部の残存品である、48の脚部と類似した形態をしている。50・51は磨製石斧である。50は定角式磨製石斧の頭部残存品である。下部の破損面を打面として縁辺に細かい剥離面がみられることから、SI010の34と同様に敲石に転用したものと推測される。51は表面右側に研磨面がわずかに残っており、破損した磨製石斧から剥離されたものと推測される。

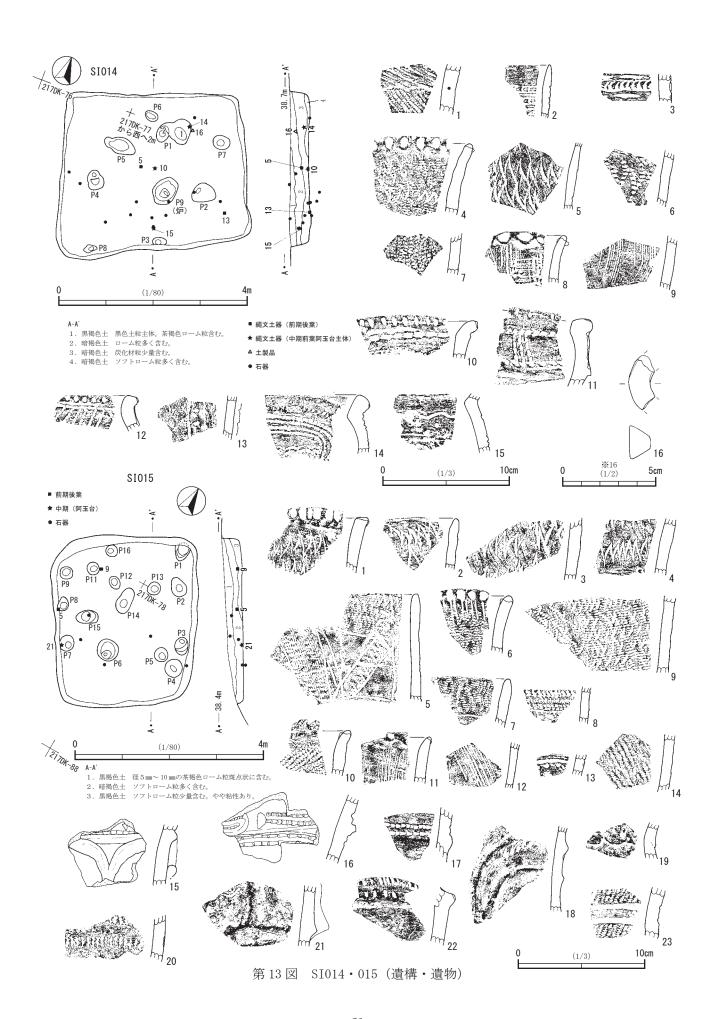
SI014 (第13図、第3~5表、図版5·13·18)

北区南東部の217DK-76他に位置し、縄文時代住居跡SI017と重複する。方形で、短軸3.20m・長軸3.92m・深さ0.40m前後である。覆土は炭化材粒を少量含む暗褐色土のレンズ状堆積である。明確な炉は検出されなかったが、中央やや南寄りのP9は49cm×65cmとやや大きく、深さは80cmとあるが、位置的には上部は炉であった可能性も考えられる。他のピットは9か所で、短径は、P1-1・2・5・7が40cm前後、他は20cm~30cm、深さはP1-2が37cm、P2・4が50cmほど、他が10cm~30cmである。主軸は、北方向のN-22°-Wまたは西方向のS-68°-Wに推定される。

遺物は、住居の中央部を中心に覆土の上層から下層まで出土している。図示した出土遺物の $1 \sim 15$ は縄文土器、16は玦状耳飾である。下層出土のものは $10 \cdot 13 \cdot 14$ である。

縄文土器片は約2,200g出土した。分類等については、1 は 2 群 1 類(黒浜式)、2 ~ 6 は 2 群 4 類(2 ・ 3 : 浮島 I 式、4 ~ 6 は浮島 I ~ I 式)、7 ・ 8 は 2 群 5 類(興津式)、9 は 2 群 8 類(前期後半)、10 ~ 13 は 3 群 2 類(阿玉台 I b式)、14 は 3 群 4 類(阿玉台 I 式)、15 は 3 群 8 類(阿玉台 I b ~ I 式)に比定され、前期後葉~中期前葉が主体である。

土製品の玦状耳飾 (16) は破片で、最大長29mm・最大幅11mm・最大厚18mmで、無文であるが、周辺出土 土器群の様相から、浮島式〜興津式または前期末縄文施文土器の時期に推定される。



SI015 (13図、第3·4表、図版5·13)

北区南東部のSI014の東側で217DK-77他に位置する。方形で、南端部は急斜面にかかり不明瞭である。規模は短軸3.00m・長軸3.55m、深さは0.35m前後である。覆土は、黒褐色土と暗褐色土のレンズ状堆積である。炉は検出されず、ピットは15か所で、P1~P4、P7~P9、P16が壁際に並ぶ。直径30cm前後が多く、深さはP1・6が73cmほど、P2が46cmである。主軸は、近接する方形の住居SI014とほぼ同方向と想像されることも合わせて、N-30°-Wに推定する。

遺物は少量だが、竪穴住居の中央部寄りで覆土の上層から下層まで出土した。図示した出土遺物の1~23は縄文土器であり、約1,800g出土した。覆土下層から床面にかけての出土は、5・9・21等である。1~4は2群4類(浮島Ⅱ~Ⅲ式)、5~9は2群5類(興津式)、10は2群6類(前期末縄文施文)、11・12は2群8類(前期後半)、13・14は中期初頭の3群1類(13:五領ヶ台Ⅱ式、14:五領ヶ台Ⅱ式~阿玉台 I a式)、15は3群2類(阿玉台 I b式)、16・17は3群4類(阿玉台 II 式)、18は3群9類、19は3群10類(いずれも阿玉台 I b~Ⅱ式)、20は3群11類(阿玉台 I b~Ⅲ類)、21は3群12類(阿玉台 II~Ⅲ式)、22は3群14類(阿玉台 II~Ⅳ式)、23は3群19類(加曽利E式)に比定され、前期後葉~阿玉台 II 式が主体である。

SI016 (第14図、第3~5表、図版6·14·18)

北区北西部の217DK-20他に位置する。壁面が検出できなかったが、ピットが楕円形に並ぶ状況から、短軸5.15m・長軸6.00m程に推測された。覆土は炭化材粒・焼土粒を少量含む暗褐色土で、残存する中央部分の深さは16cm前後。炉は東寄りで56cm×66cmの楕円形、ピットは13か所で、短径20cm~30cmのものが多く、深さはP3・9・13が40cm前後と深いが、他は15cm~20cm前後と浅い。主軸は、炉の位置が東寄りなので、S-66°-Eに推定するが、他の住居とは異なる。

遺物は覆土の残存する中央部で出土した。 $1\sim4$ は縄文土器、5 は土製円板である。 2 以外は覆土下層から床面出土である。

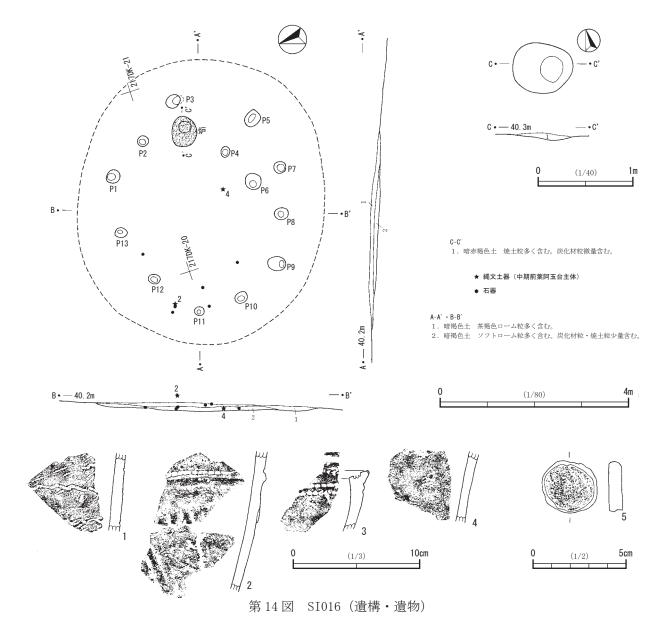
縄文土器片は約500g出土した。1は2群6類(前期末縄文施文)、2は3群2類(阿玉台Ib式)、3は3群4類(阿玉台Ⅱ式)、4は無文胴部の3群16類(阿玉台式)に比定される。

土製円板(5)は、最大径29.0mm、最大厚7.2mmで、無文であるが、周辺出土土器群の様相から、阿玉台式土器の時期に推定される。

SI017 (第15·16図、第3·4表、図版6·14)

北区南部の217DK-75他に位置する。北東部で縄文時代住居跡SI004と重複し、南東端を近世土坑墓SK004が切る。長楕円形で、短軸4.30m・長軸6.20m・深さ0.25m前後である。覆土は黒褐色土のレンズ状堆積である。炉は検出されず、ピットは19か所で、北辺から西辺の壁近くに並ぶことから、東辺のピットはSI004とSK005に切られて消滅したと推測される。P3・5・12・15の短径は50cm~70cmで、他は20cm~50cm、深さはP3・4・5-2が30cm前後とやや深いが、他は10cm~20cm前後と浅い。主軸は長楕円形の長軸方向として、 $S-14^\circ$ -Wに推定する。

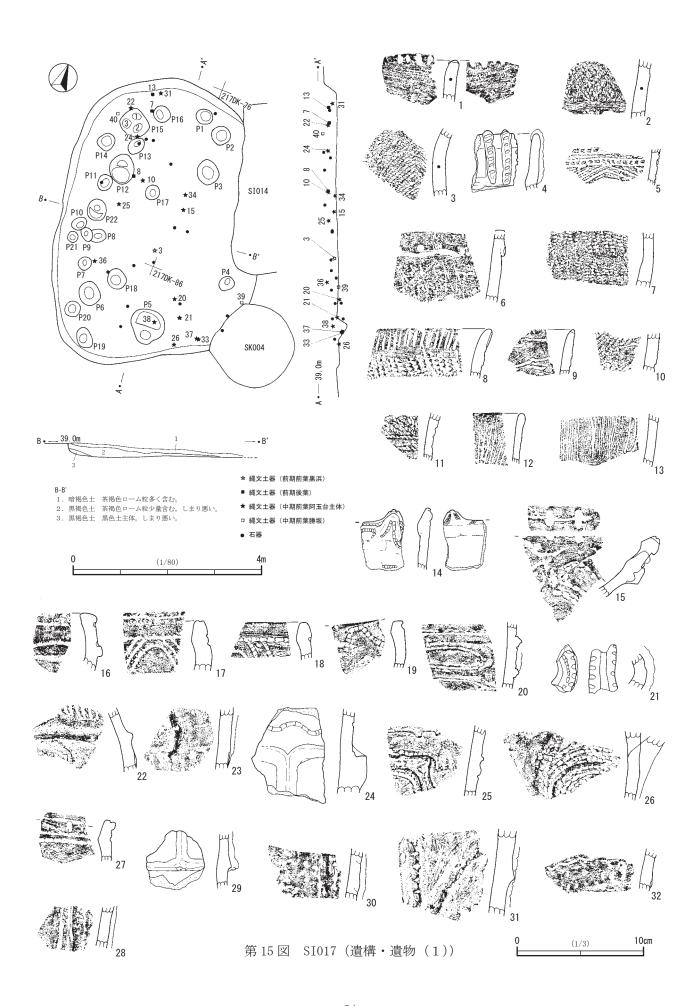
遺物は、覆土の上層から床面にかけて全体に分布して出土した。縄文土器片は約5,500g出土した。図示したものの $1 \sim 41$ は縄文土器である。下層から床面の出土は、 $15 \cdot 20 \cdot 26 \cdot 34 \cdot 39$ 等である。1は1群(条

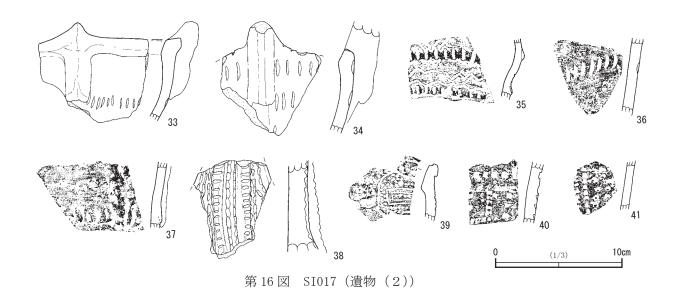


痕文系)、 $2 \cdot 3$ は2群 1類 (黒浜式)、4は2群 2類 (諸磯 c式)、5は2群 4類 (浮島 I式)、 $6 \cdot 7$ は 2群 4類 (浮島 II $\sim II$ 式)、8 は 2群 5類 (興津式)、 $9 \sim 11$ は 2群 6類 (前期末縄文施文)、 $12 \cdot 13$ は 2群 8類 (前期後半)、14は 3群 1類 (阿玉台 I a式)、 $15 \sim 22$ は 3群 2類、 $23 \sim 25$ は 3群 3類 ($15 \sim 25$:阿玉台 I b式)、 $26 \cdot 27$ は 3群 4類、28は隆起線に複列の角押文、有節線文が付随する胴部の 3群 5類($26 \sim 28$:阿玉台 II式)、 $29 \sim 31$ は 3群 9類、32は 3群 10類、 $33 \sim 37$ は 3群 11類 ($29 \sim 37$:阿玉台 I b $\sim II$ 式)、38は枠状文(枠状区画)に沈線文が付随する口縁部の 3群 14類 (阿玉台 $II \sim IV$ 式)、 $39 \sim 41$ は 3群 18類 (勝坂式)に比定される。前期後葉もあるが、主体は阿玉台 I b $\sim II$ 式である。

SI018 (第17回、第3 · 4 · 6 · 7表、図版6 · 14 · 19)

北区南部の217DK-74他に位置する。南北端が上層確認トレンチにかかり、壁が消滅している。楕円形で、規模は推測で短軸5.50m・長軸7.20m、深さは $0.1m\sim0.4m$ である。炉は検出されず、ピットは49か所で、環状にまとまるピット(柱穴)群が 2 群あり、北側で東西径約 4 m・南北径約 3 mの楕円形状に、南側ではP30を中央に直径約 4 mの環状に並び、西側も外周する様に並び、両環状柱穴群外側の壁際にも配置さ





れる。これは、ほぼ円形の住居のいずれかが廃棄された後すぐに隣接して造られたが、2軒をつなげて更に拡張している可能性もあろう。柱穴は径 $30\text{cm} \sim 40\text{cm}$ が多く、深さはP2が120cmと深く、 $P21\cdot 24\cdot 26$ が30cm程、他は $15\text{cm} \sim 20\text{cm}$ 前後である。南北のピット群の規模は、環状に配置されるものは共通して小型で、南北の差は大差ない。北西部でSK003が覆土を切るが、P2も別の遺構の可能性も考えられる。主軸は、SI018が 1 軒とした場合の楕円形の長軸方向を基準として、N-5 $^{\circ}$ -Wに推定する。

遺物は少量だが、北側の覆土下層で多く出土した。図示した出土遺物の $1 \sim 10$ は縄文土器、11は石器である。下層から床面出土のものは9である。

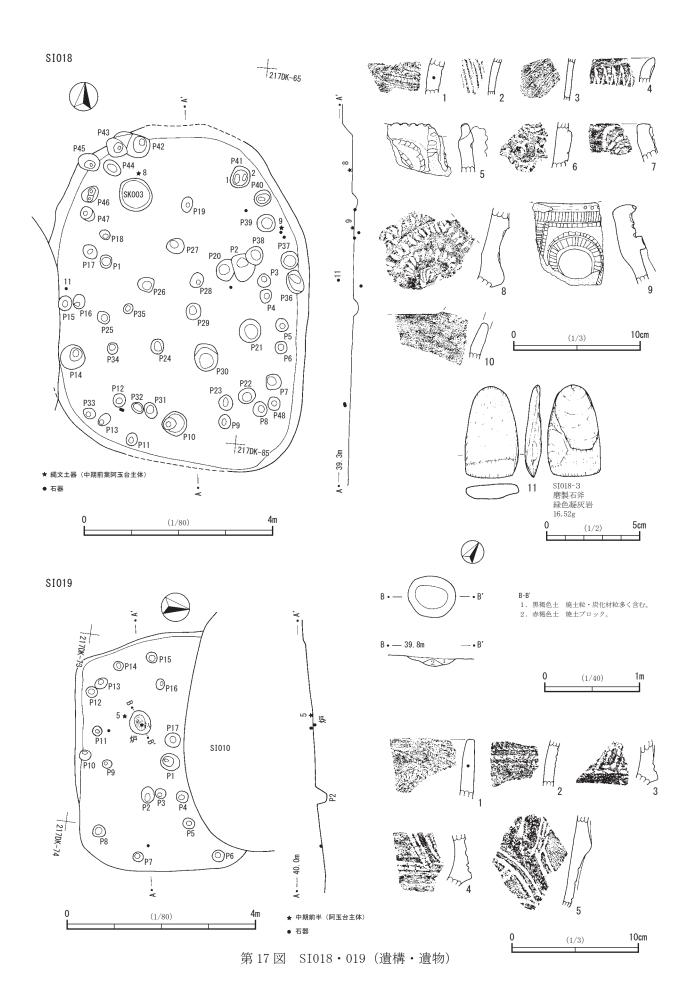
縄文土器片は約900g出土した。1は2群1類(黒浜式)、2・3は2群2類(諸磯c式)、4は2群4類(浮島Ⅱ~Ⅲ式)、5は3群2類、6は3群3類(5・6:阿玉台Ib式)、7は3群4類(阿玉台Ⅱ式)、8は枠状文+幅広爪形文、隆起線、ゾウの鼻状モチーフ、9は枠状文+キャタピラ文、単列角押文、円環状貼付文+単列角押文、円形竹管刺突文の3群14類(阿玉台Ⅲ~Ⅳ式)、10は無文の胴部で、広義の阿玉台式の3群16類に比定される。全体量は少ないが、前期後葉~中期前葉阿玉台式期である。

石器は総計9点出土した。11は小型の定角式磨製石斧である。西側壁付近の覆土上部から出土している。 表面下部の刃部の研磨は顕著に行われており、鋭利な刃部が形成されている。裏面上部は使用時に破損し たと想像される。

SI019 (第17回、第3·4表、図版6·14)

北区南部の217DK-63他に位置し、北部を縄文時代住居跡SI010に切られる。推定隅丸方形で、規模は短軸推測3.60m・長軸5.00m・深さ0.12m前後である。炉は西寄りで規模は44cm×52cmの楕円形、ピットは17か所で、径20cm前後が多く、深さはP13が77cm、P1・2が40cm前後と深いが、他は5cm~20cm前後と浅い。主軸は住居と炉の長軸がほぼ東西方向で、炉が西寄りであることから、S-80°-Wに推定する。

遺物は少量で、炉付近の床面近くで多く、縄文土器片が約300g出土した。1は2群1類(黒浜式)、2は2群4類(浮島II式)、3~5は3群4類(阿玉台II式)に比定される。



— 26 —

SI020 (第18図、第3 · 4 · 6 · 7表、図版6 · 15 · 19)

北区中央部の217DK-54他に位置し、東部を古墳時代住居SI011に切られる。楕円形で、短軸3.80m・長軸推測4.20m・深さ0.52m前後である。炉は検出されず、ピットは23か所で、北~西~南壁沿いに並ぶ。SI011との境にも並ぶが、或いは、後世SI011建築の際にSI020の覆土崩落防止のために柵や板で補強した可能性も考えられる。ピットの短径はP4-3・9が40cm余、他は径20cm~30cmが多く、深さはP7が137cm、P9が82cm、P10が59cmと深いが、他は10cm~25cm前後と浅い。南端部では土坑SK010が壁や覆土を切る。主軸は不明である。

遺物は少量で、覆土の上層から下層まで出土した。図示した遺物の1~22は縄文土器、23は石器である。 1・19は中央部の下層で出土した。

縄文土器片は約1,000g出土した。 $1 \sim 3$ は 2 群 1 類(黒浜式)、 $4 \cdot 5$ は 2 群 2 類(諸磯 c 式)、 $6 \cdot 7$ は 2 群 4 類(浮島 $\Pi \sim \Pi$ 式)、 8 は 2 群 5 類(興津式)、 $9 \sim 11$ は 2 群 6 類(前期末縄文施文)、 $12 \sim 14$ は 2 群 8 類(前期後半)、 $15 \sim 17$ は 3 群 1 類($15 \cdot 16 :$ 五領ヶ台 Π 式、 17 : 大木 7 a 式)、 18 は 3 群 2 類(阿玉台 Π b 式)、 19 は 3 群 3 類、 20 は 3 群 4 類、 21 は隆起線に複列の沈線文が付随する胴部の 3 群 6 類($19 \sim 21$:阿玉台 Π 式)、 22 は 3 群 19 類(加曽利 E 式)に比定され、前期後葉主体に後期前葉も存在する。

石器は総計4点出土した。23は石鏃である。小型で正三角形を呈し、脚部の抉りは浅い。北側壁付近の 覆土上部から出土している。

SI021 (第19図、第3~7表、図版7·15·18·19)

北区中央部東寄りの217DK-47他に位置する。不整円形で、短軸4.95m・長軸5.30m・深さ0.20m前後である。 炉は検出されず、ピットは30か所で、西~南~東の壁沿いや近くに多く、北西-南東方向に約4m・北西-南東方向に約3mの楕円形状に並ぶことから、その西~北~東部を拡張した可能性も推測できる。ピットは径30cm前後が多く、深さはP10・17が50cm台と深いが、他は15cm~20cm前後と浅い。南端部でSK008が覆土と床を切るが、北西端のP25も本住居跡とは別の遺構の可能性も考えられる。主軸は、北西方向を主体に拡張されていると推測されるので、仮にN-19°-Wと推定する。

遺物は、やや南側主体に覆土の上層から下層まで出土した。図示した出土遺物の $1\sim13$ は縄文土器、14は土製円板、15は石器である。下層から床面にかけて出土したものは $4\sim6$ である。

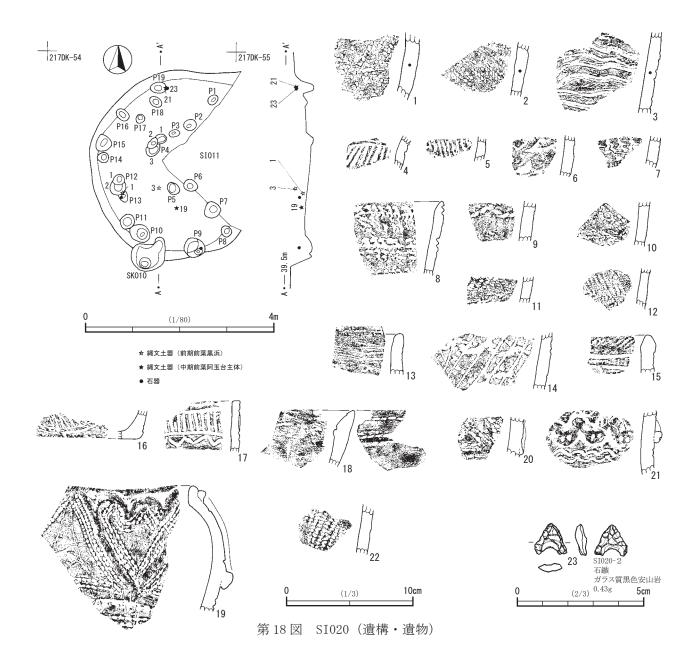
縄文土器片は約1,300g出土した。 1 ・ 2 は 2 群 4 類 (浮島 Ⅱ ~Ⅲ式)、 3 は 2 群 5 類 (興津式)、 4 ・ 5 は 2 群 6 類 (前期末縄文施文)、 6 は 3 群 2 類 (阿玉台 I b 式)、 7 ・ 8 は 3 群 4 類 (阿玉台 II 式)、 9 は 3 群 7 類、10は 3 群 9 類 (9・10:阿玉台 I b ~ Ⅱ 式)、11は 3 群 11類 (阿玉台 I b ~ Ⅲ式)、12・13は阿玉台式に併行する勝坂式の 3 群 18類に比定される。数は少ないが、阿玉台式主体で前期土器もある程度含む。

土製円板(14)は、最大径26.8mm・最大厚7.5mmである。施文は縄文で、中期に推定される。

石器は総計12点出土した。15は定角式磨製石斧である。刃部は丸みを持ち、両側縁の調整加工は剥離面が新しいことから、刃部や側縁を再加工しながら使用したものと推測される。

SI023 (第20図、第3 · 4 · 6 · 7 表、図版7 · 15 · 19)

北区中央部東寄りの217DK-66他に位置する。楕円形で、短軸3.50m・長軸4.54m・深さは0.16m前後である。

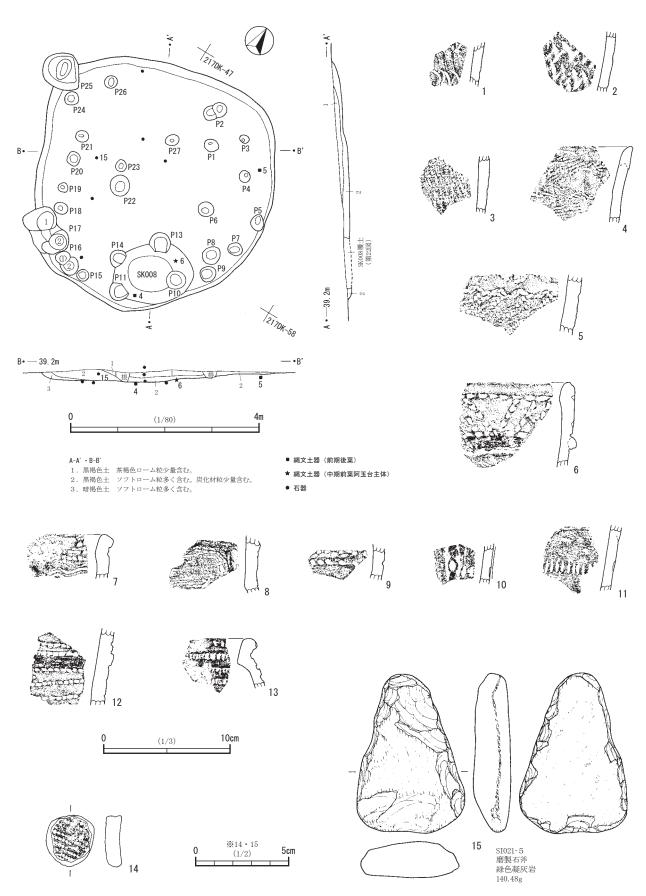


覆土は黒褐色土のレンズ状堆積である。炉は検出されず、ピットは18か所で、北東側にP4を中心とした東西約3m・南北約2mの楕円形にややまとまり、住居の平面形も北東部がやや突出することから、小規模な住居を西及び南側に拡張した可能性も考えられる。ピットは径30cm前後が多く、深さはP2・9が20cm前後であるが、他は10cm前後と浅い。主軸は、南北のN-2°-Wまたは東西のS-88°-Wに推定される。

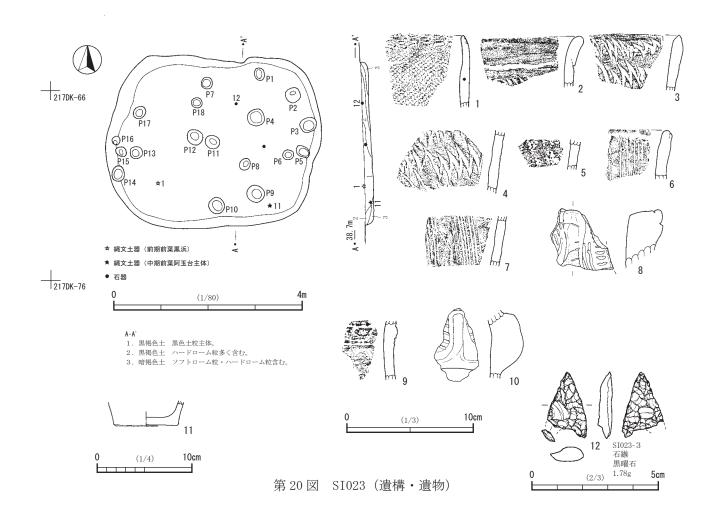
遺物は少量であるが、住居の東側覆土で多く出土した。図示した出土遺物の $1\sim11$ は縄文土器、12は石器である。床面近くで出土したものは11である。

縄文土器片は約800g出土した。 1 は 2 群 1 類(黒浜式)、 $2 \sim 5$ は 2 群 4 類(浮島 $\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$ 式)、 $6 \cdot 7$ は 2 群 7 類(前期後半)、8 は 3 群 4 類、9 は 3 群 5 類($8 \cdot 9$: 阿玉台 \mathbb{I} 式)、10 は 3 群 4 類(阿玉台 \mathbb{I} 式)、11 は阿玉台式土器の底部である 3 群 17 類に比定される。数は少ないが、浮島 $\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$ 式、阿玉台 \mathbb{I} 式主体である。

石器は総計4点出土した。12は二等辺三角形を呈した石鏃で、脚部の抉りが浅い。左脚部は破損している。



第19図 SI021 (遺構・遺物)



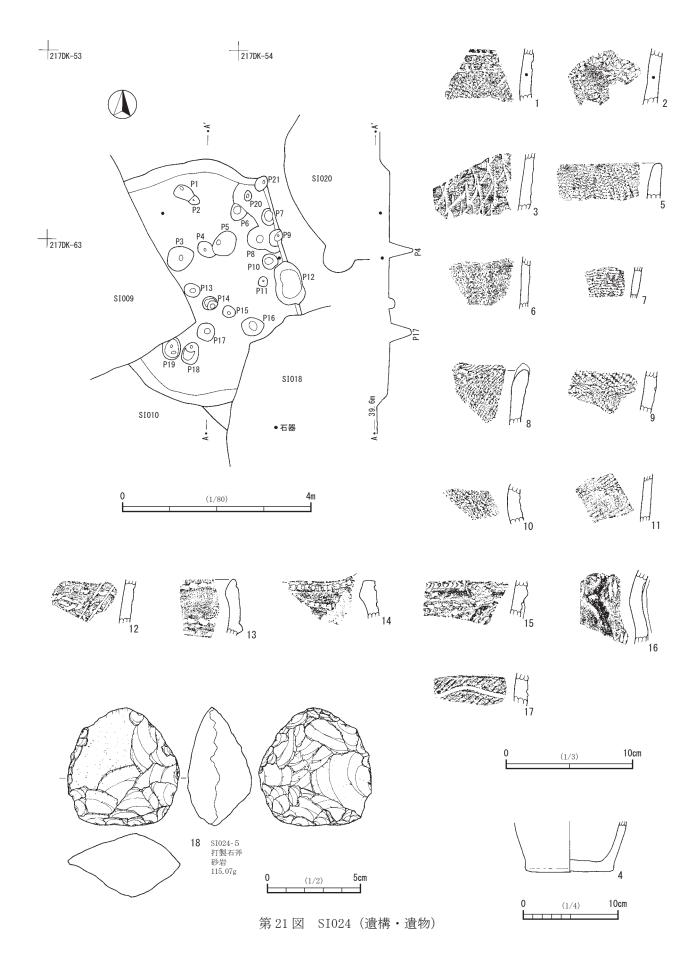
SI024 (第21図、第3 · 4 · 6 · 7表、図版7 · 15 · 19)

北区中央部の217DK-63他に位置し、西部を古墳時代住居SI009に切られる。楕円形で、規模は推定短軸 4.10m・長軸5.20m、深さは0.30m前後である。炉は検出されず、ピットは13か所で、東側壁が直線状でピットも並ぶほかは、特に規則性はない。P8・12は短径50cm前後、他は径20cm~40cm台が多く、深さはP $3\cdot 9\cdot 13$ が40cm前後と深いが、他は15cm~20cm前後と浅い。主軸は、楕円形の長軸方向として、N- 20° -Wに推測する。

遺物は少量だが、住居の北寄りの覆土で多く出土した。図示した出土遺物の $1 \sim 17$ は縄文土器、18は石器である。

縄文土器片は約800g出土した。 $1\cdot 2$ は 2 群 1 類(黒浜式)、 3 は 2 群 4 類(浮島 $\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$ 式)、 4 は 2 群 4 類(浮島式の底部)、 $5\sim 7$ は 2 群 5 類(興津式)、 $8\sim 12$ は 2 群 8 類(前期末縄文施文)、 $13\cdot 14$ は 3 群 2 類(阿玉台 \mathbb{I} b式)、 15 は 3 群 3 類(阿玉台 \mathbb{I} 式)、 16 は 3 群 9 類(阿玉台 \mathbb{I} b $\sim \mathbb{I}$ 式)、 17 は 3 群 19 類(加曽利E式)に比定される。少量であるが、前期後葉主体で阿玉台式が若干入る。

石器は総計7点出土した。18は打製石斧である。撥形の形態を呈している。裏面の上下両端の調整加工が入念に施されている。



第3節 土坑等

SK001 (第10·22図、第4表、図版15)

北区南部の217DK-72に位置し、縄文時代住居跡SI010の西側壁・覆土・床面を切る。径1.08m程の円形で、深さ0.2mほどで、西寄りに径30cm程、深さ20cmのピットが掘られる。性格は不明である。

縄文土器片が約100g出土した。図示した出土遺物の $1 \sim 3$ は縄文土器である。1は2群6類(前期末縄文施文)、2は3群3類(阿玉台 I b式)、3は3群18類(勝坂式)に比定される。

SK002 (第22図、第4表、図版7·15)

北区中央部西寄りの217DK-42に位置する。短軸1.20m・長軸1.53mの長方形で、深さ0.65mである。覆土は炭化材粒・焼土粒を少量含む暗褐色土である。性格は不明であるが、東側7mほどの位置にある近世方形土坑SK006との関連もある可能性がある。

縄文土器片が約300g出土した。1は2群6類(前期末縄文施文)、2は3群2類、3は3群4類(2・3:阿玉台Ⅱ式)、4は3群11類(阿玉台Ⅰb~Ⅲ式)、5は3群19類(加曽利E式)に比定される。

SK003 (第17図、図版 6)

北区中央部の217DK-64に位置する。縄文時代住居跡SI018の北側壁・覆土・床面を切る。径70cm前後の円形で、深さ13cm程である。性格は不明であるが、SK001と同様の遺構の可能性が推測される。遺物はSI018として取り上げられており、本遺構に帰属するものは確定できない。

SK005 (第23·24図、第4~7表、図版7·16·18·19)

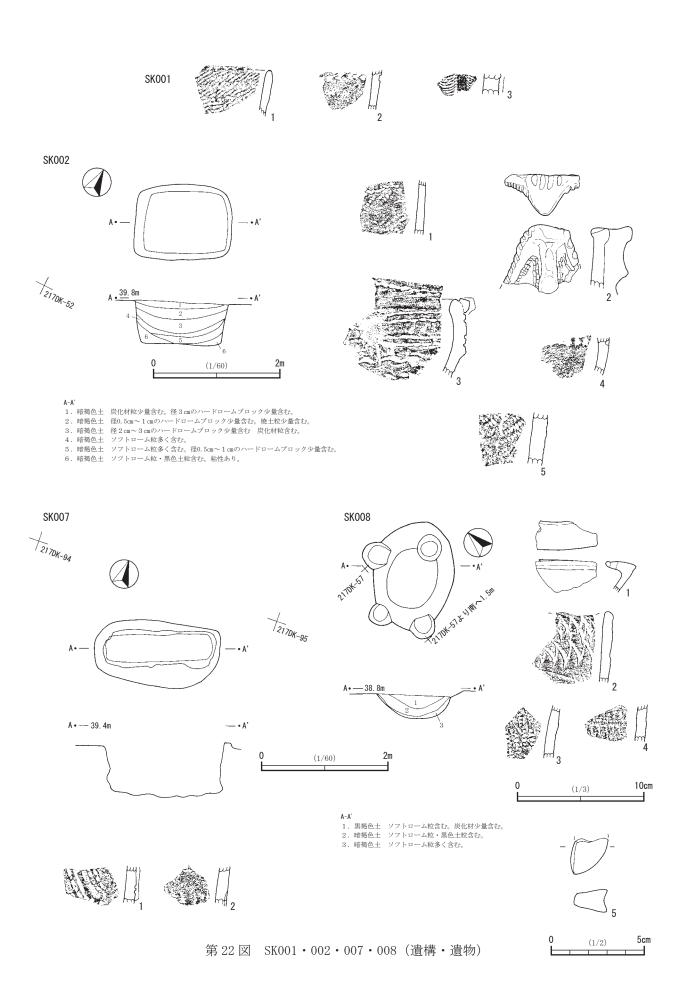
北区中央部の217DK-44に位置するフラスコ状土坑である。開口部は径1.20m前後の円形で、底面までの深さは1.6m程である。開口部から深さ60cm程ですぼまるが、以下徐々に広がり、深さ1.2m程の位置で径1.2m程から周囲に広がる。広げられた空間の径は2.0m前後、高さは40cm前後である。木の実等の貯蔵穴に推測される。

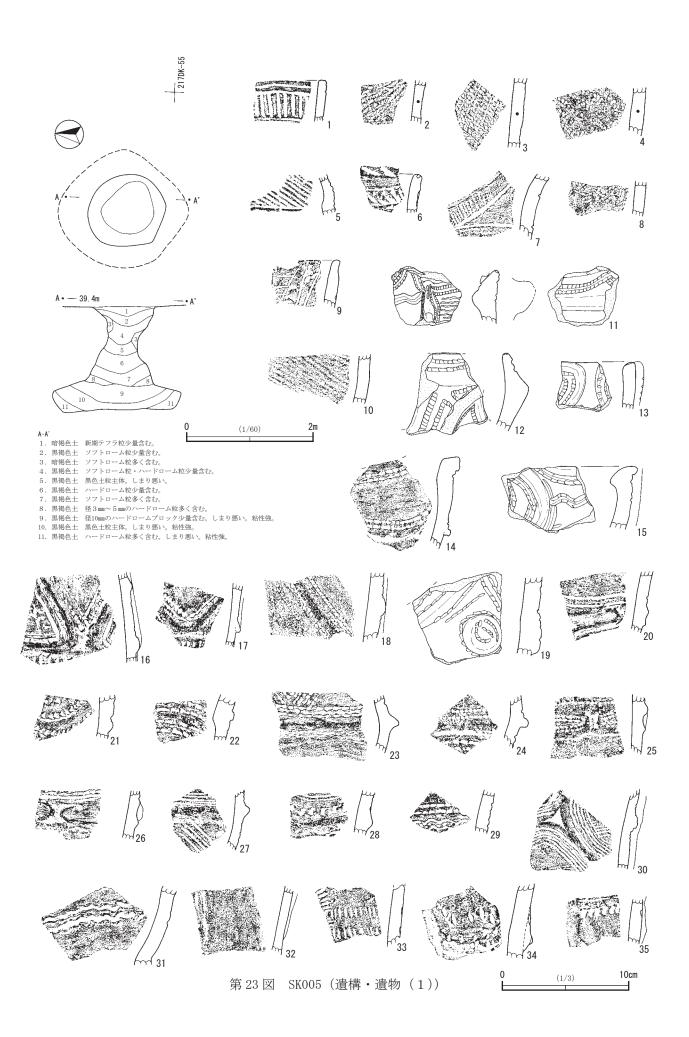
図示した出土遺物の1~48は縄文土器、49~51は土器片錘、52は石器である。

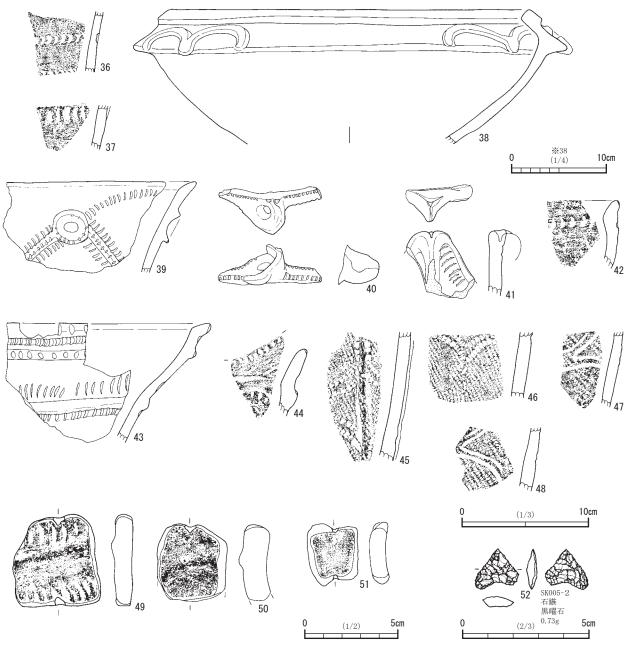
縄文土器片は約6,200g出土した。 1 は 1 群 (田戸下層式)、2 ~ 4 は 2 群 1 類 (黒浜式)、5 は 2 群 2 類 (諸 磯 c 式)、6 は 2 群 4 類 (浮島 II ~ III 式)、7 は 2 群 5 類 (興津式)、8 は 2 群 6 類、9 は 2 群 7 類 (8・9:前期末縄文施文)、10は 3 群 1 類 (五領ヶ台式)、11 ~ 27は 3 群 4 類、29は 3 群 5 類、28・30は 3 群 6 類、31は 3 群 8 類、32は 3 群 9 類 (11 ~ 32:阿玉台 II 式)、33 ~ 37は 3 群 11類 (阿玉台 I b ~ II 式)、38・39は 3 群 12類 (阿玉台 II ~ III 式)、40は 3 群 13類、41 ~ 43は 3 群 15類 (40 ~ 43は 阿玉台 II ズ)、44は 3 群 15類 (阿玉台 II ~ III 式)、45 ~ 48は 3 群 18類 (七郎内 II 式) に比定される。阿玉台 II ~ III 式主体であるが、前期後葉も少量含む。

土器片錘の49は最大長48.0mm・最大厚11.2mm、50は現長40.5mm・最大厚14.8mm、51は最大長33.0mm・最大厚8.5mmである。49は隆起線文と連続爪形文、50は隆起線文で、阿玉台 I b~II 式土器に、51は無文だが、周辺の出土遺物の傾向から阿玉台式土器に推定される。

石器は総計7点出土した。52は石鏃である。正三角形を呈し、脚部の抉りは浅い。右脚部の先端は破損している。







第24図 SK005 (遺物 (2))

SK007 (第22図、第4表、図版7·16)

北区南部の217DK-94に位置する長楕円形の陥穴である。短軸上端0.80m ~ 1.00 m、下端0.40m、長軸上端2.00m、下端1.68m、深さ0.85mである。

縄文土器は約30g出土した。 $1\cdot 2$ は縄文土器である。 1 は 3 群 5 類(阿玉台 II 式)、 2 は 3 群 1 1類(阿玉台 I b \sim II 式)に比定される。

SK008 (第22図、第4·5表、図版7·16)

北区中央部東寄りの217DK-57に位置し、縄文時代住居跡SI021の南東部の覆土・床面を切る。短径1.25m・長径1.70mの楕円形で、深さは0.35m、内部のピットはSI021の柱穴である。覆土は炭化材を少量

含む黒~暗褐色土である。性格は不明である。

図示した出土遺物の $1 \sim 4$ は縄文土器、5 は玦状耳飾である。縄文土器片は70g出土した。1 は 2 群 2 類 (諸磯 c 式)、2 は 2 群 4 類 (浮島 $\Pi \sim \Pi$ 式)、 $3 \cdot 4$ は 2 群 5 類 (興津式) に比定される。

玦状耳飾 (5) は破片で、最大長23mm・最大幅12mm・最大厚16mmで、無文であるが、周辺出土土器群の 様相から浮島式~興津式、前期末縄文に推定される。

SK010 (第18図、図版5)

北区中央部の217DK-64に位置する。縄文時代住居跡SI020の南端部の壁・覆土・床面を切る。径60cm前後の不整円形で、北側に続く突出部はSI020のピットと重複したものと推測される。深さ40cm程で南寄りに径20cm程・深さ10cm程のピットがある。性格不明であるが、内部に浅いピットを有する円形土坑としてSK001に類似する。遺物はSI020として取り上げられており、確定はできない。

ピット群 (第25図、第4表、図版4・16)

P 1 ∼ P14

北区南部の217DK-85・95他に位置する。直径40cm前後が多く、深さはP2が47cmであるが、他は $10cm\sim40cm$ である。図示した出土遺物の1はP4、2はP5出土の縄文土器である。1は3群 9類(阿玉台 I b $\sim II$ 式)、2は3群 2類(阿玉台 I b 式)に比定される。

$P15 \sim P22$

北区北部の217DK-34·44他に位置する。直径40cm前後が多く、深さはP17·22が120cm前後。P15が58cmだが、他は20cm前後である。

図示した出土遺物の3はP15、4・5はP17出土の縄文土器である。3は3群4類 (阿玉台Ⅱ式)、4は2群4類 (浮島Ⅲ式)、5は2群7類 (前期後半縄文施文) である。

第4節 遺構外出土遺物

縄文時代竪穴住居跡や土坑以外の、古墳時代以降の遺構やグリッドで取り上げられた遺物で、出土位置は観察表(第4表)だけでなく遺物の図(第26~29図)にも表記した。

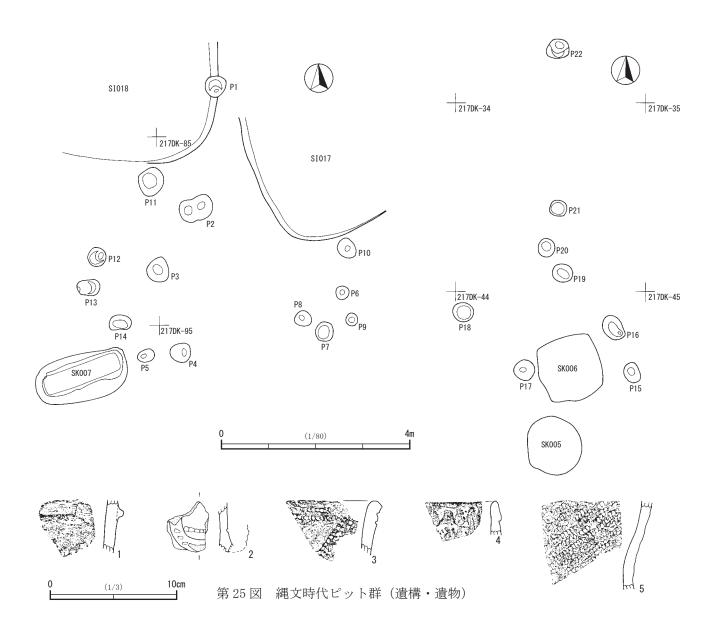
1 縄文土器 (1~99) (第26~29図、第4表、図版17·18·20) 以下、分類順に紹介する。

第1群 早期の土器

1は野島式、2は条痕文である。

第2群 前期の土器

3~13は1類(黒浜式)、14・15は2類(諸磯c式)、16~26・29・30は4類、27・28は8類(16~30:浮島Ⅱ~Ⅲ式)、31~42は5類(興津式)、43~50は6類(前期末縄文施文)である。17(第29図・図版20)は、口縁端部に刻み目、胴部に刺突文と波状貝殻文(ハマグリ)が施文される深鉢である。口縁直下の無文部に細沈線による線画(幅6mm~19mm、長さ87mm)が刻まれ、20mm左側には胴部より浅く小刻みな波状貝殻文(幅18mm前後、左方はナデにより消され土器の欠損もあるが現長52mm)が施される。上記の線画及び小刻みな波状貝殻文による表現は、左端部が角が2本生える動物の頭、中央部が胴部と前脚、



右端部が臀部・尾・後脚で、疾走または横たわる動物(鹿か)と草むらまたは柵を表した可能性も考えられる。

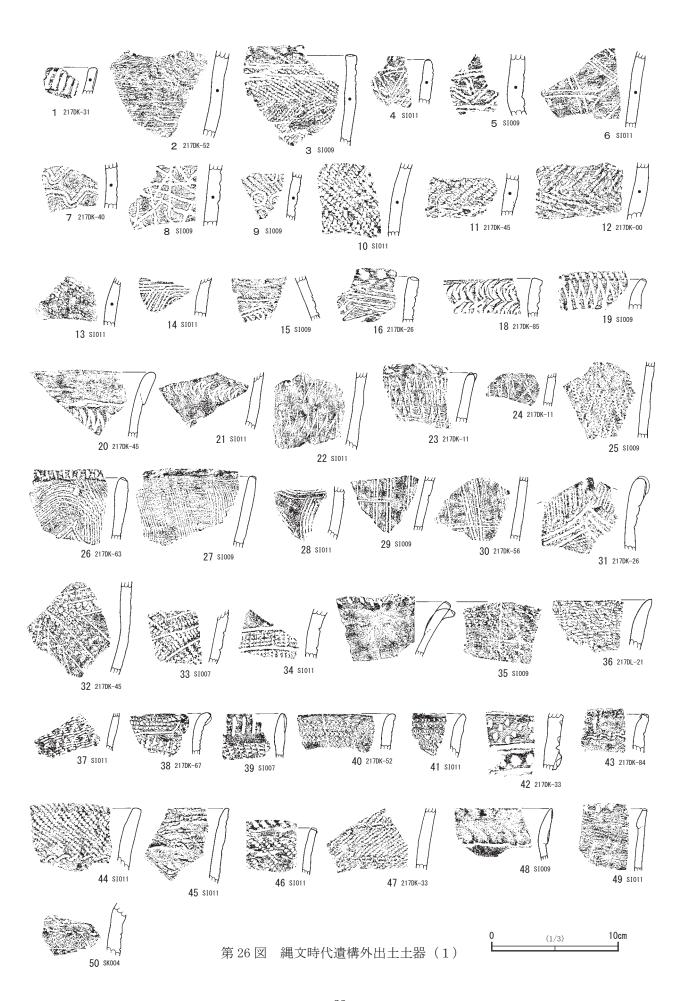
第3群 中期の土器

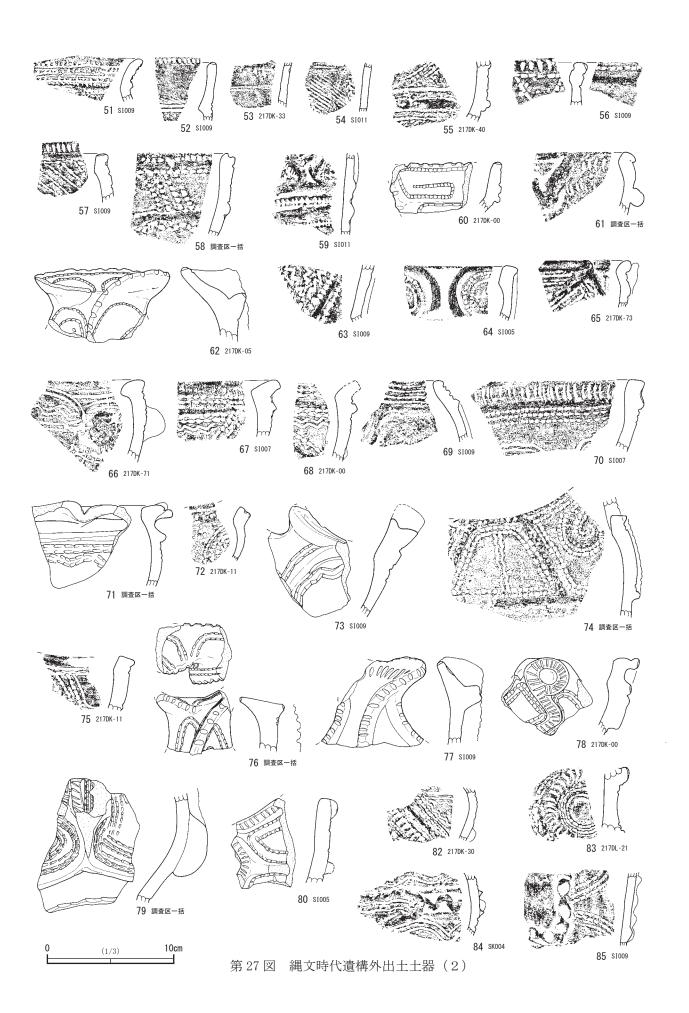
51~55は1類(五領ヶ台式)、56~62は2類、63は3類(56~63:阿玉台Ib式)、64~85・87・89は4類、86は5類(64~87・89:阿玉台II式)、88は12類(阿玉台II~II式)、90は9類(阿玉台Ib~II式)、91・95は11類、92は7類、93は8類、94は2類(91~95:阿玉台Ib~II式)、96は11類、97は12類(96・97:阿玉台II~II式)、98は15類(阿玉台II式)、99は17類(阿玉台式土器底部)、100・101は18類(勝坂式)、102~105は19類(加曽利E式)である。

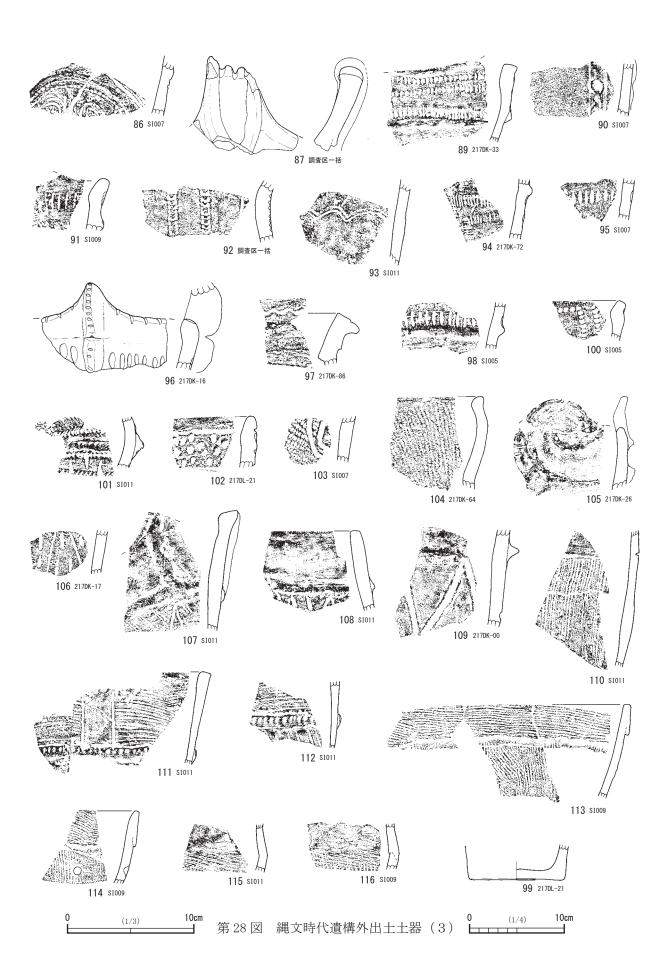
第4群 後期の土器

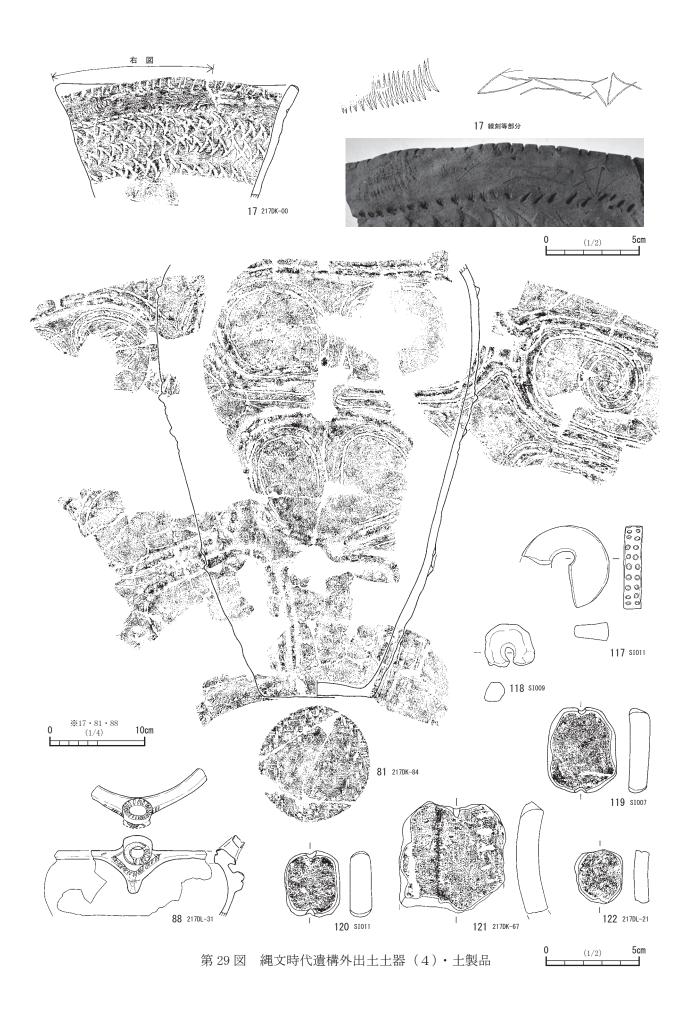
106~110は1類(106: 称名寺 II 式、107: 称名寺 II 式~堀ノ内1式、108·109: 堀ノ内1式、110: 称名寺 II 式~堀ノ内1式)、111·112は2類(後期後半粗製土器)である。

第5群 晩期の土器









113~116は5群(晩期後半)に比定される。

2 土製品(117~122)(第29図、第5表、図版18)

玦状耳飾・土器片錘・土製円板が出土した。

117・118は玦状耳飾で、117はSI011出土の最大長43.0mm・最大幅18.0mm・最大厚10.0mmの破片で、側面に 細竹管の刺突文が施される。118はSI009出土の小型の完形品であるが、手づくねで、最大長22.0mm・最大幅11.0mm・最大厚11.0mmである。いずれも古墳時代竪穴住居跡覆土出土であるが、浮島式〜興津式、前期 末縄文に推定される。

119~121は土器片錘で、119がSI007出土の最大長44.8mm・最大厚10.8mm、120がSI011出土の最大長35.0 mm・最大厚11.7mmである。いずれも無文であるが、前期後半~阿玉台式土器に推定される。121はグリッド(217DK-67)出土の現長55.5mm・最大厚11.6mmの破片で、連続瓜形文で、阿玉台 I b~II 式に比定される。122は土製円板で、グリッド217DK-21出土の最大長28.7mm・最大厚7.3mmである。無文であるが、阿玉台式土器に推定される。

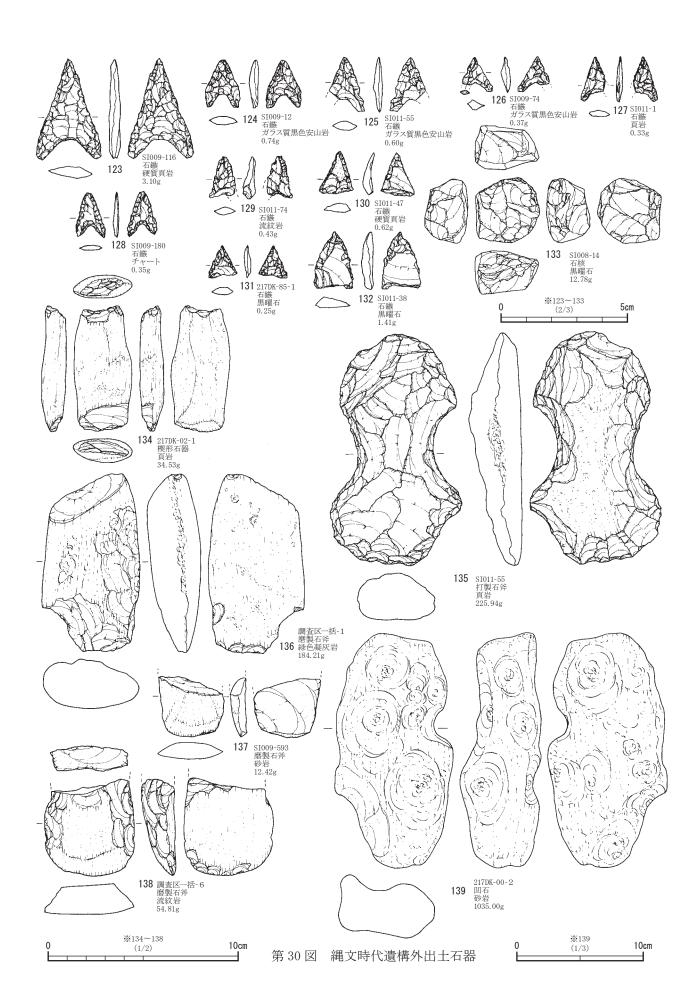
3 縄文時代石器 (第30図、第6・7表、図版19)

総計113点出土した。遺構外出土石器の大半は、縄文時代遺構の周辺から出土しており、遺構出土石器 と形態的に類似する特徴を持つ。このことから、帰属時期は遺構出土のものと同じ前期後葉浮島式期~興 津式期と中期前葉阿玉台式期である可能性が高い。123~132は石鏃である。二等辺三角形を呈し、脚部 の抉りが深い形態のもの(123~128)が主体を占める。この形態はSI013から出土している石鏃と類似す る。サイズ・石材は多様なもので構成されており、123は大型で硬質頁岩、124・125は中型でガラス質黒 色安山岩、126 ~ 128は小型でガラス質黒色安山岩・頁岩・チャートがそれぞれ用いられている。そのほ かの形態のものは、129・130が二等辺三角形を呈し、脚部の抉りが浅い。131・132は正三角形を呈し、脚 部の抉りがみられない。133は石核である。打面転移が頻繁に行われ、サイコロ状の形態をしている。134 は楔形石器である。扁平で細長い礫を素材として、上下両端に両極剥離が施されている。古墳時代に帰属 する可能性がある。礫面にわずかに擦痕がみられ滑石類の研磨に用いられたり、滑石を分割する際に両極 剥離に用いられた可能性がある。135は分銅形の打製石斧である。刃部の形状は非対称で、表面右下部等 は刃部が破損した後に刃部再生が行われたものと思われる。136~138は磨製石斧である。いずれも破損 品で全体形状が不明であるが定角式の形態をしているものと思われる。136は頭部と刃部が破損している が、下端部は刃部が破損後も刃部再生を行って使用していたことが窺える。137・138は器体中央部付近か ら破損し、鋭利な刃部が残存している。139は凹石である。軟質の砂岩が用いられており、凹痕は表面が 9か所、裏面が7か所みられる。

注

1 縄文土器の分類については、主に下記文献を参考とした。

上守秀明 1989「「阿玉台式期」その研究課題についての覚書 -主に東関東地域を中心として-」『千葉県立房総風土記の丘年報120-昭和63年度-』千葉県立房総風土記の丘 / 同氏ほか 1990『松戸市野見塚遺跡・前原 I 遺跡・根之神台遺跡・中内遺跡・中峠遺跡・新橋台 I 遺跡・串崎新田東里所在野馬除土手 -北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ-』(財) 千葉県文化財センター



第3表 縄文時代竪穴住居跡計測表(1)

			住居全	体 (m)					炉・ビ	ット等(c	cm)			
遺構	時 代	主軸	形状	短軸	長軸	深さ	番号	形状	上 短径	端 長径	下 短径	端 長径	深さ	備考
SI010	縄文時代	N-5°-W ?	円形	5.95	6.50	0.21	P1-1	楕円形	25	3≪1± 48			25	
							P1-2	楕円形	25	48				
							P2 P3	円形 円形	40 26	43 29				
							P4	円形	32	34	10	17	15	
							P5	楕円形 III IV	40 31	50 54				
							P6-1 P6-2	円形 円形	31	54				
							P7	円形	23	26	9	11	9	
							P8 P9	楕円形 円形	34 36	51 42				途中1段あり
							P10	円形	25	32				
							P11-1	円形	32	61	12	13	16	
							P11-2 P11-3	円形? 円形?	32 32	61 61				
							P12	円形	32	36				
	III Last II		no t = t.w/	()	()		P13	円形	33	39				
SI013	縄文時代	N-73°-W	隅丸長方形	(6.30)	(8.30)	0.25	炉 Pl	楕円形 楕円形	61 19	90 21				
							P2	円形	20	22	10	11	149	
							P3	長楕円形	22 12	43	6			内部に円形ピット
							P4 P5	楕円形 楕円形	18	26				
							P6	円形	18	19	6	11	27	
							P7	円形 梅田形	15	17				
							P8 P9	楕円形 円形	18 19	19				
							P10	楕円形	14	17	7	10	34	
							P11	楕円形 ITE	18	25 21				段差あり
							P12 P13	円形 円形	18 13	21 16				
							P14	円形	16	18	6	9	17	
							P15 P16	円形 円形	15 16	16 21				
							P16 P17	円形	16	21				
							P18	円形	16	17	11	13		
SI014	縄文時代	N-22°-W ± → 1+	方形	3.20	3.92	0.40	P1-1 P1-2	円形 楕円形	45 28	54 35				
		または S-68°-W					P2	楕円形	41	46				
							P3	楕円形	16	26	10	11	18	
							P4 P5	楕円形 楕円形	31 37	41 69				内部に段差あり 2つの柱穴の掘方が結合か
							P6	円形	23	28				
							P7	円形	45	54	20	30	9	
							P8 P9 (炉)	円形 楕円形	18 49	29 65				
SI015	縄文時代	N-30°-W	方形	3.00	3.55	0.35	P1	楕円形	27	36				壁奥に入る
							P2	楕円形	32	43	13	15	46	
							P3 P4	楕円形 円形	24 35	33 39				
							P5	円形	27	29				
							P6	円形	41	45				主柱穴か
							P7 P8	円形 円形	29 19	36 28				
							P9	円形	26	28				
							P10	円形	25	27	11			
							P11 P12	円形 円形	24 25	25 29				
							P13	円形	24	28				
							P14	長楕円形	24	56	17	18	16	
SI016	縄文時代	S-66°-E	楕円形	(5.15)	(6.00)	0.16	P15 炉	楕円形 楕円形	27 56	43 66				
				,,,,,,,			P1	円形	26	29	17	19	24	
							P2	円形	21	23				
							P3 P4	円形	28 19	32 20				斜めに入る
							P5	円形	29	33	12	18	19	
							P6 P7	円形	33	35				
							P8	円形	23 27	25 28				
							P9	楕円形	29	37	10	14	43	
							P10 P11	円形 円形	24 19	26 20				
							P11 P12	円形	21	20				
	tm						P13	円形	21	23	7	9	38	
SI017	縄文時代	S14°-W	長楕円形	4.30	6.20	0.25	P1 P2	円形	32 39	35 41				
							P2 P3	円形	39 50	53			31	
							P4	円形	31	33	7	13	30	
							P5-1 P5-2	楕円形 円形	72 25	74 40				底面広く、貯蔵穴の可能性あり
							P6	円形	49	51	21	24	19	
							P7	円形	27	31	9	10	10	
							P8 P9	楕円形? 楕円形	28 20	34 28				
							P9 P10	楕円形 楕円形	28	34				
							P11	円形	35	38	15	19	13	
							P12 P13	円形 円形	52 30	62 39	30			内部に段差あり
							P13 P14	円形	38	40				
							P15-1	円形	60	64	14	21	16	掘り直した3本の柱穴の掘方が重複か
								HTT 3E/	col	64	15	23	21	I .
							P15-2	円形	60					
							P15-2 P15-3 P16	円形 円形	60	64	20	22	18	

第3表 縄文時代竪穴住居跡計測表 (2)

唐 ##	胜 4		住居全	体 (m)						ット等 (c 		湖		借业
遺構	時 代	主軸	形状	短軸	長軸	深さ	番号	形状	上 短径	端 長径	万 短径	端 長径	深さ	備考
SI018	縄文時代	N-5°-W	楕円形	(5.50)	(7.20)	0.1 ~ 0.4		円形	24	27			20	北側環状柱穴群か(以下、北)
							P2 P3	楕円形	45	56		22 12		北or南
							P3 P4	円形 円形	26 25	28 26			9	南側環状柱穴群か(以下、南)
							P5	円形	27	28	10	11	16	
							P6	円形	27	28		11		南
							P7 P8	円形 円形	31	35 32		19 15	14	
							P9	円形	26	31		15		南
							P10	円形	49	53	10			南 内部に段差あり
							P11 P12	円形 円形	24 26	25 28		12 12	9	南
							P13	楕円形	21	31		11	17	
							P14	円形	48	56		14	21	
							P15 P16	円形 円形	26 26	28 28		13 14	12	
							P17	円形	26	34			16	
							P18	円形	20	26		12	6	
							P19 P20	楕円形 円形	24 38	30 44		8 24	9	北 or 南
							P21	円形	45	48		30	27	AG OF HI
							P22	円形	32	37		20	12	
							P23 P24	円形	31	32 32		18	11 36	
							P25	円形 円形	28 26	28		18 13	8	
							P26	円形	32	34	16	19	38	北 or 南
							P27	円形	34	36		20	12	4V ou an
							P28 P29	円形 円形	27 28	32 33		9 20	37 9	北 or 南
							P30	円形	45	49	28	30	29	
							P31	円形	26	34		18	11	
							P32 P33	円形 円形	23	28 28		20 11	17	門
							P34	円形	22	24	12	13	16	南
							P35	円形	20	21		11	8	Director Holders Malanage AA dir
							P36 P37	楕円形 円形	34 34	48 36		26 22	20	以下の北部は追加で検出
							P38	円形	34	37	16	18	16	
							P39	円形	36	38		24		1L
							P40 P41-1	円形 円形	30	38 43		12 20	13	北 楕円形の下端が2つか
							P41-2	円形	39	43		16	8	40 401 170 × 7 1 200 % 20 × %
							P42	円形	44	46		14	18	
							P43 P44	楕円形 楕円形	36 29	52 43		8 23	15	北
							P45	楕円形	34	46		7	24	10
							P46-1	円形	32	40	5	6		北 2本の柱穴が掘方で重複か
							P46-2 P47	円形 円形	32 27	40		6 10	22 12	-1b
							P47 P48	円形	30	30		15	15	
SI019	縄文時代	S-80°-W	隅丸方形	(3.60)	5.00	0.12	炉	楕円形	44	52	24	35	2	
							P1 P2	円形 円形	36 28	41 35		10 16	42 20	
							P3	円形	20	21		9	12	
							P4	円形	18	19	7	11	5	
							P5 P6	円形	23	25 27		10 11	9	
							P7	円形 円形	25 20	24		10	7	
							P8	円形	24	28	13	14	17	
							P9	円形	18	19	5	7	26	
							P10 P11	円形 円形	22 18	24 20	7	10	35 7	
							P12	円形	22	24	12	13	12	
							P13	円形	21	26	10	13	77	
							P14 P15	円形 円形	18 22	19 24		11 14	5 5	
							P16	楕円形	17	24	5	9	15	
OTO2-	68 -L-n2 15	-y-1007	Age two year	0.0-	(10-)	0.50	P17	円形	29	32		14	25	++####################################
SI020	縄文時代	不明	楕円形	3.80	(4.20)	0.52	P1 P2	円形 円形	26 26	21 27	6	9	26	古墳時代住居 SI011 が切った際の SI020 覆土崩落 防止用柵の可能性。特にP1・2・6・7 は高いた
							P3	円形	19	22	6	9	12	
							P4-1	楕円形	20	24	15	18	15	
			1				P4-2 P4-3	楕円形 楕円形	16 45	27 38	10 15	12 23	25 13	
						1	P5	円形	26	27	13	19	9	
							P6	円形	27	28	10	12	30	
							P6 P7	円形 円形	24	38	16	17	37	
							P6 P7 P8	円形 円形 円形	24 21	38 23	16 9	17 13	37 12	
							P6 P7	円形 円形 円形 円形	24 21 40 36	38 23 44 43	16 9 8 5	17 13 9 9	37 12 82 59	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11	円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30	38 23 44 43 31	16 9 8 5	17 13 9 9	37 12 82 59 7	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12-1	円形 円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30 24	38 23 44 43 31 26	16 9 8 5 18	17 13 9 9 19	37 12 82 59 7 31	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11	円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30 24 21	38 23 44 43 31	16 9 8 5 18 11 12 8	17 13 9 9 19 14 19	37 12 82 59 7 31 10	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12-1 P12-2 P13 P14	円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30 24 21 19	38 23 44 43 31 26 36 21 26	16 9 8 5 18 11 12 8	17 13 9 9 19 14 19 11	37 12 82 59 7 31 10 20	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12-1 P12-2 P13 P14 P15	円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30 24 21 19 22	38 23 44 43 31 26 36 21 26 35	16 9 8 5 18 11 12 8 9	17 13 9 9 19 14 19 11 11	37 12 82 59 7 31 10 20	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12-1 P12-2 P13 P14	円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30 24 21 19	38 23 44 43 31 26 36 21 26	16 9 8 5 18 11 12 8	17 13 9 9 19 14 19 11	37 12 82 59 7 31 10 20	
							P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12-1 P12-2 P13 P14 P15 P16	円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形 円形	24 21 40 36 30 24 21 19 22 33	38 23 44 43 31 26 36 21 26 35	166 99 88 55 188 111 122 88 99 111 110 122	17 13 9 9 19 14 19 11 11 17	37 12 82 59 7 31 10 20 10	

第3表 縄文時代竪穴住居跡計測表 (3)

			住居全	体 (m)						ット等(
遺 構	時代	主軸	形状	短軸	長軸	深さ	番号	形状	短径	端 長径	万 短径	端 長径	深さ	備考
SI021	縄文時代	N-19°-W	不整円形	4.95	5.30	0.20	P1	円形	26	28		8	32	
							P2-1	円形	28	31	10	14	15	
							P2-2	円形	24	29		15	8	
							P3 P4	円形	17 24	19 25		15 7	10 23	
							P5	円形	28	34				
							P6	円形	32	34			17	
							P7	円形	29	30	15	23	15	
							P8	円形	37	44		25	12	
							P9	円形	33	36		25		
							P10 P11	円形 円形	38 33	41		26 27	59 24	
							P13	円形	40	43		30	24	SK008 内の壁斜面に重複
							P14	円形	31	34		26	18	
							P15	円形	24	26				
							P16-1	円形	26	33		14		
							P16-2	円形	29	38		19	16	
							P17-1 P17-2	楕円形 楕円形	49 41	69 64		14 18		2本の柱穴の掘方が重複か
							P18	円形	25	26			18	
							P19	円形	20	21		8		
							P20	円形	28	30		19		
							P21	円形	24	28			17	
							P22 P23	円形	42 22	44 24			25 17	
							P23 P24	円形	22	30		13		拡張部分か
							P25	格円形	76	90		28		壁にかかり大型なので、別の土坑の可能性あり
							P26	円形	26	28	12	17	20	拡張部分か
							P27	円形	25	28	6	8	23	
SI023	縄文時代	N-2°-W	楕円形	3.50	4.54	0.16	P1	円形	22	26		16		北東部環状柱穴群
		または S-88°-W					P2	円形	30	31		12		北東部環状柱穴群
		3-86 -W					P3 P4	円形 円形	32	33		22 25	9	16本即株IATE八軒
							P5	楕円形	22	32		23		北東部環状柱穴群
							P6	円形	21	23		14		北東部環状柱穴群
							P7	円形	23	24		16		北東部環状柱穴群
							P8	円形	22	23		13		北東部環状柱穴群
							P9 P10	円形 円形	36 34	38 35		20 24	22 14	
							P11	円形	28	31				北東部環状柱穴群
							P12	円形	33	36		19		北東部環状柱穴群
							P13	円形	24	26		17	9	
							P14	円形	28	30		19		
							P15	楕円形	19	21		12		
							P16 P17	円形	15 24	19 26		8 15		北東部環状柱穴群
							P18	円形	22	23		13		北東部環状柱穴群
SI024	縄文時代	N-20°-W	楕円形	(4.10)	(5.20)	0.30	Pl	楕円形	30	39				
							P2	円形	18	19	2	3		
							P3	円形	39	61		9		
							P4	楕円形	29	41		6		
							P5 P6	楕円形 円形	45 30	55 34				
							P7	円形	26	36			7	
							P8	円形	48	?		17	12	
							P9	円形	21	36			23	
							P10	円形	34	35			16	
							P11	円形	20	22	2	3	7	
							P12	楕円形	55	96	38	61	24	柱穴にしては下端が大きく、2個の土坑が結合 た可能性
							P13	円形	27	33	8	13	20	
							P14	円形	29	35	10	11	18	内部に段差あり
							P15	円形	22	26			24	
							P16	円形	38	48			18	
							P17	円形	38	42			41	
							P18	円形	34	38		6		内部に段差あり
							P19-1 P19-2	円形 円形	43	48 48		7 5		2本の柱穴の掘方が重複した可能性
							P19-2 P20	円形	17	48				
							P21	円形	24	32			19	
Pl	縄文時代か							円形	43	47	5	7	11	
P2-1	縄文時代か		(楕円形?)		(6.00)			円形	41	48				
P2-2	"	P2 ~ P14 は	* ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	、壁や床か I	『消失した作	E居跡の可	能性もあり	円形	48	50		19	46	
P3 P4	"							円形 円形	46 42	53 44		20 14	25 38	
P4 P5	,							円形 楕円形	26	38				
P6	,							円形	23	28	9	11		
P7	"							円形	36	38	25	27	20	
P8	"							円形	33	36		11	25	
P9	"							円形	23	25			15	
P10	"							円形 円形	35	43 62			29 15	
P11 P12	"							円形 楕円形	55 39	62 42		31 14		内部に段差あり
P12	,							精円形 楕円形	32	50				内部に段差あり
P14	"					L		楕円形	29	48	15	32	12	
P15	縄文時代か							円形	36	45	14	18	58	
P16	"							楕円形	39	54	5	7	23	
P17	"							円形	42	43		14		
P18	"							円形	40	45 44		29 27	31	
	"							円形 円形	40 35	44		20	29 12	
P19 P20	,					1	1	D 4702	1 00					
P19 P20 P21	"							楕円形	33	36	26	28	23	

第4表 縄文土器観察表(1)

弗 4 衣	/ TO _		了此无法	?衣 (1 /			11. 1 6%
遺構番号	1	番号		遺物 番号	型式	分類	施文等	胎 土 等 (雲母含む阿玉台主体に記載)
SI010	10	2	12	22 22	黒浜		端部結節沈線 R L ヨコ	
		3	1	22	浮島Ⅱ~Ⅲ		波状貝殼文	
		4		29	前期末縄文		Lヨコ 結節回転 エココ	
		5	+	12	<u>前期後半縄文</u> 五領ヶ台Ⅱ~阿玉台		Lan	哥瓦华女
		6		23	I a		阿玉台直前 RLタテ	雲母粒多
		8	+	22 22	阿玉台Ib 阿玉台Ib	3-2 3-2	三角枠状文+単列角押文 口縁端部刻み目+単列角押文	雲母粒少 雲母粒少
		9	1	22	阿玉台Ib	3-2	口縁端部刻み目+有節線文	雲母粒多 長石・石英粒等少
		10		22	阿玉台Ib 阿玉台Ib		枠状文+単列角押文 単列角押文による区画文	雲母粒多 雲母粒多 長石・石英粒等多
		12		22	阿玉台 I b	3-2		雲母粒多 雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等多
		13		23	阿玉台 I b	3-2	V字貼付文	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等多
		14		22	阿玉台Ⅱ		把手 単列角押文	雲母粒多
		15 16	-	13 3	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4	口縁端部刻み目 枠状文+有節線文 口縁端部刻み目 枠状文+複列角押文	雲母粒多 雲母粒多
		17	İ	22	阿玉台Ⅱ		枠状文+複列角押文	雲母粒多
		18	-	22	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 波状の複列角押文充填	やや粗い長石・石英粒等少 雲母粒多 長石・石英粒等少
		19	1	23	阿玉台Ⅱ		枠状文+複列角押文 枠状文は三角区画?	雲母粒少
		20		25	阿玉台 I b~Ⅱ	3-8	複列の波状沈線文 爪形文	雲母粒多 粗い長石・石英粒多
		21	1	22	阿玉台 I b~Ⅱ	3-9	懸垂文+沈線文	雲母粒多 長石・石英粒等少
		22		22	阿玉台 I b~Ⅱ	3-9	蛇行する懸垂文	雲母粒多 粗い長石・石英粒多
		23	İ	23	阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-9	刻み目付懸垂文	雲母粒多
		24		8	阿玉台 I b~II		刻み目付懸垂文 Lタテ	雲母粒多 長石・石英粒少
		25 26	+	23 22	阿玉台Ⅰb~Ⅲ 阿玉台Ⅱ~Ⅲ		<u>枠状文+連続爪形文</u> 枠状文	<u>雲母粒多 長石・石英粒少</u> 雲母粒多 長石・石英粒少
		27		2	阿玉台II~IV		眼鏡状突起 集合沈線文	雪母粒多
		28	+	22	阿玉台Ⅲ		枠状文+キャタピラ文	やや粗い長石・石英粒少 雲母粒多 29と同一個体
		29	1	22	阿玉台Ⅲ	3-15	枠状文+キャタピラ文	雲母粒多 28と同一個体
		30	-	24	加曽利E 後期後半		区画文 LRヨコ 区画文	
SI013	11	1	12	3	条痕文系	1	表裏条痕文 口縁端部刻み目	
		3		2	条痕文系 黒浜	1 2-1	表裏条痕文 LRヨコ 沈線文	
		4	†	4	黒浜	2-1	波頂部下に凹文 結節沈線文・連続刺突文同一工具	
		5	I	2	黒浜	2-1	LRヨコ	
		7	-	2	黒浜		附加条1種軸の縄LRに r を附加 平行沈線文による区画文	
		8		1	諸磯c		集合沈線文 砂粒多	
		9		1	十三菩提	2-3	地文LRヨコ 結節浮線文 ソーメン状貼付文 半隆起線文	
		10	1	2	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文(ハマグリ)	
		11 12	-	3 2	浮島Ⅱ~Ⅲ 興津	2-4 2-5	波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁) 押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		13	İ	3	興津		押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		14		3	興津	2-5	押引貝殻文を区画内に充填した磨消貝殻文 区画内に連続刺突文	
		15 16	+	44	前期末縄文			
		17]	33	前期末縄文	2-6	LRヨコ S字結節	
		18	+	4	<u> </u>		S子結節 斜辺線文 無節Lヨコ 条の太さが異なるため、片方の回転押圧が	
		19		67	前期末縄文前期末縄文	2-6	RLヨコ S字結節	
	12	21	†	2, 34	前期末縄文	2-6	LRヨコ 二重結びの結節	
		22		37 53	前期末縄文 阿玉台 I b	2-6 3-2	LRヨコ S字結節 扇状把手 枠状文+単列角押文(刻み目付隆起線)	雲母粒多
		24		1	阿玉台Ib		組状沈線文 枠状文(三角区画)+単列角押文	粗い長石・石英粒等少
		25	ţ	4	阿玉台Ib	3-2	枠状文+単列角押文 内部の角押文は鋸歯状文	
		26		3	阿玉台 I b		<u>枠状文+単列角押文</u> ひだ状文 枠状文+複列角押文	雲母粒多
		27		37	阿玉台Ⅱ			雲母粒少
		28	13	32	阿玉台 II 阿玉台 II	3-4	刻み目付枠状文+複列有節線文 	粗い長石・石英粒等多 雲母粒多
		30	13	39	阿玉台Ⅱ		件状文+複列角押文 	やや粗V長石・石英粒等少 雲母粒多 長石・石英粒等少
		31	<u> </u>	2	阿玉台Ⅱ		件が文土後列角が文 仮がん様文 (十級竹官内側) 枠状文+複列沈線文 隆起線 (刻み目付)	雲母粒多 女石 石夹私寺少
		32		3	阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-7	角押文 円形竹管刺突文 貼付文	電回始々 ドア・アポルゲル
		33		1 2	阿玉台 I b ~ II 阿玉台 I b ~ II		波状沈線文 枠状文+貼付文	<u>雲母粒多 長石・石英粒等少</u> 長石・石英粒等多
		35	1	54	阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-9	隆起線文	雲母粒多
		36		2	阿玉台 I b~II	3-9	懸垂文 ひだ状文	やや粗い長石・石英粒等多 雲母粒多 長石・石英粒等少
		37	-	2	阿玉台 I b~II	3-9	懸垂文(凹文付) ひだ状文	雲母粒多
		38		13	阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-10	輪積修正痕	異い位多 粗い長石・石英粒等少 雲母粒多
		39		2	阿玉台Ⅰb~Ⅱ		ひだ状文	やや粗い長石・石英粒等微 雲母粒多
		40	1	63	阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-11	連続爪形文(貝殻腹縁文)	粗い長石・石英粒等少

第4表 縄文土器観察表(2)

				遺物		八岩	the she tota	胎 土 等
遺構番号	挿図		図版	番号	型式	分類	施文等	(雲母含む阿玉台主体に記載)
SI013	12	41	13	62	阿玉台 I b~II		刻み目付枠状文 連続爪形文	雲母粒多 雲母粒多
		42		5	阿玉台Ⅱ~Ⅲ		枠状文	粗い長石・石英粒等多
		43		30, 59	阿玉台Ⅲ 七郎内Ⅱ		枠状文+幅広爪形文 枠状文+複列結節沈線文 無節Lタテ	 長石・石英粒等少
		45		40	中峠	3-18 · 19	「くの字形」口頸部に区画文	雲母粒少 長石・石英粒等少
SI014	13	1	13	26	黒浜		附加条1種 軸の縄不明にLを1本附加 RL	
		3		26	浮島I		結節沈線文 結節沈線文 (C 字状) 連続刺突文	
		4		25 13	浮島 I 浮島 II ~III	2-4 2-4	結節沈線文 (C 字状) 連続刺突文 口縁端部刻み目 波状貝殼文 (鋸歯状貝殼腹縁文)	
		5		12	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文 (ハマグリ)	
		6 7		26 26	浮島Ⅱ~Ⅲ 興津		波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁) 押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹緣)	
		8		26	興津	2-5	口縁端部凹文 沈線により縦横の描線を表出	
		9 10		26 21	前期後半 阿玉台 I b	2-8 3-2	条線文 口縁端部刻み目 枠状文+単列角押文	雲母粒多
		11		26	阿玉台 I b	3-2	枠状文 単列角押文(区画内にも充填)	雲母粒多
		12		25	阿玉台 I b	3-2	口縁端部稜線上刻み目 枠状文+単列角押文(区画内に も充填)	雲母粒多
		13		26	阿玉台 I b	3-2	刻み目付懸垂文+単列角押文	
		14		4	阿玉台Ⅱ	3-4	口縁端部下端に刻み目 枠状文+複列角押文(内部に複列の波状沈線文)	雲母粒多
		15		9	阿玉台 I b~II		単列・複列角押文 波状沈線文 甕形の器形	雲母粒多
SI015	13	2	13	19 19	浮島Ⅱ~Ⅲ 浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4 2-4	口縁端部刻み目 波状貝殻文(ハマグリ) 波状貝殻文(ハマグリ)	
		3		19	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文(ハマグリ)	
		5		19 11, 18, 19	浮島Ⅱ~Ⅲ		波状貝殻文(ハマグリ) 磨消貝殻文	
		6		19	興津	2-5	口縁端部刻み目 刷け目状沈線	
		7		18	興津	2-5	押引貝殻文 (鋸歯状貝殻腹縁) 磨消貝殻文 区画内は押引貝殻文	
		8		18	興津	2-5	磨消貝殻文 区画内は押引貝殻文	
		9 10		9 19	興津 前期末縄文		区画内は押引貝殻文 口縁端部上刻み目 LRヨコ	
		11		19	前期後半	2-8	口縁端部刻み目 集合沈線文	
		12		18 18	前期後半 五領ヶ台Ⅱ	2-8 3-1	条線文 地文縄文原体不明 沈線と刺突による区画文	
		14		19	五領ヶ台Ⅱ~阿玉台		Lタテ	雲母粒多
		15		18	I a 阿玉台 I b		中 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	雲母粒多
		16		18	阿玉台Ⅱ	3-4	小形の枠状文+複列角押文	やや粗い長石・石英粒等少 雲母粒多
		17 18		19 18	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅰb~Ⅱ			雲母粒多
		19		18	阿玉台 I b~II		輪積修正痕	やや粗い長石・石英粒等少
		20		18	阿玉台Ⅰb~Ⅲ	3-11	爪形文風に連続貝殻刺突文 (鋸歯状貝殻腹縁)	
		21 22		15 18	阿玉台Ⅱ~Ⅲ 阿玉台Ⅲ~Ⅳ	3-12	枠状文 波状沈線文 枠状文(刻み目付) 区画内角押文	
		23		19	加曽利E	3-19	連弧文系 RL(0段多条)タテ 沈線文	
SI016	14	2	14	15 4, 5	前期末縄文 阿玉台 I b	2-6 3-2	結節縄文 LRヨコ 口縁部枠状文+単列角押文 胴部ひだ状文 懸垂文	雲母粒多
		3		不明	阿玉台Ⅱ	3-4	口縁端部刻み目 枠状文+複列角押文	雲母粒少
SI017	15	1	14		阿玉台 条痕文系	3-16	無文 表裏条痕文 口縁端部刻み目	雲母粒多
31017	19	2	14	82	黒浜	2-1	LRヨコ 原体太い 節の中の繊維方向明瞭	
		3		52	黒浜	2-1	附加条羽状 軸の縄不明 附加条L1本R1本 (タテ・ヨコとも)	
		4		81	諸磯c	2-2	(刻み目付)棒状貼付文 砂粒少	
		5 6		77 82	浮島 I 浮島 II ~III	2-4	結節沈線文(鋸歯状モチーフ) 波状貝殻文(鋸歯状貝殻腹縁)折り返し口縁	
		7		5	浮島Ⅱ~Ⅲ		口縁端部欠損 波状貝殻文(鋸歯状貝殻腹縁)	
		8		11,81	興津	2-5	刷け目状沈線 押引貝殻文 (鋸歯状貝殻腹縁)	
		9		82 81	前期末縄文前期末縄文		結節縄文 結節縄文 無節し	
		11		82	前期末縄文	2-6	押圧縄文 無節L	
		12		81	前期後半		沈線文 (縦位)	
		14		82	阿玉台Ia	3-1	表:小突起(刻み目付)枠状文+単列角押文	
		15		47	阿玉台 I b	3-2	<u>輪積修正痕 裏:複列角押文 輪積修正痕</u> 浅鉢 扇状把手(刻み目付) 枠状文+単列角押文	雲母粒少
		16 17		82 82	阿玉台Ib 阿玉台Ib		<u>枠状文+単列角押文</u> 枠状文+単列角押文(区画内にも充填)	雲母粒多 雲母粒少
		18		76	阿玉台 I b	3-2	枠状文+単列角押文(区画内にも充填)	雲母粒稀少
		19		82 59	阿玉台Ib 阿玉台Ib		単列角押文(波状) 枠状文+単列角押文(有節線文)	雲母粒多
		21		64	阿玉台Ib	3-2	橋状把手(刻み目付) 単列角押文	雲母粒多
		22		3	阿玉台 I b		枠状文+単列角押文 連続爪形文 懸垂文 ひだ状文	雲母粒多 雲母粒少
		23		82	阿玉台Ib			雲母粒多
		24		15 12	阿玉台 I b	3-3	Y字貼付文+枠状文 波状の単列角押文 懸垂文 単列角押文 ひだ状文	粗い長石・石英粒等少 雲母粒多
		26		66	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列押引文(ペン先状)	雲母粒多
		27		82	阿玉台Ⅱ		枠状文+複列角押文 口縁端部上に刻み目	雲母粒少

第4表 縄文土器観察表 (3)

第4 衣	1.67	HI	1 P-/L	余衣 (0 /			I
遺構番号		番号		遺物番号	型式	分類	施文等	胎 土 等 (雲母含む阿玉台主体に記載)
SI017	15	28	14	81 82	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-9	懸垂文+複列角押文 枠状文	雲母粒少
		30	1	10	阿玉台 I b~II		懸垂文 ひだ状文	雲母粒多い
		31		7	阿玉台 I b~II		枠状区画 懸垂文(刻み目付)	粗い長石・石英粒少
	16	32	1	82 85	阿玉台 I b~Ⅱ 阿玉台 I b~Ⅱ		波状沈線文 ひだ状文 小突起 枠状文 連続爪形文	雲母粒多
		34	Ī	48	阿玉台 I b~Ⅱ		口縁端部刻み目 棒状貼付文 連続爪形文	雲母粒多
		35	1	82	阿玉台 I b~II		複列角押文 波状沈線文 屈曲部に刻み目	やや粗い長石・石英粒等少 雲母粒多
		36	1	25	阿玉台 I b~Ⅱ	3-11	連続爪形文	雲母粒多 粗い長石・石英粒少
		37	1	85	阿玉台 I b~II	3-11	懸垂文 ひだ状文	雲母粒多
		38		40	阿玉台Ⅲ~Ⅳ	3-14	山形把手? 枠状文(刻み目付隆起線)+複列角押文	雲母粒多やや粗い長石・石英粒等少
		39		69	勝坂	3-18	口縁端部結節沈線 枠状文の集約部に突起 枠状文 +単列沈線文 区画内に沈線文+円形刺突文充填	雲母粒少
		40		2 82	勝坂		結節沈線文による区画文 結節沈線文による区画文 区画内に円形刺突文	雲母粒多
SI018	17	1	14	19	黒浜		附加条 軸の縄不明 附加条LとRの羽状縄文	
		2]	14	諸機c	2-2	集合沈線文 沈線文(斜位重畳)	
		3 4	1	14 14	諸磯c 浮島Ⅱ~Ⅲ	2-2 2-4		
		5	1	14	阿玉台 I b	3-2	扇状把手(刻み目付) 枠状文+単列角押文	雲母粒多
		6		15	阿玉台 I b	3-3	 	やや粗い長石・石英粒等少 雲母粒多
		7	1	14	阿玉台Ⅱ	3-4	浅鉢 枠状文+複列角押文	やや粗い長石・石英粒等少 雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等少
		8		4	阿玉台Ⅲ~Ⅳ	3-14	枠状文+幅広爪形文 隆起線ゾウの鼻状モチーフ	雲母粒多 粗い長石・石英粒等多
		9		6	阿玉台Ⅲ~Ⅳ	3-14	枠状文+キャタピラ文、単列角押文 円環状貼付文 (刻み目付) +単列角押文 円形竹管刺突文	型い長石・石英松等多 雲母粒多 粗い長石・石英粒等多
		10		15	阿玉台	3-16	無文表面は指頭圧痕で凹凸有	雲母粒多や物に長石・石英粒等多
SI019	17	1 2	14	1	黒浜 浮島Ⅱ	2-1 2-4	附加条 軸の縄不明 附加条LとRの羽状縄文 変形爪形文	
		3		1	阿玉台Ⅱ		松状文+複列角押文(角押文 枠内充填)	雲母粒多やや粗い長石・石英粒等多
		4		6	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文(複列角押文 枠内充填)	雲母粒多や物性い長石・石英粒等多
		5		2	阿玉台Ⅱ		枠状文+複列角押文	雲母粒多粗い長石・石英粒等多
SI020	18	1 2	15	9	黒浜 黒浜	2-1	附加条 軸の縄不明 附加条R 附加条2種 軸の縄R+附加条L	
		3	1	4	黒浜	2-1	平行沈線文(波状)半裁竹管内側	
		4		1	諸機c		集合沈線文 他の諸磯 c も含め焼成良好 堅緻 集合沈線文 他の諸磯 c も含め焼成良好 堅緻	砂粒少
		5 6		1	諸磯c 浮島Ⅱ~Ⅲ			112/11/29
		7	1	1	浮島Ⅱ~Ⅲ		波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		8		1	興津	2-5	連続刺突文(半裁竹管先端抉り入り) 貝殻腹縁刺突文(鋸歯状貝殻腹縁)	
		9]	1	前期末縄文		結節部回転 1. D	
		10 11	1	1	前期末縄文前期末縄文		LRヨコ 結節部回転 LRヨコ 結節部回転	
		12]	1	前期後半	2-8	羽状縄文RL+LR (結束縄文)	
		13		1	前期後半 (諸磯or浮島)	2-8	口縁端部刺突文 沈線文(横位)	
		14	-	1	前期後半	2-8	沈線文(斜位) Lヨコ 結節回転(S字状)	電 以 松 夕
		15		1	五領ヶ台Ⅱ		LRヨコ 沈線文(横位)	雲母粒多 粗い長石・石英粒等少
		16		1	五領ヶ台Ⅱ		底部 平行沈線による区画文 搬入土器 口縁部区画文(横位区画、縦位短 沈線充	
		17		1	大木 7 a	3-1	填) 鋸歯状沈線文	焼成良好 堅緻
		18	-	1	阿玉台Ib		<u>浅鉢 外面:無文 内面:枠状文+単列角押文外面無文</u> 枠状文+複列角押文 枠状文は三角区画文形成	
		19		5	阿玉台Ⅱ	3-3	2連のV字貼付文	雲母粒多
		20	-	6	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4 3-6	<u>枠状文+複列角押文</u> 3 連のU字状貼付文 コンパス文	雲母粒少 長石・石英粒等少 雲母粒多 長石・石英粒等少
		22		1	加曽利E	3-19	RLタテ	雲母粒多 民名 石头粒等多
SI021	19	1 2	15	21	浮島Ⅱ~Ⅲ 浮島Ⅱ~Ⅲ		波状貝殻文 (ハマグリ) 波状貝殻文 (ハマグリ)	
		3	1	3	興津	2-5	押引貝殼文	
		<u>4</u> 5	-	14 7	前期末縄文前期末縄文		<u>貝殻背圧痕 結節回転 Lヨコ</u> LRヨコ(結節)	
		6	1	16	阿玉台 I b		*	雲母粒少やわれい長石・石英粒等多
		7	1	3	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 波状沈線文	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等少
		8	1	4	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文	雲母粒微 長石・石英粒等少
		9		4	阿玉台 I b~II	3-7	単列角押文	雲母粒多 粗い長石・石英粒等少
		10		21	阿玉台 I b~II		凹文付懸垂文	雲母粒多 長石·石英粒等微
		11	-	3	阿玉台 I b~Ⅲ 勝坂		連続爪形文	
		12]	3	(阿玉台 I b併行)	3-18	結節沈線文 隆起線文	

第4表 縄文土器観察表(4)

界 4 衣 ————		<u>上面</u>	で住兄ろ	会衣(4)			T
遺構番号	挿図	番号	図版	遺物 番号	型式	分類	施文等	胎 土 等 (雲母含む阿玉台主体に記載)
SI021	19	13	15	21	勝坂 (阿玉台Ⅱ併行)		幅広結節沈線文 (キャタピラ文)	
SI023	20	1	15	7	黒浜	2-1	LRLヨコ 連続刺突文	
		2	-	2	浮島Ⅱ~Ⅲ 浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文(ハマグリ) 折り返し口縁	
		3 4	1	2	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文 (ハマグリ) 波状貝殻文 (ハマグリ)	
		5	1	2	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		6		1	前期後半	2-7	条線文	
		7		2	前期後半	2-7	条線文	
		8		1	阿玉台Ⅱ	3-4	山形把手 粘土棒を芯とした突起+枠状文+複列の波状	
		9	1	1	阿玉台Ⅱ		<u>沈線文 連続爪形文(鋸歯状貝殻腹縁)</u> 	
		10	1	1	阿玉台Ⅲ		件状文+核列角件文 枠状文+幅広爪形文	雲母粒多 長石・石英粒等少
		11	1	6	阿玉台		底径 (6.8cm)	雲母粒少
SI024	21	1	15	2	黒浜		LRヨコ 結節沈線文	200
		2		1	黒浜	2-1	RLヨコ	
		3		1	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文(ハマグリ)	
		4		1	浮島	2-4	深鉢 底面端部やや突出 (浮島の根拠) 底径9.4cm 器高5.3cm	
		5	1	1	興津	2-5	波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		6	1	1	興津	2-5	押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		7	İ	1	興津	2-5	押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
		- 8		1	前期末縄文	2-8	口縁端部上小突起 Lヨコ (口縁端部以下)	
		9		1	前期末縄文	2-8	RLヨコ 結節部回転	
		10		1	前期末縄文	2-8	RLヨコ 結節部回転	
		11 12	1	1	前期末縄文前期末縄文	2-8 2-8	<u>Lヨコ(結節) </u> 結節部回転 沈線文	
		13	1	1	阿玉台 I b	3-2		雲母粒微 長石・石英粒等少
		14	1	6	阿玉台Ib	3-2	枠状文+単列角押文	雲母粒多 長石・石英粒等多
		15		6	阿玉台Ⅱ		枠状文+複列角押文	雲母粒多 長石・石英粒等少
		16		1	阿玉台Ⅰb~Ⅱ	3-9	くの字状懸垂文 連続爪形文	雲母粒少 長石・石英粒等多
		17		1	加曽利E		0段多条RLタテ 波状沈線文	
SK001	22	1	15	2	前期末縄文		L ヨコ 結節部回転 口縁端部刻み目	母 D 业 夕
		3	1	2	阿玉台Ib 勝坂	3-3 3-18	単列角押文 連続爪形文 隆起線文	<u>雲母粒多</u> 長石・石英粒等微
SK002	22	1	15	1	前期末縄文	2-6	<u> </u>	
311002	""		10				山形把手(刻み目付)	乗りかみ E エ アヤかな神
		2		1	阿玉台Ⅱ	3-2	枠状文(凹線付)+複列角押文	雲母粒多 長石・石英粒等微
		3		1	阿玉台Ⅱ	3-4	口縁端部上結節沈線 枠状文+複列角押文	雲母粒多 粗い長石・石英料
		4	1	1	阿玉台 I b~III		波状沈線文 連続爪形文	等少 雲母粒多 長石・石英粒等微
		5	1	1	加曽利E		LRヨコ	雲母粒多 長石・石英粒等多
SK005	23	1	16	1	田戸下層	1	沈線文区画 区画内充填	2.0,120
		2		1	黒浜	2-1	L∃⊐	
		3		1	黒浜	2-1	羽状縄文 附加条 2種 軸の縄L+附加条 r、	
		4	1	1	黒浜	2-1	附加条1種 軸の縄LR+附加条 ℓ RLヨコ	
		5	1	1	諸磯c	2-2	集合沈線文	焼成良好 堅緻
		6	1	1	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文(ハマグリ) 口縁端部斜位の刻み目	7,50,710
		7		1	興津	2-5	磨消貝殼文	
		8		1	前期末縄文		Lョコ (結節)	
		9	-	1	前期末縄文		沈線文(幾何学モチーフ?) 結節回転?	乗り料タ ET . 丁芸粉盤 /
		10	1	1	五領ヶ台	3-1	Lタテ 外面: 複列角押文 波状沈線文充填 粘土棒を芯とした	雲母粒多 長石・石英粒等少
		11		1	阿玉台Ⅱ	3-4	降起線 内面: 複列角押文	雲母粒多 長石・石英粒等少
		12		1	阿玉台Ⅱ	3-4	山形把手 枠状文+複列角押文	雲母粒多
		13		1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文	雲母粒少
		14		1	阿玉台Ⅱ	3-4	 中状文+複列角押文	雲母粒多
			1				枠状文+複列角押文(一部複列沈線文)	粗い長石・石英粒等多
		15		1	阿玉台Ⅱ	3-4	複列角押文充填	雲母粒多
		16		1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文(一部複列沈線文)	雲母粒多
							連続爪形文	やや粗い長石・石英粒等少
		17 18		1	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 連続爪形文 枠状文+複列角押文	雲母粒多 長石・石英粒等少 雲母粒多 長石・石英粒等少
			1					雲母粒多 女石·石央私寺少
		19		1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 円形貼付文	やや粗雑な長石・石英粒等少
		20]	1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文	雲母粒多
		21		1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文(ペン先状)	(本) (A)
		22		1	阿玉台Ⅱ	3-4	<u> </u>	雲母粒多
		23		1	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4		雲母粒多
		24 25		1	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4		雲母粒多 雲母粒少
		26		1	阿玉台Ⅱ	3-4	件状文+沈線文+貼付文 	エトサイエン
		27	1	1	阿玉台Ⅱ		枠状文+複列沈線文	雲母粒多
		28]	1	阿玉台Ⅱ	3-6	枠状文+連続刺突文 複列沈線文	雲母粒少
		29	1	1	阿玉台Ⅱ	3-5	複列角押文 コンパス文	雲母粒多
		30		1	阿玉台Ⅱ		<u></u> 中状文+複列沈線文	雲母粒少
		31		1	阿玉台Ⅱ	3-8	複列波状沈線文	雲母粒多
		32		1	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅰb~Ⅱ		<u>懸垂文</u> 連続爪形文 輪積痕	雲母粒多 雲母粒多
			†					雲母粒多
		34		1	阿玉台 I b~II	3-11		粗い長石・石英粒少
					I	0.44	懸垂文 角押文 連続爪形文	雲母粒多
		35		1	阿玉台 I b~II			
	24	35 36 37		1 1	阿玉台 I b ~ II 阿玉台 I b ~ II 阿玉台 I b ~ II	3-11	連続爪形文 ひだ状文	雲母粒多雲母粒少

第4表 縄文土器観察表(5)

遺構番号	挿図	番号	図版	遺物 番号	型式	分類	施文等	胎 士 等 (雲母含む阿玉台主体に記
SK005	24	38	20	1	阿玉台Ⅱ~Ⅲ	3-12	浅鉢 強く逆くの字に屈曲 口縁部に2連の弧状隆起線 文が4単位付くと推定 枠状文(刻み目付隆起線) 日環状貼付文+幅広爪形文 環状突起 刻み目付隆起線 浅鉢の口縁部装飾	雲母粒多 長石・石英粒等
		39	16	1	阿玉台Ⅱ~Ⅲ	3-12		雲母粒、砂粒多
		40		1	阿玉台Ⅲ	3-13	環状突起 刻み目付降起線 浅鉢の口縁部装飾	雲母粒微
		41		1	阿玉台Ⅲ	1 3-15		雲母粒多
		42		1	阿玉台Ⅲ 阿玉台Ⅲ	3-15	「縁端部刻み目 連続爪形文 刻み目付隆起線・隆起線+幅広爪形文 連続爪形文	雲母粒多 雲母粒多
		44		1	阿玉台Ⅲ~Ⅳ	3-15	口縁端部刻み目 Lヨコ 枠状文(刻み目付)	雲母粒多
		45		1	七郎内Ⅱ	3-18	口線端部刻み目 Lヨコ 枠状文(刻み目付) 懸垂文(隆起線文) 結節沈線文(複列の弧線モチー ブ) LRタテ	2,7,12
		46		1	七郎内Ⅱ	3-18	お節沈線文(弧線・波状懸垂モチーフ) LRタテ 結節縄文	雲母粒少
		47		1	七郎内Ⅱ		複列沈線文 LRタテ	
SK007	22	48	16	1	七郎内Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-18	複列沈線文 L R タテ <u>枠状文+</u> 複列角押文	雲母粒多
		2		1	阿玉台 I b~Ⅲ	1 3-11	連続爪形文	雲母粒多
SK008	22	1	16	1	諸磯c	2-2	有孔浅鉢	
		2 3		<u>l</u>	浮島Ⅱ~Ⅲ 興津	2-4	有孔浅鉢 有孔浅鉢 波状貝殻文(ハマグリ) 押引貝殻文(短板状貝殻腹縁)	
		_ 3 _4		1	界佳 興津	2-5	波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
ピット群	25	1	16	1	阿玉台 I b~Ⅱ	3-9	隆起線文	雲母粒多
(P4) ピット群	20		10					粗い長石・石英粒等少
(P5)		2		1	阿玉台Ib	3-2	枠状文(刻み目付) +単列角押文	砂粒少
ピット群 (P15)		3		1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文(三角形区画)+複列角押文	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等
ピット群 (P17)		4		1	浮島Ⅲ	2-4	折り返し口縁	
ピット群 (P17)		5		1	前期後半縄文	2-7	LRヨコ	
縄文時代遺構		1	17	1		1 1	(如[攻 扫 ú 子	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
217DK-31 217DK-52	26	$\frac{1}{2}$	17	1 1	野島式 条痕文	1	細隆起線文 擦痕文	
SI009	1	3		131	黒浜	2-1	羽状縄文RI・IRヨコ 平行沈線文 口縁端部凹文	
SI011		4		73	黒浜	0_1	亚条連鎖 ケーロ 緑型 郊 初 7, 日	
SI009 SI011	-	<u>5</u> 6		943 74	黒浜黒浜	2-1	十 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	
217DK-40	1	$\frac{-6}{7}$		1	里 近	2-1	波状平行沈線文	
SI009	1	- 8		946	黒浜	2-1	斜格子沈線文	
SI009		9		946	黒浜	2-1	0段多条RLヨコ 円形竹管刺突文	
SI011 217DK-45	1	10		74 1	黒浜	2-1	羽状縄文RL・LRヨコ 羽状縄文RL・LRヨコ 結節縄文	
217DK-00	1	12	20	1	黒浜	2-1	羽状縄文 Lヨコ Rヨコ	
SI011		13	17	79	黒浜	2-1	附加条2種 軸の縄L+附加条L 集合沈線文 集合沈線文	
SI011 SI009	-	14		72	諸磯c 諸磯c	2-2	集合沈線文 在公法領立	雲母粒多 砂粒少 雲母粒少 砂粒多
217DK-26	1	<u>15</u> 16		946 1	浮島Ⅱ	2-4	東百亿級文 口縁端部凹文 変形爪形文 平行沈線文	会母性少 炒性多
							深鉢 口縁端部刻み目 口縁直下の無文部に細沈線で抽	
217DK-00	29	17	20	1	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	象的な線画描出 連続刺突文 波状貝殻文(ハマグリ)	
217DK-85	26	18	17	1	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文 (ハマグリ)	
SI009 217DK-45	-			946	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	放送機能を表現します。	
SI011	1	21		72	浮島Ⅱ~Ⅲ 浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状目語文(ハマグリ)	
SI011	İ	22		72	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻文 (ハマグリ) 折り返し口縁 波状貝殻文 (ハマグリ) 波状貝殻文 (ハマグリ)	
217DK-11		23		1	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	口縁端部刻み目波状貝殻文(ハマグリ)	
217DK-11 SI009	ł	24 25		944	浮島Ⅱ~Ⅲ 浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	波状貝殻乂 (ハマクリ) 海出日熱立 (銀塩出日熱塩緑)	
217DK-63	1	26		1	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-4	日緑端部刻み目 波状貝殻文 (ハマグリ) 波状貝殻文 (ハマグリ) 波状貝殻文 (銀歯状貝殻腹縁) 平行沈線文 口縁端部上刻み目	
SI009]	27		36	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-8	沈線文・条線文	
SI011 SI009	+	28		72	浮島Ⅱ~Ⅲ	2-8	沈線文・条線文 条線文 平行沈線文 30と同一個体	
S1009 217DK-56	†	<u>29</u> 30		946 1	浮島Ⅱ~Ⅲ 浮島Ⅱ~Ⅲ	1 2-4	半行沈線文 29と同一個体	
217DK-26	1	31		i	興津	2-5	刷毛状沈線 貼付文 平行沈線文 磨消貝殼文	
217DK-45	-	32		1	興津 興津	2-5	刷毛状沉線 貼付文 平行沈線文 磨消貝殻文 磨消貝殻文 磨消貝殻文	
SI007 SI011	1	33		423 71	興津	2-5 2-5	磨消貝殼文 磨消貝殼文	
SI009		35		946	興津	2-5	角箱状の器形?(浅鉢) 外面:無文 内面:波状貝殼 文(鋸歯状貝殼腹緣) 口縁端部刻み目	
217DL-21	1	36		1	興津 興津	2-5	波状貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁) 押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
SI011	-	37		79	興津	2-5	押引貝殼文(鋸歯状貝殼腹縁)	
217DK-67 SI007	1	38 39		$\frac{1}{426}$	興津 興津	2-5 2-5	押引貝殼文 (鋸歯状貝殼腹縁) 沈線文 貼付文 刷毛状沈線 押引貝殼文 (鋸歯状貝殼腹縁)	
217DK-52	İ	40		1	興津	2-5	和毛状沈線 押引且殼文 (鋸歯状貝殼腹縁) 押引且殼文 (鋸歯状貝殼腹縁)	
SI011		41		79	興津	2-5	押引貝殼又(鋸箘状貝殼腹縁)	
217DK-33 217DK-84	1	42		1	興津 前期末縄文	2-5	刺突文 沈線文 連鎖状隆起線文 口縁端部押圧縄文 Lヨコ (結節)	
SI011	İ	44		72	前期末縄文 前期末縄文	2-6	RLヨコ 口縁端部上以下 結節部回転	
SI011]	45		72	前期末縄文	2-6	結節部回転	
SI011 217DK-33	1	46		74	前期末縄文	2-6	口縁端部以下RLヨコ 末端閉じた縄 結束縄文 LRヨコ	
217DK-33 SI009	1	47		946	前期末縄文 前期末縄文		桁泉縄又 LRョコ 折り返し口縁 指頭圧痕	
SI011	1	49		28	前期末縄文	2-6	無文 内面折り返し口縁 口縁端部刻み目	
SK004	.=	50		2	前期末縄文	2-6	結節部回転 鋸歯状沈線文(3条)	
SI009 SI009	27	<u>51</u> 52		946 221	<u>五領ヶ台</u> 五領ヶ台	3-1	沈線文 円形竹管刺突文 口縁端部刻み目 沈線文 連続刺突文 LRヨコ	
217DK-33	†	53 53		1	五領ヶ台	3-1	平行沈線文 連続刺突文	
SI011	1	54		71	五領ヶ台	3-1	交互刺突文 Lタテ 沈線文	雷风火 4
217DK-40		55		1	五領ヶ台Ⅱ	3-1	隆起線文+沈線文 LRタテ	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等
SI009	1	56		221	阿玉台 I b	3-2	外面: 梓状文+単列角押文 口縁端部刻み目 内面: 単列角押文 口縁端部刻み目	、 、 、
	1						T 1 回 ・ モ 2 1 月 1 T 人	
SI009		57		944	阿玉台Ib	3-2	口縁端部刻み目 枠状文+有節線文	

第4表 縄文土器観察表 (6)

第4表 約	电乂.	工命	俄名	※表(6))			
遺構番号	挿図	番号	図版	遺物 番号	型式	分類	施文等	胎 土 等 (雲母含む阿玉台主体に記載)
調査区一括	27	58	17	2	阿玉台 I b	3-2	口縁端部単列角押文	雲母粒多 粗い長石・石英粒等少
SI011		59		74	阿玉台 I b	3-2	枠状文+単列角押文	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等少
217DK-00		60		1	阿玉台 I b	3-2	箱状把手 隆起線+単列沈線文 口縁端部刻み目 単列 角押文	芸母和少 砂粒少
調査区一括	-	61		2	阿玉台Ib	3-2	V 字貼付文 連続爪形文 扇状把手 枠状文(刻み目付隆起線+単列角押文 充填	やや粗い長石・石英粒等少
217DK-05		62		1	阿玉台 I b	3-2	角押文有) 隆起線+単列角押文(ペン先状) 区画内鋸歯状沈線	雲母粒少 砂礫少
SI009 SI005		63		946	阿玉台 I b 阿玉台 II	3-3	文充填 枠状文+複列角押文	雲母粒多 長石・石英粒等少 雲母粒少 長石・石英粒等微
217DK-73		65		1	阿宝台Ⅱ	3-4	枠状文 + 複列角押文 複列角押文(区画文) 区画内複列波状沈線文	雲母粒多 長石・石英粒等少 雲母粒多 やや粗い長石・石
217DK-71		66		1	阿玉台Ⅱ	3-4		英粒等少
SI007		67		423	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 区画内複列波状沈線文	雲母粒少 やや粗い長石・石 英粒等多
217DK-00 SI009		68 69		946	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4 3-4	<u>枠状文+複列角押文 複列波状沈線文充填</u> 枠状文内に4条の角押文充填 懸垂文	雲母粒少 長石·石英粒等多 雲母粒多 長石·石英粒等少
SI007		70		46	阿玉台Ⅱ	3-4	隆起線文 連続爪形文 複列角押文 複列波状沈線文	雲母粒多 やや粗い長石・石 英粒等少
調査区一括		71		2	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文++複列角押文(区画内波状複列角押文充填)	雲母粒多 やや粗い長石・石 英粒等多
217DK-11		72		1	阿玉台Ⅱ	3-4	口縁端部刻み目 角押文 枠状文+複列角押文 円形竹管刺突文	雲母粒微
SI009		73	18	138	阿玉台Ⅱ		外耳状突起 粋状文+複列角押文 複列波状角押文	雲母粒多 長石・石英粒等少 雲母粒多 やや粗い長石・石
調査区一括 217DK-11		74 75		1	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文(区画内波状複列沈線文充填) 枠状文+複列角押文	雲母粒多 やや粗い長石・石 英粒等少 雲母粒多 長石・石英粒等微
調査区一括		76		2	阿玉台Ⅱ	3-4	扇状把手 枠状文複列角押文(刻み目付隆起線)	雲母粒多 やや粗い長石・石 英粒等少
SI009		77		36	阿玉台Ⅱ	3-4	扇状把手 枠状文(刻み目付隆起線) 連続爪形文	要母粒多 長石・石英粒等少
217DK-00		78		1	阿玉台Ⅱ	3-4	円環状貼付文(刻み目付) +枠状文(刻み目付) +複列角 押文	雲母粒多
調査区一括		79		2	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文(区画内充填) 波状沈線文	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等微
SI005		80	18	不明	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文(刻み目付) + 複列角押文 深鉢 中状文+複列角押文、複列沈線文による区画文が	雲母粒多
217DK-84	29	81	20	1, 2	阿玉台Ⅱ	3-4	多段に配置、区画内には弧状あるいは渦巻状のモチーフ 充填 底部:網代痕	雲母粒多 長石·石英粒等少 雲母粒多
217DK-30	27	82	18	1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 (波状沈線文充填) 幅広爪形文	さい位多 やや粗い長石・石英粒等少 雲母粒多
217DL-21		83		1	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文(刻み目付)+複列角押文	やや粗い長石・石英粒等少
SK004		84		2	阿玉台Ⅱ	3-4	枠状文+複列角押文 複列波状沈線文 貼付文	雲母粒多 やや粗い長石・石英粒等少
SI009	20	85		6	阿玉台Ⅱ	3-4	連鎖状隆起線文が懸垂文 区画文 懸垂文間3条1組の 角押文が弧状モチーフ形成	
SI007 調査区一括	28	86 87		426 1	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅱ	3-5 3-4	校状文+複列角押文 区画内複列沈線文 山形把手 口縁端部刻み目 隆起線文	雲母粒少 長石・石英粒等多 雲母粒多 長石・石英粒等少
217DL-31	29	88	20	1	阿玉台Ⅱ~Ⅲ	3-12	胴部球形の鉢形土器 無文+枠状文 環状突起+V字貼 付文(刻み目付) 口径(17.1)cm器高[8.6]cm	去以世多
217DK-33 SI007	28	89 90	18	<u>1</u> 292	阿玉台Ⅱ 阿玉台Ⅰ b~Ⅱ	3-4	連続爪形文 懸垂文(刻み目付)	雲母粒多 雲母粒多 長石・石英粒等少
SI009		91 92		946	阿玉台Ⅰb~Ⅲ	3-11	連続爪形文 (鋸歯状腹縁) 隆起線文 複列角押文 (先端抉り入り)	雲母粒少 長石・石英粒等微 雲母粒少
調査区一括 SI011		93		72	阿玉台 I b~Ⅲ 阿玉台 I b~Ⅲ	3-8	波状沈線文	粗い長石・石英粒等多
217DK-72		94 95			阿玉台 I b~Ⅲ		枠状文+単列角押文 キャタピラ文	雲母粒多 長石・石英粒等少 雲母粒微
S1007					阿玉台Ⅰb~Ⅲ		連続爪形文 口縁端部刻み目 突起(刻み目付隆起線)	やや粗い長石・石英粒等少
217DK-16		96		1	阿玉台Ⅱ~Ⅲ	3-11	連続爪形文	雲母粒多 長石・石英粒等多
217DK-86		97		1	阿玉台Ⅱ~Ⅲ	3-12	浅鉢 口縁端部波状沈線文	雲母粒多 長石·石英粒等多 雲母粒少
SI005		98		1	阿玉台Ⅲ	3-15	隆起線文 幅広爪形文	やや粗い長石・石英粒等多 雲母粒多
217DL-21 SI005		99	_ 18	1 2	阿玉台 勝坂	3-17	底部 結節沈線文	やや粗い長石・石英粒等少
SI005 SI011		100	18	72	勝坂	3-18	結節隆起線+単列結節沈線文(ペン先状) 印刻文	砂粒微
217DL-21		102		1	加曽利E	3-19	R L ヨコ 区画文 連続刺突文	100 1100
SI007		103		423	加曽利E		LRタテ 沈線文	雲母粒多
217DK-64 217DK-26		104 105		1	加曽利EⅢ 加曽利EⅢ		Lナナメ 渦巻文	やや粗い長石・石英粒等少
217DK-17		106		1	称名寺Ⅱ 称名寺Ⅱ~堀之内1	4-1	区画内刺突文充填	
SI011 SI011		107		72	堀之内1	4-1	口縁部無文帯 隆起線文 沈線文	
217DK-00 SI011		109 110		72	堀之内1 称名寺Ⅱ~堀之内1	4-1 4-1	沈線文 口縁部無文帯 沈線文 条線文	
SI011		111		72, SI007 -422	後期後半 粗製土器	4-2	紐線文 沈線文 条線文	112と同一個体
SI011		112		73	後期後半 粗製土器	4-2	紐線文 沈線文 条線文	111と同一個体
SI009		113		943, 944, 217DK- 52-1	晩期後半	5	折り返し口縁撚糸文R 撚糸文Rタテ・ヨコ	114と同一個体
SI009 SI011		114 115			晚期後半 晚期後半	5 5	折り返し口縁撚糸文Rタテ・ヨコ 未完通の補修孔 口縁部無文帯 撚糸文Rナナメ	113と同一個体 116と同一個体
SI009		116			晩期後半	5	口縁部無文帯 撚糸文R 輪積痕	115と同一個体

-	1		•		45 HH E/L	.,,,,,				· 75/11 IE		. [274]	_			
AF ISS	47. II		遺構	遺物	1965-Mczc	時期	-to-Libbs Arthr	遺存度	ii.	計測値(m	m)	重量	⇒unitele	86	<i>l</i> 7 ∃⊞	/# +*
押凶	番号	凶版	番号	番号	種類	(土器型式)	文様等	(%)	最大長	最大幅 (径)	最大厚	(g)	調整	胎土	色調	備考
12	46	18	SI013	9	玦状耳飾	浮島〜興津式、前期末縄文	無文	50	[41.0]	20. 0	7. 0	7. 51	指ナデ	石英・黒色石等の微砂 粒やや多量	にぶい黄橙色	縄文時代竪穴住居
	47			2	玦状耳飾	浮島~興津式、前期末縄文	無文	25	[18.0]	11.0	18. 0	3. 39	指ナデ	石英・黒色石等の微砂 粒やや多量	にぶい黄橙色	縄文時代堅穴住居
13	16		SI014	1	玦状耳飾	浮島~興津式、前期末縄文	無文	30	[29.0]	11.0	18. 0	5. 89	ヘラナデ	石英・黒色石等の微砂 粒やや多量	にぶい赤褐色	縄文時代竪穴住居
22	5		SK008	1	玦状耳飾	浮島~興津式、前期末縄文	無文	30	[23. 0]	12. 0	16. 0	3. 72	ヘラナデ	石英・黒色石等の微砂 粒やや多量	にぶい赤褐色	縄文住居SI021を切る
29	117		SI011	42	玦状耳飾	浮島~興津式、前期末縄文	側面に竹 管文	65	43.0	18. 0	10.0	15. 80	ヘラナデ	石英・黒色石等の微砂 粒やや多量	明赤褐色·暗赤 灰色	古墳時代竪穴住居
	118		SI009	945	玦状耳飾	浮島~興津式、前期末縄文	無文	100	22.0	11.0	11.0	6. 04	指ナデ	石英・黒色石等の微砂 粒やや多量	橙色	古墳時代竪穴住居
24	49	18	SK005	1	土器片錘	阿玉台Ib~II	隆起線文 連続爪形文	100	48.0	45. 0	11. 2	28. 3	_	雲母粒多量、石英・長 石等の微砂粒少量	橙色	縄文時代フラスコ 状土坑
	50			1	土器片錘	阿玉台Ib~II	隆起線文	90	[40.5]	37. 0	14.8	27. 5	_	雲母粒多量、石英・長 石等の微砂粒少量	明赤褐色	縄文時代フラスコ 状土坑
	51			1	土器片錘	阿玉台	無文	100	33.0	26. 8	8. 5	9. 3	-	雲母粒多量、石英・長 石等の微砂粒少量	明赤褐色	縄文時代フラスコ 状土坑
29	119		S1007	423	土器片錘	阿玉台	無文	100	44. 8	36. 0	10.8	23. 6	_	雲母粒多量、石英・長 石等の微砂粒微量	にぶい黄橙色	古墳時代竪穴住居
	120		SI011	72	土器片錘	阿玉台	無文	100	35. 0	29. 0	11.7	16. 1	_	雲母粒多量、粗い石 英・長石等の微砂粒少 量	にぶい黄橙色	古墳時代竪穴住居
	121		217DK -67	1	土器片錘	阿玉台Ib~II	連続爪形文	90	[55. 5]	55. 0	11.6	43. 7	_	雲母粒多量、粗い石 英・長石等の微砂粒少 量	にぶい赤褐色	グリッド一括
10	32	18	SI010	22	円板	前期後半or 阿玉台	無文	80	_	28. 5	4.8	5. 4	_	石英等の微砂粒少量	橙色	縄文時代竪穴住居
14	5		SI016	4	円板	阿玉台	無文	100	_	29. 0	7. 2	7. 0	_	雲母粒多量、粗い石 英・長石等の砂粒少量	にぶい褐色	縄文時代竪穴住居
19	14		SI021	3	円板	中期	縄文 R/Lタテ	100	_	26. 8	7. 5	6. 7	_	雲母粒微量	橙色	縄文時代竪穴住居
29	122		217DL -21	1	円板	阿玉台	無文	100	_	28. 7	7.3	7. 1	_	石英等微砂粒少量	にぶい褐色	グリッド一括

第6表 縄文時代石器遺構別組成表

器種	\	j	貴構	SI010	SI013	SI014	SI015	SI016	SI017	SI018	SI019	SI020	SI021	SI023	SI024	SK001	SK005	遺構外	総計
石			鏃	1	2							1		1			1	12	18
楔	形	石	器															4	4
二次加	工の	ある	剥片	2			1								1			10	14
微細剥	離痕	のある	剥片					1											1
剥			片	5	14	10	4	4	12	6	1	1	9	1	2	2		41	112
砕			片		1	1		1	3		1					1		4	12
石			核															1	1
打	製	石	斧												1			1	2
磨	製	石	斧	1	2					1			1					4	9
敲			石		1													4	5
Ш			石															1	1
	礩	Ĕ			7		1		1		1				2	1	4	7	24
礫			片	1	6	4	1	1	2	2		2	2	2	1		2	24	50
合			計	10	33	15	7	7	18	9	3	4	12	4	7	4	7	113	253

第7表 縄文時代石器組成表

110 1 2	7,00		· — пп /зт.	194 24											
石材	器種	石鏃	楔形石器	二次加工のある剥片	微細 剥離痕の ある剥片	剥片	砕片	石核	打製石斧	磨製石斧	敲石	凹石	礫	礫片	総計
黒	曜石	5 4.58	1 0.41	6 8.21	1 2.57	75 50.31	12 0.91	1 12.78							101 79.77
ガラス質	黒色安山岩	6 2.89		3 8.68		15 27.49									24 39.06
トロ	トロ石					3 4.32								1 70.89	4 75.21
頁	岩	1 0.33	1 34.53	1 20.56		3 2.09			1 225.94					3 47.37	10 330.82
玉	髄		1 2.70			2 18.74							1 2.58		4 24.02
緑色	凝 灰 岩									4 343.81					4 343.81
角 閃	片岩													1 225.96	1 225.96
ホルン	フェルス									1 202.62			1 5.77	3 394.59	5 602.98
チャ	1 7	3 13.18	1 7.17	3 16.56		10 15.79					1 766.1		17 885.76	19 426.04	54 2,130.6
砂	岩					1 0.10			1 115.07	3 92.78	3 1,130.25	1 1,035.00	2 12.31	13 579.46	24 2,964.97
流	紋 岩	1 0.43		1 1.20						1 54.81	1 89.46		3 198.36	10 563.28	17 907.54
硬 質	頁 岩	2 3.72				3 15.41									5 19.13
合	計	18 25.13	4 44.81	14 55.21	1 2.57	112 134.25	12 0.91	1 12.78	2 341.01	9 694.02	5 1,985.81	1 1,035.00	24 1,104.78	50 2,307.59	253 7,743.87
												1	LFA . F	*** 下印.	壬月.() 7

[上段:点数、下段:重量(g)]

第3章 古墳時代以降

第1節 概要

古墳時代以降の遺構は、古墳時代前期~中期竪穴住居跡12軒、中・近世土坑墓1基・土坑1基・道跡1 条が検出された。竪穴住居跡は北区で7軒、南区で5軒である。この内、古墳時代前期~中期にまたがる もの4軒、中期主体が8軒と推測される。当地域では調査例の少ない時期の集落であり、概期の土師器群 と共に、滑石製品の製作痕跡が注目される。

古墳時代中期に帰属するとみられる8軒(SI001~005・007・009・011)の竪穴住居跡とその周辺から滑石を原材とする石製模造品類が多量に出土した。これらの遺物を滑石類と総称して分類することにする。滑石類は総計2,700点出土した。遺構別組成は第11表のとおりである。遺構別に出土点数をみると、SI009が1,756点で全体の65%を占め、SI002が442点、SI007が373点で、その他の遺構は50点以下である。なお、SI009はSI022を拡張した竪穴住居跡であり、出土状況から遺物は拡張後に帰属すると考えられたため、遺構別組成ではすべてSI009出土として集計した。遺構外出土の33点は、当該期の竪穴住居の周辺から出土している。第45図30のガラス製臼玉と軽石以外はすべて滑石が用いられている。臼玉製作に関連するものが大半を占め、特にSI009とSI007で臼玉を主体に製作されている。遺物の観察から臼玉の製作過程が復元可能になった。

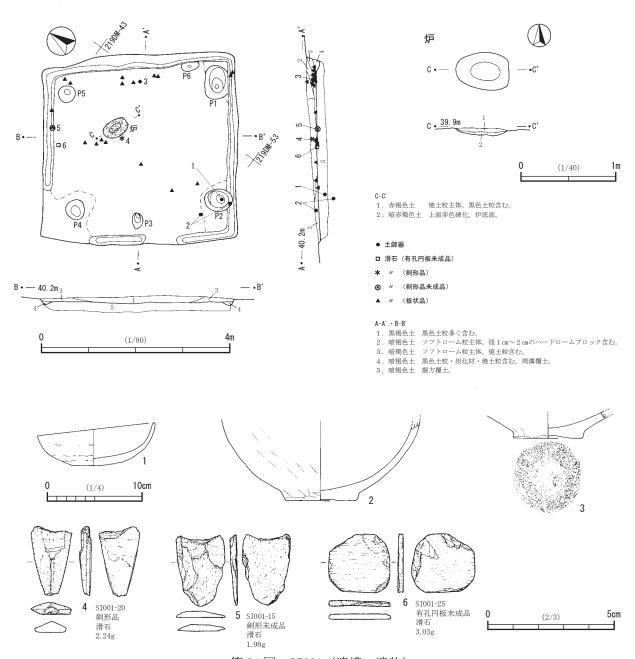
第2節 竪穴住居跡

SI001 (第31図、第8 · 9 · 11表、図版8 · 20 · 25)

南区南部の219DM-42他に位置する。正方形で、短軸4.0m・長軸4.2m・深さ0.15m前後である。覆土は黒褐色土が主体で、壁近くはローム粒主体暗褐色土のレンズ状堆積である。炉は北寄りに位置し、39cm×57cmの長楕円形、ピットは6か所、規模はP1・2が短径48cm、他は短径20cm~40cm、深さは30cm~40cm であり、P1・2・4・5が主柱穴で、P3が出入口の梯子用に推測される。P1・2は壁に近い位置にある。周溝は西側から南側で一部途切れる。硬化面は主柱穴周囲以外で確認された。主軸はN-53°-Eに推定される。

遺物は、炉周辺など、北部で多く出土した。図示した出土遺物の $1 \sim 3$ は土師器、 $4 \sim 6$ は滑石である。 覆土下層から床面の出土遺物は、 $1 \cdot 4 \sim 6$ である。

1 は内湾する杯、 $2 \cdot 3$ は甕の下部破片であり、古墳時代中期(5世紀後半)のものに推定される $^{1)}$ 。 滑石類は、 $4 \sim 6$ を含む総計 42 点出土した。北隅付近に集中地点がみられる。 4 は剣形品である。表面中央下部は研磨により稜が形成され、側面は研磨されている。 5 は剣形未成品である。表裏面の研磨は行われているが、側面研磨は行われていない。 6 は有孔円板未成品である。表裏両面と側面は研磨されているが、穿孔の痕跡はみられない。



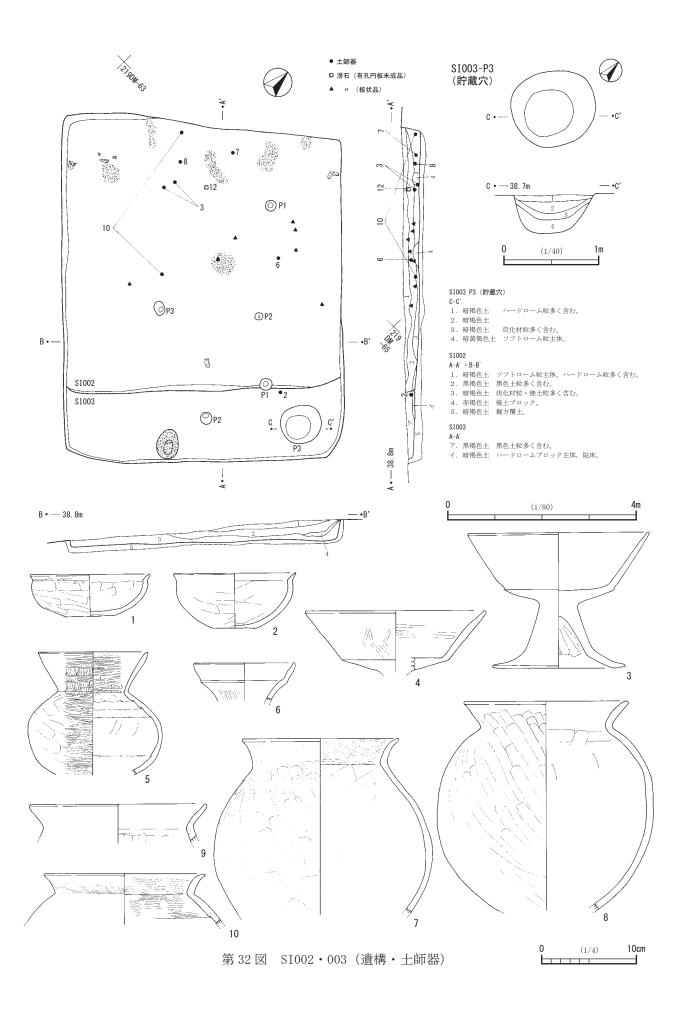
第31図 SI001 (遺構・遺物)

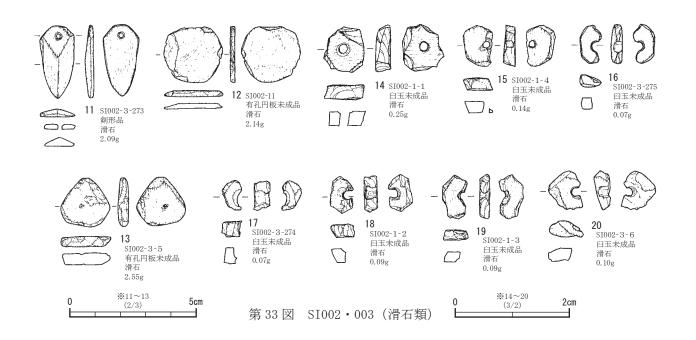
 $SI002 \cdot 003$ (第32 · 33図、第8 · 9 · 11表、図版8 · 20 · 21 · 25)

南区南部の219DM-63他に位置する 2 軒の住居跡は、方形で南西辺・北東辺が重なり、主軸もN-42°-Wと一致するので、覆土の観察ではSI002がSI003を切るが、SI002はSI003の拡張や掘り直しの可能性も考えられる。

SI002は、短軸5.6m・長軸5.8m・深さ0.33m前後である。炉の掘り込みは確認されなかったが、ほぼ中央に径45cm程の焼土だまりが検出された部分が炉の可能性が高い。覆土は黒褐色土主体である。ピットは貼床を下げて確認された3か所で、直径10cm前後と小規模で、深さはP1・2が40cm前後、P3が26cmである。北西部で焼土が散在していた。

SI003は、短軸5.8m・長軸不明・深さ0.30m前後である。覆土はSI002同様、黒褐色土主体である。南東





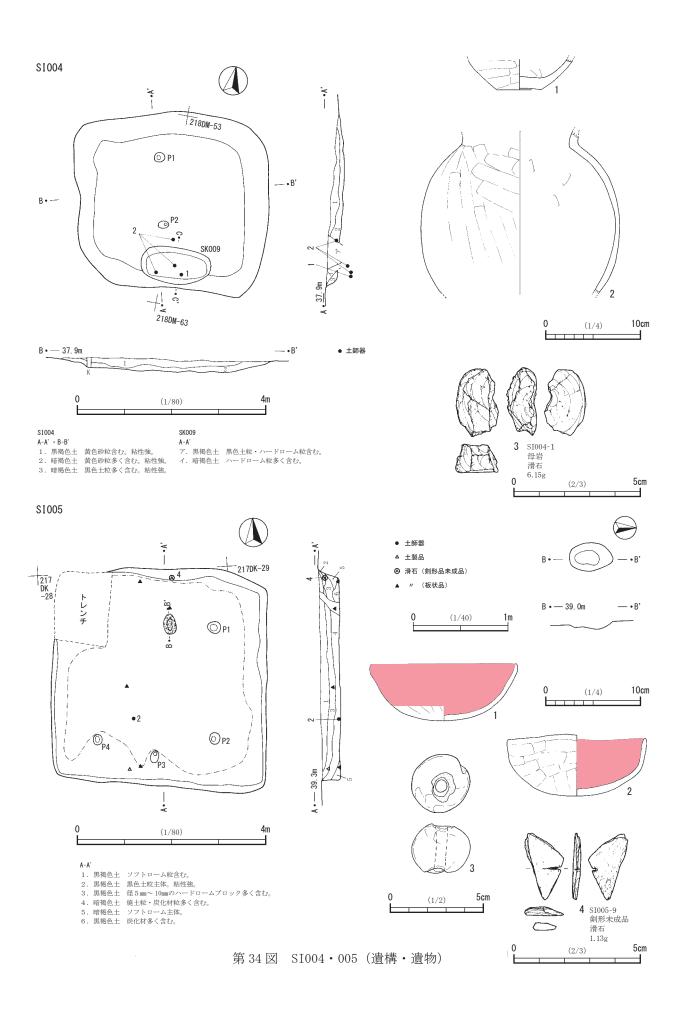
壁際に42cm×64cmの範囲で浅い掘り込みと焼土が検出されたが、位置的には炉ではないと推測される。ピットは2か所で、直径12cm程と小規模で、東側のコーナー付近に短軸84cm×長軸90cmの楕円形、深さ38cm程の穴があり、覆土中層には炭化物粒を多く含む層があり、貯蔵穴に推測される。

遺物は、SI002の北部で多く出土した。図示した遺物の $1\sim10$ は土師器である。SI003では床面から2が、SI002では覆土下層から床面で $3\cdot7\cdot8\cdot10$ 等が出土した。 $1\cdot2$ は口縁部が外反し胴部が内湾する杯である、 $3\cdot4$ は杯部が直線状に開く高杯で、4には若干ミガキがある。5は口辺部が高い壺状で、ミガキも施され坩とも言えよう。6は器台または口辺部に稜を有する壺、 $7\sim10$ は口辺部が「く」の字状、球胴の甕で、 $7\cdot10$ の上部には刷毛目が残るが、8は弱いへラ削り、9はナデである。なお、本遺跡出土の甕類の整形はヘラ削りとヘラナデの中間的な整形が多い。年代観については、4世紀中葉のものが $1\cdot2$ (杯) $\cdot6$ (壺)、4世紀後半のものが5(坩)と $7\cdot10$ (甕)、5世紀後半のものが $3\cdot4$ (高杯) $\cdot8\cdot9$ (甕)に推測され、古墳時代中期と後期のものが混在する。或いは、古いSI003が前期~中期、新しいSI002が後期の竪穴住居であることも考えられる。

滑石類($11\sim20$)はSI002から総計442点、SI003から総計31点出土した。図示した滑石類はすべてSI002から出土している。11は剣形品である。表裏両面と側面が研磨され、表面はY字形の稜が形成されている。上部は表面から片面穿孔されている。 $12\cdot13$ は有孔円板未成品で、表裏両面と側面は研磨され、12が穿孔の痕跡がなく、13が表裏両面に穿孔途中の痕跡がみられる。 $14\sim20$ は臼玉未成品である。いずれも側面研磨は行われていない。 $14\cdot15$ は穿孔完了品、 $16\sim20$ は穿孔時破損品である。穿孔は $14\sim16$ が片面穿孔、 $17\sim20$ も基本的に片面穿孔ではあるが、表面から穿孔し開孔した後に、裏面から孔の調整が行われている。 $17\cdot19$ は両面からの穿孔の境界線を観察され、大半が表面からの穿孔によるもので、裏面からの穿孔はわずかであることが窺われる。

SI004 (第34図、第8 · 9 · 11表、図版8 · 9 · 21 · 25)

南区北部の218DM-53他に位置する。隅丸方形で、短軸3.7m・長軸4.0m、深さ0.25m前後である。覆土は



黄色砂粒を含む黒~暗褐色土である。炉は検出されず、柱穴は南北に並ぶ2か所で、径20cm程、深さは10 cm以下と浅い。主軸はN-14°-WまたはN-76°-Eに推定する。南辺に78cm×147cm、SI004確認面からの深さ75cmのSK009が覆土を切る(74P)。小規模で炉もなく柱穴は2本のみであり、中世の倉庫等の機能と推測される方形竪穴建物に類似することからも、通常の竪穴とは異なる性格であることが想像できる。

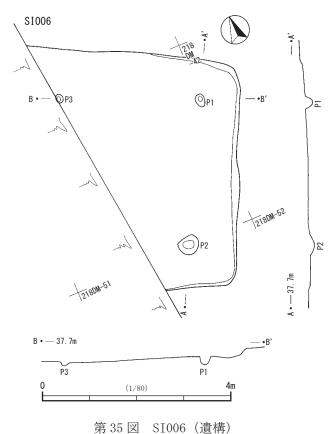
遺物は、少量がSK009の覆土や周辺に多く出土した。1・2は土師器壺または、2は甕の底部である。いずれもヘラ削り整形である。5世紀代のものに推測される。

滑石類は、3を含む総計3点出土した。3は母岩である。厚みのある分割剥片を素材として、右面を打面として板状剥片が数枚剥離されている。

SI005 (第34図、第8~11表、図版9·21·24·25)

北区北西部の217DK-28他に位置する。方形で、短軸4.54m・長軸4.80m・深さ0.38m前後である。覆土は、黒~暗褐色土層のレンズ状堆積で、最下層は焼土粒・炭化材粒を多く含む。炉は北寄りに位置し、58cm×92cmの楕円形である。柱穴は4基で、径20cm前後である。主柱穴に推定されるP1・2・4の深さは50cm前後で、北西部は上層確認トレンチで破壊された。P3の深さは14cmで、炉の対面に位置することから、出入口の梯子用であろう。よって、主軸はN-4°-Eに推測される。硬化面は各壁から50cm前後より内側に形成されている。

遺物は少量が散在して出土した。覆土下層から床面のものは2である。1・2は土師器杯で、共に内湾 し器高があり、横方向に弱いへラ削りまたはヘラナデ整形され、内外面が赤彩される。2は歪みがある。 時期は5世紀後半のものに推測される。

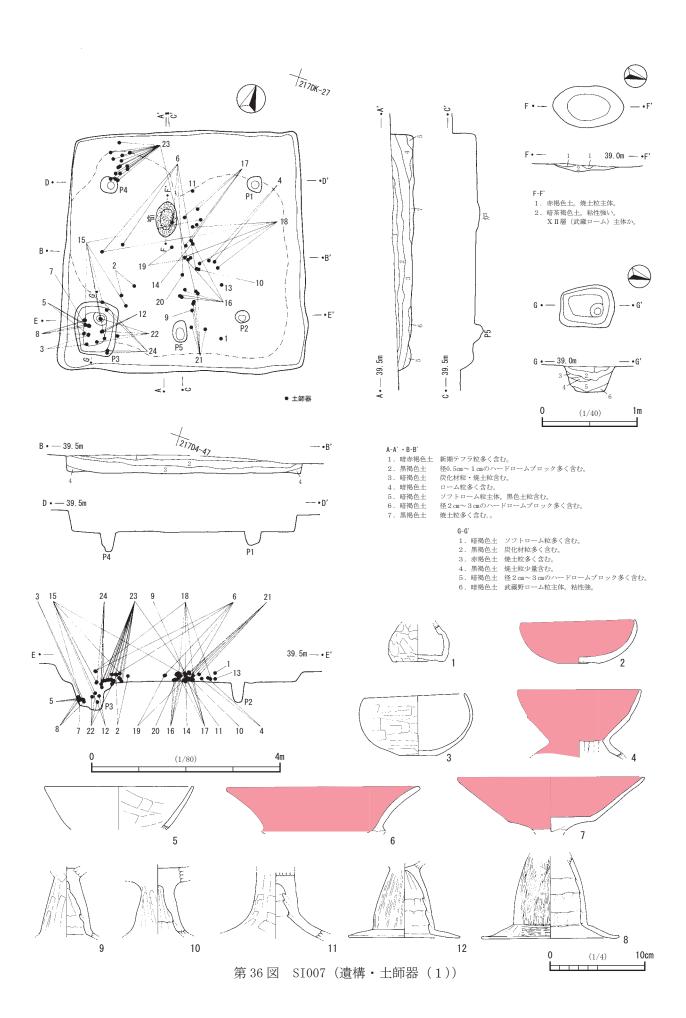


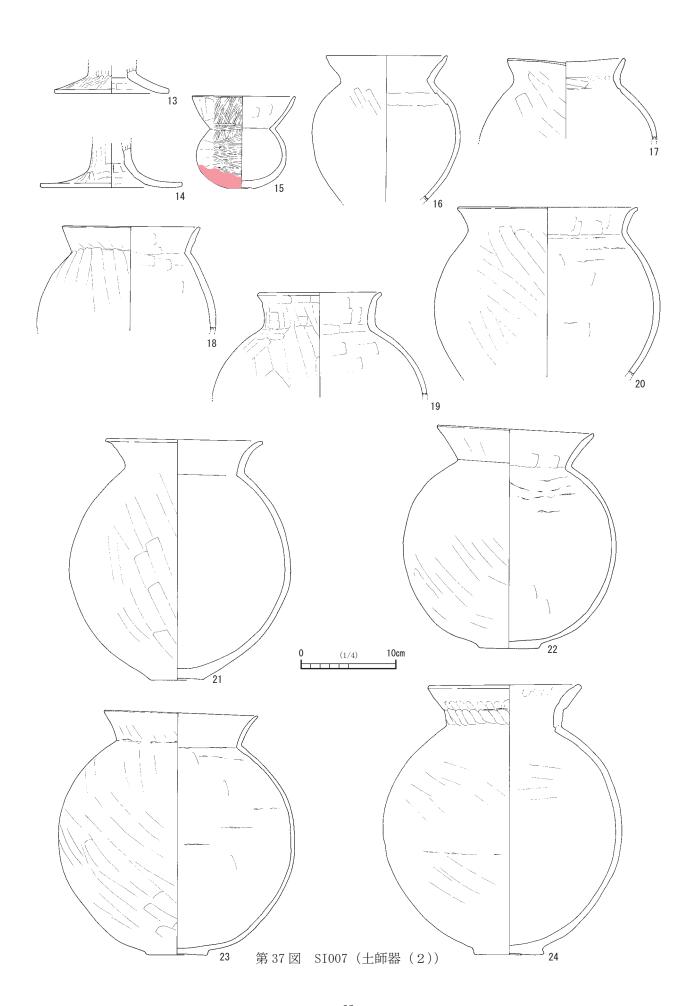
3 は土玉で、最大径30.5mm・高さ26.5mm・孔 径8.5mm、手づくね後に軽いミガキが施された もので丁寧な作りである。

滑石類は、4を含む総計6点出土した。4 は剣形未成品である。表裏両面が研磨されている。右面は裏面左部から片面穿孔をした際に破損したものと推測される。側面研磨は行われていない。

SI006 (第35図、第8表、図版9)

南区北部の218DM-42他に位置するが、西側 1/3は急斜面で、本遺構も崩落している。方形で、短軸4.6m以上・長軸4.9m以上・深さ0.02m~0.25mである。炉は検出されず、主柱穴は3か所検出され、P2が径40cm、P1・3が径20cm前後、深さはP1・2が10cm前後で、P3が3cmと浅い。主軸はN-25°-Eに推定できる。遺物は、縄文時代石器剥片1点のみで、古墳時代の土師器も滑石も出土しなかった。





SI007 (第36~39図、第8・9・11表、図版9・10・21・22・25)

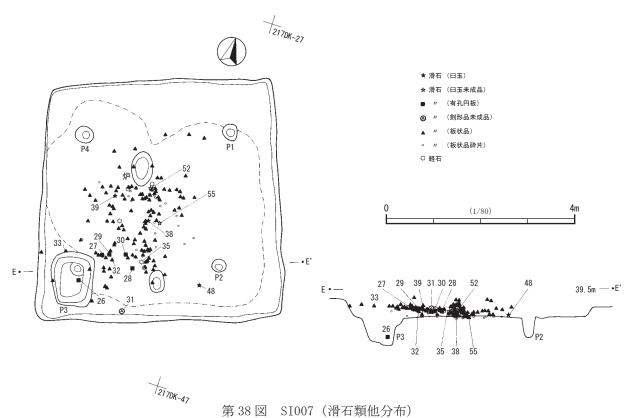
北区北部の217DK-36他に位置する。方形で、短軸5.05m・長軸4.70m~5.20m・深さ0.43m前後である。 覆土は黒~暗褐色土のレンズ状堆積であり、下層は炭化材粒・焼土粒を含む。炉はやや北寄りに位置し、47cm×75cmの長楕円形である。ピットは5か所で、P1~P4が主柱穴で、短径は30cm前後、深さはP2・4が42cm、P1が28cm、出入口梯子用とみられるP5は18cmである。硬化面は、北側に1m前後、他は壁から40cm前後より内側である。主軸はN-20°-Eに推定される。南西隅にある93cm×112cmの方形で、深さ55cmの穴が貯蔵穴に推測され、P3はこの穴に重複する。貯蔵穴の覆土はロームブロックが多いが、炭化材粒・焼土粒を含む層がある。

遺物は、土師器は、中央部、北西部のP4周辺、南西部の貯蔵穴覆土で、滑石類は中央から南西部にかけて、いずれも下層から床面にかけて多量に出土した。

土師器は $1\sim 24$ である。 1 は上部がすぼまるミニチュア土器、 $2\cdot 3$ は内湾し器高のある杯、 4 は杯部に稜がある器台杯部、 $5\sim 14$ は高杯で $8\cdot 12\sim 14$ は脚部の裾が残存するもので、 14 は開きが低く径が大きい。 $6\sim 8\cdot 12\cdot 13$ はミガキがあり、 7 の杯部と 8 の脚部は大きさのバランスがほぼ一致しミガキもあり、第36図では上下に配置したが、色調や整形が異なり、同一個体ではない可能性が高い。 15 は刷毛目の丁寧な坩、 $16\sim 24$ は甕で、 $22\cdot 23$ は特に胴部が球形に近い。 ミガキは、 $6\cdot 7\cdot 8\cdot 12\cdot 13\cdot 15$ で、赤彩は $4\cdot 6\cdot 7$ で内外面、 15 は胴部下で施される。 時期は、坩(15)が 4 世紀後半の可能性があるが、他の杯・高杯・甕等は 5 世紀後半に推測される。

滑石類は、25~55を含む総計373点出土した。滑石と有孔円板の完成品の割合が高いことが特徴である。滑石と有孔円板の最終仕上げを主に行った竪穴住居跡と捉えられる。第38図は滑石類の分布状況図である。南西隅と中央部に集中地点がみられる。出土層位は大半のものが床面直上から出土し、26の有孔円板は南西隅のピットの下部から出土している。25は勾玉である。全面が研磨されている。上部は破損している。26~30は有孔円板である。いずれも表裏両面と側面が研磨され、片面穿孔されている。26は1か所穿孔され、大型で厚みがある。黒味を帯びた石材が用いられている。27~30は2か所穿孔され、小型で厚みがない。白味を帯びた石材が用いられている。31は剣形未成品である。両面と側面が研磨され、穿孔の痕跡はみられない。26と同じ厚みをもち、黒味を帯びた石材が用いられている。32~34は板状品である。表裏両面を研磨した後に、側面を折断して三角形の形状をしたものを作成していることから、剣形品の素材作成段階のものと捉えられる。黒味を帯びた石材が用いられている。35は軽石である。分割された小型の軽石を素材として、表面・上面・左面が研磨されており、滑石類の研磨に用いられたと思われる。図示していないが小型の軽石が、SI007から総計6点出土していることから、本遺構において研磨が盛んに行われた可能性が高い。

 $36 \sim 51$ は臼玉である。臼玉の出土点数はSI007が最も多く出土している。研磨方法については、表裏両面は、同一方向に研磨されている。側面は、表面側と裏面側から研磨され、わずかではあるが稜線が形成されているものがある。形成された稜線の位置は、側面中央に全周するもの($38\sim 40\cdot 42\sim 45\cdot 47\cdot 50$)、稜線がみられないもの($46\cdot 48\cdot 49\cdot 51$)、側面中央に部分的にみられるもの($37\cdot 41$)、斜め方向にみられるもの(36)がある。稜線形成は厚みと関連しており、厚みのあるものは側面中央に全周し、厚みのないものは稜線がみられない傾向がある。穿孔角度は、ほとんどのものが表裏両面に対して垂直方向に穿孔されている。穿孔幅は穿孔面・内部・開孔面ともにほぼ同じ幅で、同心円の孔が形成されている。穿孔方



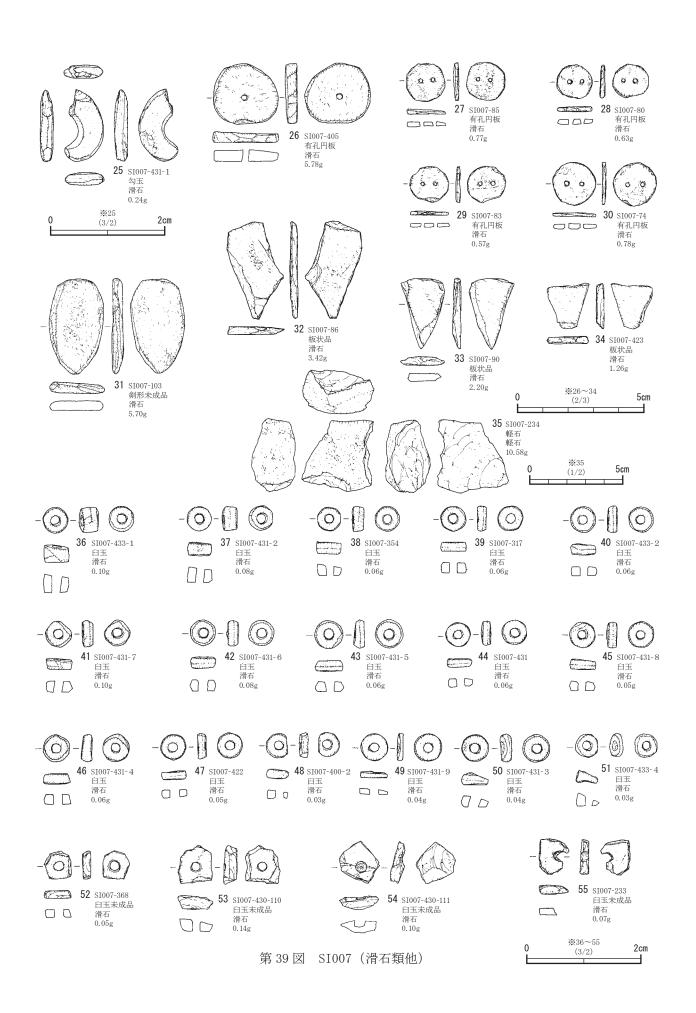
向は、すべて片面穿孔と捉えられる。ただし、臼玉未成品の穿孔方向を観察すると、製作初期段階では基本的に片面穿孔ではあるが、開孔後に反対側から孔の調整が行われている。最終的には、成品仕上げ工程で再度片面から穿孔されているため、初期の反対側からの調整を行なった痕跡が消えてしまっている可能性が高い。サイズはほぼ同じ大きさのもので構成されている。臼玉の製作過程については、第4章第2節2においてまとめたので参照されたい。

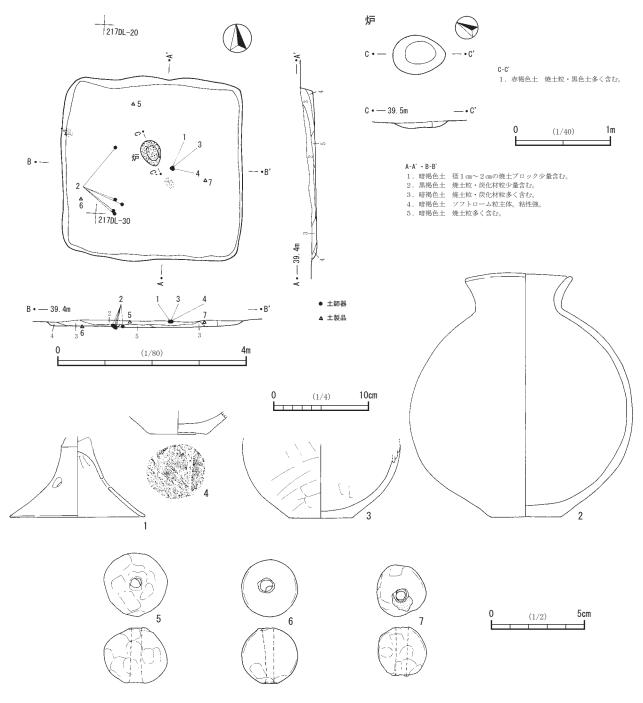
52~55は臼玉未成品である。52・53は孔の内部幅が狭いことから、表面から穿孔し、開孔した後に、 裏面から孔の調整が行われたものと推測される。上述の完成品の臼玉は、最終仕上げ段階で再度片面穿孔 することにより孔の幅が均等になるように仕上げられているが、臼玉未成品では、孔の幅が均等でないこ とが観察できる。表裏両面は研磨されている。研磨方向は臼玉完成品が表裏面とも同一方向であったが、 未成品は方向が異なっている。表裏面の研磨も最終仕上げ段階で同一方向から再度研磨されている。54は 表面からの穿孔が行われているが厚みの半分程度のところで留まり開孔されていない。表裏両面の研磨は 一部に行われているが全面は研磨されていない。55は穿孔時の破損品である。穿孔角度は表裏面に対して 斜め方向に穿孔したことにより破損したものと推測される。

SI008 (第40図、第8~10表、図版 $10 \cdot 22$)

北区北西部の217DL-20他に位置する。正方形で、短軸3.8m・長軸3.9m・深さ0.25m前後である。52cm×67cmの長楕円形の炉が中央やや北寄りで検出されたが、ピット等検出されなかった。覆土は焼土粒・炭化材粒を含む黒褐色土主体のレンズ状堆積である。主軸は、炉の位置から、N-1°-Wに推定される。

遺物は少量が中央部の炉周辺で出土した。覆土下層から床面の遺物は2・6である。1~4は土師器で、



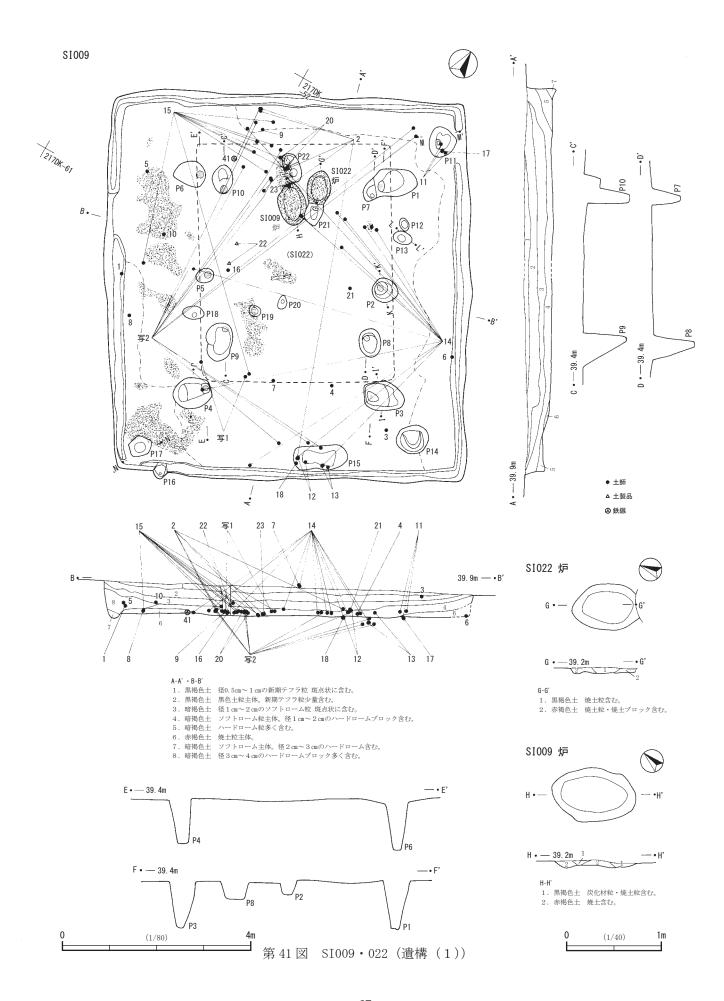


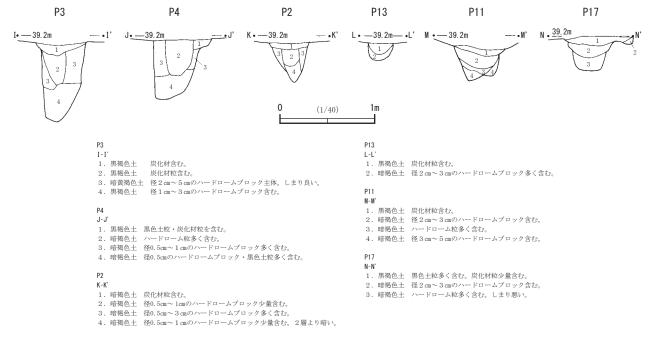
第 40 図 SI008 (遺構・遺物)

1 は透かし穴が 3 か所の高杯または器台の脚部、 $2 \sim 4$ は甕である。数は少ないが、 1 は 4 世紀後半に推測されるため、 $2 \sim 4$ の甕類も含めて、古墳時代前期の可能性がある。 $5 \sim 7$ は土玉である。 5 は最大径 $33.5 \,\mathrm{mm} \cdot$ 高さ $29.0 \,\mathrm{mm} \cdot$ 孔径 $7.5 \,\mathrm{mm}$ 、 6 は最大径 $29.5 \,\mathrm{mm} \cdot$ 高さ $29.2 \,\mathrm{mm} \cdot$ 孔径 $6.0 \,\mathrm{mm}$ 、 7 は最大径 $25.8 \,\mathrm{mm} \cdot$ 高さ $26.2 \,\mathrm{mm} \cdot$ 孔径 $6.0 \,\mathrm{mm}$ である。 手づくね成形後軽いミガキが施され、 $6 \,\mathrm{tr}$ であるが $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で $6 \cdot 7 \,\mathrm{tr}$ で 6

 $SI009 \cdot 022$ (第41 ~ 45図、第8~12表、図版10 · 11 · 22 · 23 · 24 · 25)

北区南西部の217DK-62他に位置する。SI022を拡張してSI009が造られたことが推測される。ピット数は





第 42 図 SI009・022 (遺構 (2))

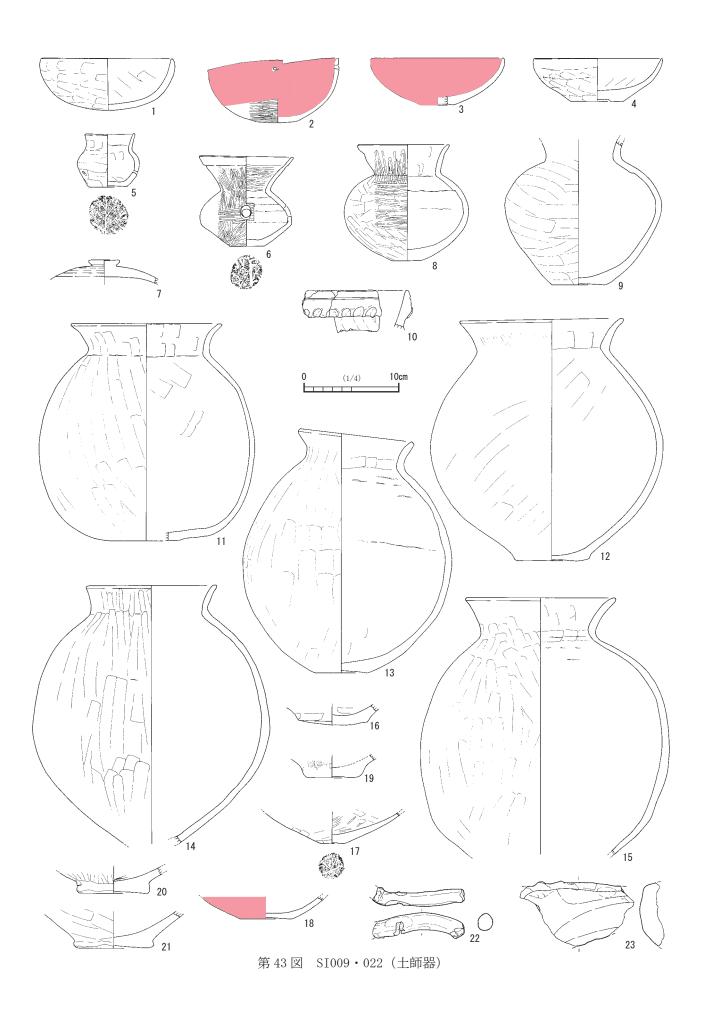
多いが、内側のSI022の最低限必要な柱穴を推測して、残りは仮にSI009の帰属とする。

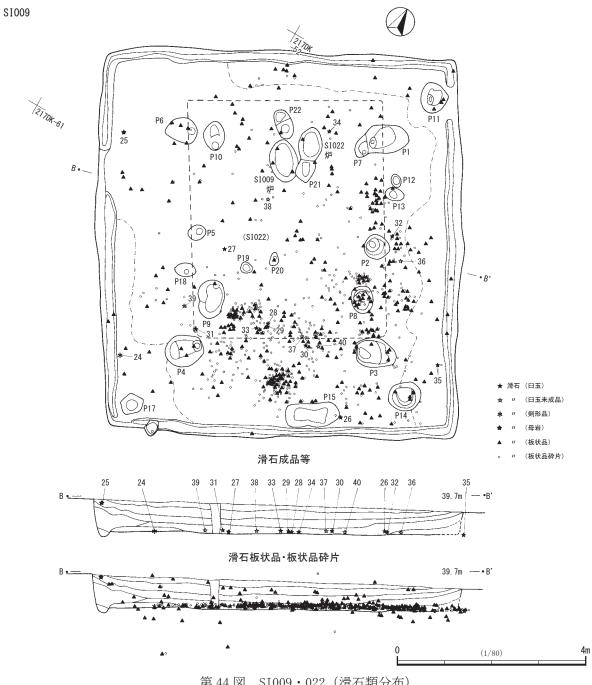
SI009は正方形で、短軸7.60m・長軸8.10m・深さ0.55m前後である。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土主体のレンズ状堆積である。炉は北寄りで、SI022の南西側に並ぶ55cm×85cmの長楕円形である。ピットは確実なSI009帰属のものを除いて19か所検出され、短径が60cm台がP1・3・4・14、50cm前後がP2・6・11・15・19で、他は20cm~30cm台、アタリが検出された柱穴はP1~6、ピットの深さはP1・3・4・6・20が100cm前後、P19が87cm、P16が65cm、P2・5・11・15・22が40cm前後、他が10cm~30cmである。P1・3・4は柱抜き取りのために穴が広げられたと推測され、主柱穴がP1・3・4・6で、P2・5・22が間に入り、P11・14・17が隅に配置され、出入口の梯子用ピットはP15に推測される。主軸はN-22°-Wに推測する。

SI022は推定長方形で、推定短軸4.0m・長軸5.0m、深さは0.55mより浅い。炉はSI009の炉の東側に並んで48cm×68cmの長楕円形。ピットは4か所で、短径はP8・9が40cm台、P7は28cmで、全てアタリが検出された。深さはP7が47cm、他が87cm前後である。主軸はSI009と同じN-22°-Wに推測される。

出土遺物は、2軒を別にせずに最初に検出されたSI009として取り上げられている。多くが新しいと推測される大型のSI009埋没時の遺物と推測される。 $1\sim21$ は土師器、 $22\cdot23$ は土製品、 $24\sim40$ は滑石類、 $41\sim43$ は鉄鏃である。土師器片は炉周辺と出入口ピットP15から多く、滑石類は全体から、特に南東部で多く出土した。多くは覆土下層から床面出土であるが、図示したものでは土師器は $8\cdot9\cdot14\cdot16\cdot21\sim23$ 等である。

土師器の $1\sim4$ は杯で、 $1\cdot2$ は底部が丸く、胴部が内湾し、器高があるもので、2は内面見込部と外面に赤彩されるが、歪みがある。また、口縁部近くに小さな穴があるが、整った丸い穴ではなく明らかな穿孔ではないので、用途不明である。 $3\cdot4$ は底部は小さいながらもあり、口径が大きく、器高が低く、胴部はやや内湾するものである。3は外面に赤彩が施される。 $1\cdot2$ が古く、 $3\cdot4$ が新しいタイプ、或いは機能の差かと推測される。5は甕のミニチュア土器である。6は胴部に穿孔のある腿で外面及び内面

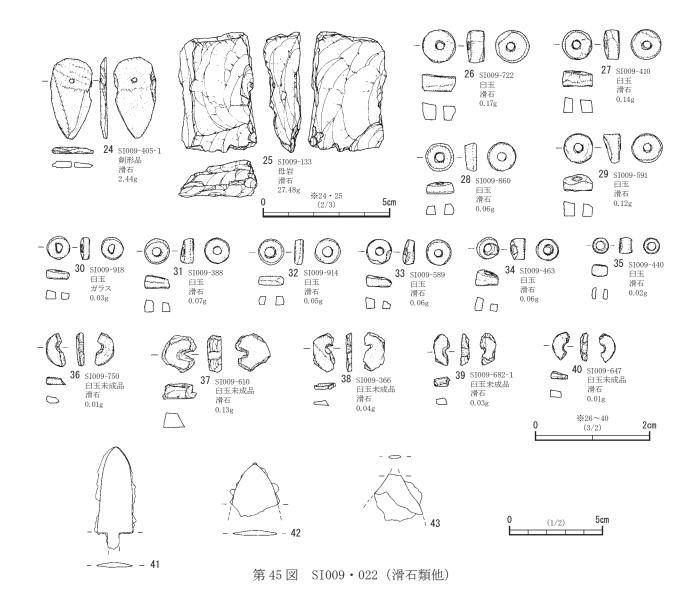




第 44 図 SI009 · 022 (滑石類分布)

口辺部はミガキがある。7は奈良・平安時代のもので、本遺構には伴わないが、或いは該期の土坑等が掘 られた可能性もあるので、ここに図示した。8~24は甕で、ほぼ器高順に並べた。8は坩に近く、9は 小型壺とも言えよう。10は折り返し口縁部とみられる。11は底部から胴部への立ち上がりが不明瞭で、成 形時に重量で下がったことが想像される。18は底部破片で、薄く、外面に赤彩があるが、杯とも判断し難 いので、壺・甕の可能性が高いと思われる。時期としては、折り返し口縁の甕破片(10)があるいは3世 後半に推測される。

22・23は土製品であるが用途が不明である。22は最大径18.0㎜・長さ96.5㎜でやや曲がった棒状である。



右手の指で持った痕跡がある。表面も胎土も黒色である。滑石製作に関係する工具或いは、土器作成時の粘土紐の残りの可能性も考えられる。23は67mm×120mm×21mmで、板状製品の砕片で、一部には指頭の整形がある。炉周辺の部材の可能性も想像される。

滑石類は、24~40を含む総計1,756点が出土した。板状品と板状品砕片の割合が極めて高いことから、素材作成工程を主に行った竪穴住居跡と捉えられる。第44図は滑石類の分布状況図である。セクション断面図は上段が滑石成品等、下段が滑石板状品・板状品砕片である。滑石成品等は、25の母岩が壁際で覆土上部出土であるが、それ以外はすべて床面直上から出土している。下段の滑石板状品・板状品砕片は大半が床面直上からの出土であるが、やや上部から出土しているものもみられる。滑石類も、土師器と同様、SI022機能時の滑石類の分布状況の痕跡は捉えられなかったので、すべての遺物がSI009に帰属する。南壁側と東壁側に集中地点がみられる。板状品砕片はこの2つの集中地点に密集して出土している。北壁側に板状品が散漫に分布し、25の母岩が北西隅に単独で出土している。中央部に位置する小型ピットのP20は、深さが105cmで柱穴とは異なる形態をしており、ロクロピットの可能性がある。臼玉等の穿孔を行う際にロクロを用いて穿孔した可能性がある。24は剣形品である。表裏両面と側面が研磨され、表面にV字状の稜

線が形成されている。上部は片面穿孔されている。25は母岩である。厚みのある分割剥片を素材としている。26~35は臼玉である。石材は30がガラス、それ以外は滑石が用いられている。臼玉の特徴は、臼玉の出土点数がもっとも多かったSI007と類似している。研磨方法は、表裏両面は同一方向で研磨されている。側面研磨による稜線は、側面中央に全周するもの(28・31・32・34)、稜線がみられないもの(29・30・33・35)、斜め方向にみられるもの(26・27)がある。穿孔角度は、すべて表裏両面に対してほぼ垂直方向に穿孔されている。穿孔幅は滑石製のものは、穿孔面・内部・開孔面ともにほぼ同じ幅で、同心円の孔が形成されている。ガラス製のものは、半円形の孔が形成されており、やや形状が異なる。穿孔方向は、最終的な穿孔痕跡はすべて片面穿孔である。サイズは異なる大きさのもので構成され、35は26の大きさの半分以下である。SI007がほぼ同じ大きさのものであったのに対して異なっている。36~40は臼玉未成品である。穿孔時の破損品と推測される。

鉄鏃 3 点はいずれも破片である。41は鏃身部の残存状況が良好な鑿箭形で、長さ45.0mm・幅19.0mm・厚3.0mm、茎部は現長8.5mm・幅6.0mm・厚さ2.5mmである。42・43は小破片であるが、41より幅広いもので、42は現長27.0mm・推定幅24.0mm、43は現長24.0mm・推定幅25.0mmで、三角形状の鏃身部が想像される。いずれも鏃身部のみで茎部が出土しなかったことから短頸や無茎のものに想像され、時期は古墳時代中期の5世紀代に推定される²⁾。

SI011 · 012 (第46図、第8~11表、図版11 · 24)

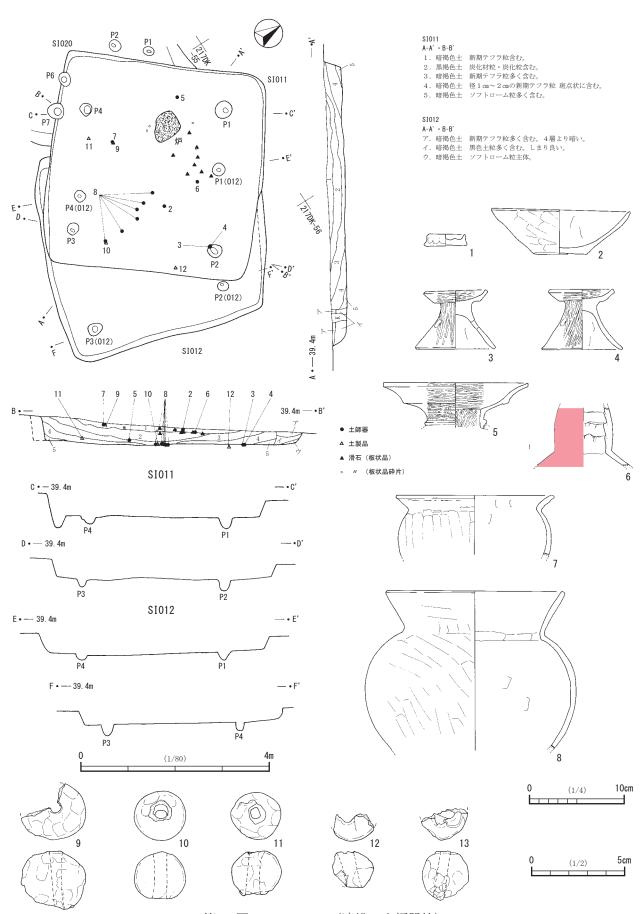
北区中央部の217DK-62他に位置し、SI011がSI012を切る。

SI011は正方形で、短軸推定4.40m・長軸4.50m、深さ0.35m前後である。炉は北西寄りに52cm×64cmの楕円形、ピットは4か所で、径は25cm前後、深さは20cm前後である。覆土は炭化物粒・焼土粒・新期テフラ粒を含む暗~黒褐色土である。主軸はN-50°-Wに推測する。

SI012は、方形で、短軸4.40m・長軸4.64m・深さ0.35m前後である。覆土は黒色土粒を多く含むしまりの良い暗褐色土である。炉はSI011によって破壊され、ピットはSI011床下からの2基も合わせて4基に推測される。短径20cm前後、深さはP1~P3が20cm前後、P4が10cmである。主軸はN-65°-Wに推測する。遺物は、SI011の中央部周辺に多く出土した。覆土下層から床面の出土が3・4・8・10・12である。

 $1 \sim 8$ は土師器である。 1 はSIO12出土の器台的なものに推測される。 2 以降はSIO11出土で、 2 は体部が直線状に開く鉢形の杯、 $3 \cdot 4$ は器台で、ミガキが施される。 5 は口辺部の外面に稜があり、内外面ミガキの壺または甕、 6 は高坏脚部、 $7 \cdot 8$ は甕である。時期については、 4 世紀中葉のものが $3 \cdot 4$ (器台)・5 (壺または甕)、 4 世紀後半のものが $7 \cdot 8$ (甕)、 5 世紀前半のものが 6 (高杯)に推定される。古い時期のものもSIO11で出土しているのは、SIO11の床より下に残っていたSIO12に伴う遺物の可能性も考えられることから、SIO12が 4 世紀中葉、SIO11が 5 世紀前半ということも考えられる。

 $9 \sim 13$ は土玉である。 9 は最大径33.6mm・高さ30.2mm・孔径6.8mm、10は最大径26.9mm・高さ24.6mm・孔径7.3 mm、11は最大径26.3mm・高さ22.5mm・孔径8.8mm、12は最大径推定25.0mm・高さ推定19.9mm・孔径8.0mm、13 は最大径推定25.0mm・高さ推定25.6mm・孔径推定6.0mmで、整形等は手づくね後ミガキで、 $9 \cdot 10$ はやや丁寧であるが、 $11 \sim 13$ はやや雑である。



第46図 SI011・012 (遺構・土師器等)

第3節 土坑等

古墳時代以降と推定される土坑は、3基確認された。

SK004 (第47図、第13表、図版11·24)

北区南東部の217DK-86に位置する。上端は径0.75m前後、下端は径0.80m前後、深さ2.5mで、確認面から深さ1.3m程まではやや開くが、以下はほぼ直に落ちる。覆土は、下層がローム粒を多く含む黒褐色土、上層が黒色土で、ローム粒・ブロックは下層ほど多く、底から1m程で煙管(1・2)が出土し、1.6m前後で巻き貝主体の貝殻がまとまって800g余(クリーニング、フルイ後の計測値)出土した。しまりは最下層も含めて全体に悪く、短期間に埋め戻されたことが推測できる。

煙管は雁首の立ち上がりが弱く、18世紀後半のものと推定される³⁾。雁首部と吸口部をつなぐ竹管は、各部の内部では、若干縮んだものの残存していた。貝殻はマルタニシ主体で、わずかにイシガイ科を含む。淡水産であり、水田や水路から採取され、汁物として食されたものが一度に廃棄されたことが想像できる。円形で深い遺構の形状、埋め戻しの状況、煙管の出土等から、人骨は検出されなかったが溶解したと推測し、近世後半の土坑墓の可能性が高いと考えられる。

SK006 (第47図、図版11)

北区中央部の217DK-44に位置する。一辺1.35m・深さ0.35mのほぼ正方形の土坑である。覆土には焼土粒・炭化材粒を多く含む。炭化材は粒であること、壁面や底面が被熱していないこと等から、炭窯ではなく、近世の炭窯等で出たものを廃棄した穴であることが想像できるが、縄文時代や古墳時代の土坑の可能性も否定できない。

SK009 (第47図、図版9)

南区北部218DM-53他で古墳時代竪穴住居跡SI004を掘り込む。短軸1.15m・長軸2.20mの長楕円形、深さはSI004確認面から0.75mである。覆土は黄色砂粒を多く含む。性格は不明である。

SD001

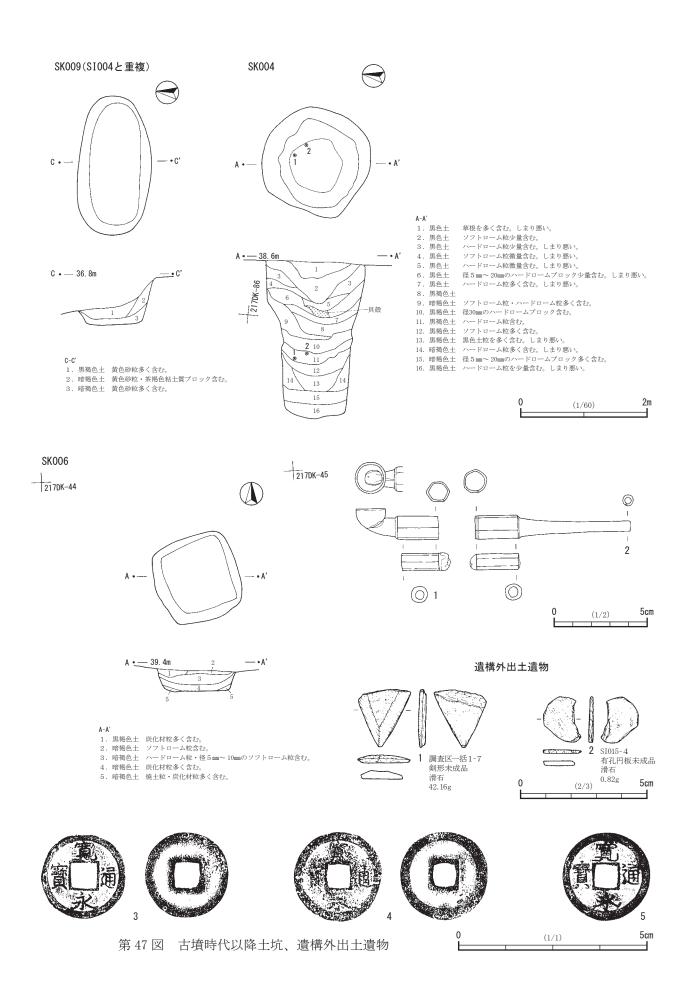
北部南端部の一部(217DK-76・85・86)の地表下0.7mで、幅0.5m・厚さ2~3cmの硬化面が6m、北東 - 南西方向に検出された。南北の低地や集落をつなぎ台地縁辺に沿った近世頃の道跡と推測・判断され、詳細な記録はない。

第4節 遺構外出土遺物

図示したものは、滑石類と金属製品であるが、古墳時代以降の遺構外出土遺物は、他にも土師器や若干の近世陶磁器類がある。

1 石製品(第47図、第11表、図版25)

1は剣形未成品である。表裏両面と側面が研磨されている。表面は研磨により Y 字状の稜線が形成されている。上部は穿孔時に破損したものと思われる。 2 は有孔円板未成品である。表裏両面が研磨されている。右部は穿孔時に破損したものと推測される。



2 金属製品 (第47図、第14表、図版24)

銭貨 4 点が遺跡内で表面採集された。図示した $3\sim5$ は銅銭、もう 1 点は錆が著しい鉄銭のため写真のみである。いずれも寛永通寶で、初鋳年は江戸時代後期18世紀前半に推定される $^{4)}$ 。

注

- 1 古墳時代土師器の編年・年代観については、加藤修司 2004「第2章 第4節 古墳時代 2 遺物 (5) 土師器の生産と 流通」『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』千葉県 を主に参考とした。
- 2 鉄鏃に関しては、荒井世志紀 1997「香取・海上・匝瑳地域の様相」ほか『多知波奈考古』第2号(特集 東国の鉄 鏃)橘考古学会、安藤路由 2004「第2章 第4節 古墳時代 2 遺物 (10) 武器」『千葉県の歴史 資料編』千葉県を参 考とした。
- 3 煙管の年代観については、江戸遺跡研究会編 2004『江戸考古学研究事典』柏書房 を参考とした。
- 4 銭貨の鋳造地に関しては、小川浩編 1972『寛永通寶銭譜』を参考とした。

第8表 古墳時代竪穴住居跡計測表

	時 代	主軸 N-53°-E	形状正方形	短軸 4.0	長軸	深さ	<i>a</i> = =		上	端	下	端		備考
	古墳時代中期後半	N-53°-E	正方形	4. 0			番号	形状			-		深さ	
	古墳時代甲期後半	N-53°-E	止万形	4.0					短径	長径		長径		
S1002					4. 2	0. 15	炉	長楕円形	39	57	18	31	5	DIT # 12 1 0 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
S1002							P1	長楕円形	48	70	8	9	38	以下、各ピットの深さは厚さ 20 cm 前後の貼床除去後
51002							P2	楕円形	48	59	15	19	45	17/2 - 7/4/10/10/20
S1002							P3	長楕円形	22	34	7	12	37	出入口梯子用か
SI002							P4	円形	40	42	18	22	38	
SI002							P5	円形	33	35	10	12	29	
SI002							P6	長楕円形	22	34	6	8	12	
	古墳時代中期後半	N-42°-W	方形	5. 6	5. 8	0. 33	P1	円形	9	10	4	5	39	以下、各ピットの深さは厚さ10㎝
														前後の貼床除去後
							P2	円形	6	7	1	1	49	
							P3	円形	10	13	3	4	26	NT 812 1 0 M 2 4 F 2 1
SI003	古墳時代前期~中期	N-42°-W	方形	5.8	不明	0.30	P1	円形	11	12	5	6	38	以下、各ピットの深さは厚さ 15 cm 前後の貼床除去後
							P2	円形	11	13	5	6	38	IN COMPANY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY OF
							P3 (貯蔵穴)		84	90	47	52	38	
SI004	古墳時代中期後半	N-14°-W	隅丸方形	3. 7	4. 0	0. 25	P1	円形	20	22	8	11	6	
		または	1117 43775				P2	円形	18	21	6	7	10	
		N-76°-E					P3 (SK009)	長楕円形	78	147	53	129	32	SI004 覆土を切る
SI005	古墳時代中期後半	N-4°-E	方形	4. 54	4. 80	0.38	炉	楕円形	58	92	26	53	4	やや平行四辺形
							P1	円形	24	28	12	14	45	
							P2	円形	21	23	8	10	56	
							P3	楕円形	17	26	5	7	14	出入口梯子用か
							P4	円形	19	20	8	10	43	
SI006	古墳時代中期	N-25°-E	方形	4.6 +	4.9 +	$0.02 \sim 0.25$		楕円形	20	26	8	10	14	西側の 4/5 は急斜面で崩落か
							P2	楕円形	35	40	19	22	10	
							P3	楕円形	18	20	8	10	3	
SI007	古墳時代中期後半	N-20°-E	方形	5.05	4.70	0.43	炉	長楕円形	47	75	28	45	6	
					~ 5.20		P1	円形	31	35	15	16	28	
							P2	円形	26	30	12	14	42	
							P3	円形	26	32	14	15	8	
							P4	円形	35	37	12	13	42	
							P5	長楕円形	32	45	18	26		出入口梯子用か
							貯蔵穴	隅丸方形	93	112	48	72		P3 と重複
_	古墳時代前期	N-1°-W	正方形	3. 8	3. 9	0. 25	炉	長楕円形	52	67	33	50	5	LL TEXT A TOTAL A
S1022	古墳時代前期	N-22°-W	長方形?	(4.0)	(5.0)	不明	SI022 炉	長楕円形	48	68	37	55		拡張して SI009 か
							P7	楕円形	28	50	8	9	_	アタリあり
							P8 P9	楕円形 楕円形	46	58 82	6	7		アタリあり
							P10	精円形 楕円形	48	62	12	13		段差あり抜き取り痕か。アタリあ 段差あり抜き取り痕か。アタリあ
STOOD	古墳時代中期後半	N-22°-W	正方形	7. 6	8. 1	0.55	SI009炉	長楕円形	55	85	36	70	5	校左めり扱さ取り扱が。 / クリめ
31009	口供时八十州以十	11-22 -11	11.77/19	1.0	0. 1	0.55	P1	楕円形	66	88	6	7	97	アタリあり
							P2	円形	48	52	5	6	43	
							P3	楕円形	64	90	7	8		アタリあり
							P4	楕円形	69	79	10	11		段差あり抜き取り痕か。アタリあ
							P5	楕円形	30	38	9	11		アタリあり
							P6	楕円形	53	66	11	13		アタリあり
							P11	円形	53	60	6	9	38	
							P12	楕円形	22	28	14	18	11	
							P13	楕円形	30	40	16	19	20	
							P14	楕円形	62	70	30	34	29	
							P15	長楕円形	50	112	30	72	41	柱穴2つの掘方が結合か
							P16	楕円形	27	33	3	4	65	壁と周溝にかかる。外側から 125
							P17	円形	43	53	22	24	33	
							P18	楕円形	27	46	9	11	21	
							P19	円形	48	82	6	8	87	
							P20	楕円形	17	30	7	8	105	
							P21	楕円形	35	50	14	28	9	
							P22-1	楕円形	33	64	18	22	47	
		I					P22-2	楕円形	33	64	17	18	38	
				(4.4)	4. 5	0.35	炉	楕円形	52	68				SI012 を切る
SI011	古墳時代中期前半	N-50°-W	正方形			I	P1	円形	32	35	9	11	26	
SI011	古墳時代中期前半	N-50°-W	正方形										_	
SI011	古墳時代中期前半	N-50°-W	正方形				P2	円形	26	30	9	15	24	
SI011	古墳時代中期前半	N-50°-W	正方形				P3	円形	23	25	7	15 12	24 18	
							P3 P4	円形 円形	23 25	25 28	7 13	12 18	18 18	
	古墳時代中期前半 古墳時代前期	N-50°-W		4.40	4. 64	0. 35	P3 P4 P1	円形 円形 円形	23 25 28	25 28 32	7 13 7	12 18 10	18 18 19	
				4. 40	4. 64	0.35	P3 P4	円形 円形	23 25	25 28	7 13	12 18	18 18	

第9表 土師器観察表(1) []: 遺存值(): 復元值

			1	様な中		計測値	(cm)			調整		胎土	焼成	每		
図版 遺構番号 遺物番号 器 形	遺物番号器			X(%)	四	底径	福	開部 最大径	内面	外面	底部			內面	外面	=
28 本		茶		70	12.4	4.4	3.8	-	î,	1.4	ヘラケズリ	石英・長石等の微砂粒やや多	良好	褐灰色	灰褐色~黒褐色	全体に歪みあり。外面に輪積痕 あり、雑な調整
20 SI001 8,35 熟 期台	8,35		盤	胴部~底部 70	ı	7.5	[8.4]	1	îh	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラケズリ	石英・長石等の微砂粒やや多	良好	明赤褐色	橙色	
- 26	素 花		世	底部 100	ı	7.2	[2.8]	1	ヘッナボ	ヘラケズリ ヘラナデ	木葉痕	石英・長石等の微砂粒やや多	良好	にぶい赤褐色	褐灰色~橙色	底部に木葉痕あり
S1003 1 #K	1	茶		85	12.6	5.1	4.6	7	ヘラナボ ナボ	ヘラナボ ナボ	ヘラナボ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	橙色~黒色	橙色~黒色	口縁部をつまんで外反させた時 の爪痕跡か?
1,2,4,21 杯		芹		50	13.0	4.3	5.8	1	ヘラナボ	ヘラナボ	ヘラナボ	石英・長石・黒色石小粒やや多	良好	橙色~明褐色	橙色~黒褐色	
20 S1002 3.7,10,26 高杯	3,7,10,26	極		7.0	19.1	0.6	14.3	1	î,	1.4	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多 赤色粒子少	良好	にぶい橙色	淡赤橙色	
SI002-2 SI003-4・5 高杯	-5			杯部45	19.1	1	[6.5]	1	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ ミガキ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	明赤褐色~黒色	にぶい黄褐色~黒色	内外面スス付着
SI003 2 ■	2	湽		50	11.6	1	[13.0]	7 111	ヘラナデ ハケメ ミガキ ナデ	ヘラナデ ハケメ ミガキ		石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	灰褐色	明赤褐色	輪積痕、指圧痕あり
一 1, 17 器台 口	17 器台			口縁部 20	(10.8)	1	[4.1]	-		ナデ ミガキ		石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	明赤褐色~にぶい黄褐色	明赤褐色~橙色	
20 4,5 꽳		鬎		7.0	16.6	1	[18.6]	23.1	ヘラナデ ハケメ ナデ	ハケメ ヘラナデ	ı	石英・長石等の微砂粒やや少	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
21 S1002 6 競	9	氍		75	17.1	ı	[22.1]	22.8	ヘラナボ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	ı	石英・長石等の微砂粒やや少	良好	橙色~にぶい橙色	赤褐色~黒色	胴部中位スス付着
33		脳		25	(18.7)	1	[4.1]	1	ナナ	14	-	石英・黒色石微粒やや少	良好	にぶい黄橙色	にぶい褐色	内面に輪積痕あり
一 3, 4, 27 選	4, 27		_	□縁部 25	(16.9)	1	[5.4]	-	ハケメ ナギ	ハケメナボ	1	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	良好	明赤褐色~赤黑色	明赤褐色~黒褐色	内面に輪積痕あり
12 選	12 選	Н		底部 100		4.6	[3.2]	(ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	にぶい赤褐色	橙色~黑色	
- S1004 7, 8, 10 選	7, 8, 10	嶽		20	ı	ı	[15.3]	21.0	ヘラナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	ı	石英・長石・黒色石等の小砂粒やや多	良好	にぶい赤褐色	橙色~黑色	開部中位スス付着
-	е е	茶	ı	80	15.3	1	0.9	1	ハラナボ ナボ	ナナットナッ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	赤色~橙色	赤色~橙色	内外面赤彩。内面下方の赤彩は 磨滅著しい
7 杯	7	茶	l	85	14.7	ı	6.5	1	ナナ ナナー	ナポーヘッナボ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	赤色~橙色	橙色	内外面赤彩。外面の赤彩は口辺 部と体部の一部以外不明瞭
49 小型土器		小型土器		順部 95	5.5	ı	[3.9]	1		ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	指頭 ヘラケ ズリ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	橙色	橙色	
70,204 杯		苯		09	12.1	4.4	4.4	1	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好		赤色~暗赤灰色	
1,427	1,427	苯		06		4.1	6.3	- +		ヘラナデ	ヘラナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	$\overline{}$	ハ黄橙色~明黄褐色	にぶい黄橙色~黒色	器肉薄い
24,25 器台		器		40	(13.1)	1	[7.2]	ζ 	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデ	1	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	赤色	赤色~橙色	内外面赤彩
411,412,416 高杯		高杯		杯部 100	15.8	1	[4.6]	- +	îk	ナナ		石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	橙色~黒色	橙色~黒色	内外面スス付着
	207,258,285, 287,338,423, 425	声		杯部 60	20.6	ı		- iii	ガキ	ミガキ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	赤色~にぶい黄橙色	赤色~にぶい橙色	内外面赤彩
21 3100/ 411 高杯	411	本		杯部 95	19.7	ı	5.7	1	ナナ ナナシ	ヘラナデ ナデ ミガキ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	赤色・赤褐色・黒色	赤色・赤褐色・黒色	内外面赤彩
420,427 高杯		恒		40	-	(14.6)	[8.7]	- ++		ヘラナデ ナデ ミガキ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	橙色	橙色~にぶい橙色	内面指圧痕あり。外面脚橋部の ミガキはあまり丁寧ではない
42		司杯		脚端 20	1	1	[7.3]	ナナ	îk	ヘラケズリ	1	石英・黒色石の微砂粒やや多	良好	橙色	橙色	内面に輪積痕
23 高杯		自杯		脚部 40	-	1	[6.9]	- }		ヘラケズリ ナデ	_	石英・黒色石の微砂粒やや多	良好	明赤褐色	橙色~にぶい橙色	脚部内側に指圧痕
3		加州		脚部 50	ı	ı	[6.9]	- + 7		ヘラケズリヘラナデ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	橙色	にぶい赤褐色	内面に輪積痕
405,407 高杯		即林		脚部80	1	11.8	[7.8]	1	îk	ミガキ		石英・長石主体の微砂粒多	良好	にぶい橙色~黒褐色	にぶい黄橙色~黒褐色	内面に輪積痕
28		高杯		脚部 100	1	12.2	[5.9]	-	ヘラナデ ナデ	ナデ ミガキ	_	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	明赤褐色	橙色	歪みあり
344,422, 高杯	422,	車本		脚部 100	ı	15.0	[4.7]		ヘラナボ ナボ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	にぶい橙色~黒褐色	にぶい橙色~黒褐色	
S1007 85.185.211, 404.405, 411.427	85,185,211, 404,405, 411,427	Ħ		85	10.9	2.7	9.7	9.5	ラナデ	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ	石英・黒色石の微砂粒やや少	良好	橙色~黒褐色	橙色・明赤褐色・黒色	開部下半赤彩か ?
22 20,31,264, 選 268,271,423 選		凝		09	12.8	1	15.5	15.7	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデ	_	石英・長石等の微砂粒やや少	良好	橙色~黒褐色	明赤褐色・黒褐色・にぶい褐色	
	-		1		1	1	1	-								

第9表 土師器観察表(2) []: 遺存值(): 復元值

				1	- Parish	the	計測値 (cm)			調整		1 盤	焼成	翻	H100	
海中	図別	遺構番号 遺物番号	器	半	Matrix (%)	口径底	底径 器高	馬 開部 最大径	内画	外面	所			内面	外面	a 称
17		10,14,15, 268,273,422		3	30 1	12.5	- [8.6]	5] 18.7	ヘラナデ	ヘラナデ	_	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好。	にぶい赤褐色~褐灰色	赤褐色・黒褐色・にぶい黄褐色	内面輪積痕、指圧痕あり
18		12,22,142, 258,423,426		製	40 1	14.6	- [11.0]	.0] 18.3	ヘラナデ ナデ	ヘラケズリ ナデ	_	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好棒	橙色~灰褐色	橙色	
19		357,381		熟 3	30 (1	(12.8)	- [11.1]	.1] 22.7	ヘラナボ ナボ	ヘラナデ ナデ	-	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好。	にぶい褐色~灰褐色	褐灰色~橙色	
20		338		選 3	30 (1	(19.0)	- [18.0]	.0] 23.8	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデ	ı	石英・黒色石等の微砂粒やや多	良好権	橙色	橙色~黒褐色	内面に輪積痕あり
37 21	22 SI	SI007 45,48,423		三 5	50 1	16.6 5.	5 25	5 23.4	14	ヘラナボ	ヘラナボ	石英・長石・黒色粒等の微砂粒やや少	良好。	にぶい赤褐色	橙色~黒褐色	
22		250,404,405, 406		(2)	50 1	16.6 6.	6.5 23.	.6 22.5	ナナ ナナじく	ヘラケズリ ヘラナデ ナギ	ヘラケズリ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好棒	橙色~黒色	明黄褐色~褐灰色	外面スス付着
23		$120 \sim 129, \\ 143,149 \sim \\ 151,168,170$		製	80	16.2 6.	6 25	.8 25.0	デナナ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	ナナン	石英・黒色石等の微砂粒やや少	良好明	明黄褐色~黑色	明黄褐色~黒色	内面に輪積痕あり。外面スス付 着
24		185,236,256, 257		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	60 1	16.2 7.	7.2 28.5	.5 25.0	トナナ ナナ	トナナル ナポ	ヘラケズリヘラナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好明	明赤褐色~黒色	橙色~黒色	外面頸部付近指圧痕あり、スス 付着
-		2,3,13		高杯 3	30	- 14	14.3 [8.4]		1	1	1	石英他微~小粒の砂粒やや多	良好用	明赤褐色~褐灰色	明赤褐色	内外面磨滅により調整不明瞭
40 ²	22 SI	3,10,11,15, SI008 16,17		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	90 1	11.4 7.	7.2 25.	.8 23.6	I	I	ı	石英等の微砂粒やや少	良好	橙色~灰褐色	橙色・にぶい黄橙色・黒色	内外面磨滅により調整不明瞭
3		4,13		禁 1	10	- (6.	(9.9)	8] 16.7	ヘラナデ	ヘラナボ	ヘラナボ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好	赤褐色	明赤褐色~黒褐色	
4		13		養 底部	底部 100	- 6.	6.0 [2.2]	- [5	ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕	石英・長石等の微砂粒多	良好	褐色	暗赤褐色	底部に木葉痕あり
-		121		9	90 1	14.0	- 5.5	1	ヘラナデ ナデ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	ı	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好	赤褐色	赤褐色~にぶい褐色	
7	22	141,215,5 221,946	220,	**************************************	85	14.8	- 6.7		ヘッナル ナボニ	ヘットナ ナイツハ ナオ ナルバー	I	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	良好用	明赤褐色~灰赤色	赤褐色・明赤褐色・黒色	口縁部に径3~5㎜の穿孔あり、故意と思われるが用途不明。 り、故意と思われるが用途不明。 内面見込部、外面赤彩あり。磨 滅でミガキも不明
т		65		杯	40 (1	(13.9) (3.	(4) 4.9	- 6	ナナ	ナナットナット ナイット	ヘラケズリ	石英・黒色石等の微砂粒やや少	良好。	赤色~褐灰色	赤色~にぶい黄橙色	内面見込、外面からの被熱で斑状刺離。赤彩は内面黒色部になく外面下方薄い
4		199		林 10	1000	13.6 5.	5.7 4.6		ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデ	無調整 ヘラ ナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好 1	明黄褐色~黑褐色	橙色~黒褐色	外面に輪積痕あり
C		132	1111	ミニチュ ア土器	100	5.2 4.1	.1 5.6	9 6.5	ヘラナデ ナギ	ヘラナボ ナボ	木葉痕	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好 柞	橙色	橙色	開部に 2.5 × 6.0㎜の穿孔あり。 底部に木葉痕あり
9		40		6 ■	95 1	10.0 3.	3.5 9.6	9.7	ヘラナデ ナデ ミガキ	ヘラナデ ハケメ ナデ ミガキ	木葉痕	石英・長石等の微砂粒やや少	良好 *	福色~暗褐色	明赤褐色・黒褐色・黒色	内面に輪積痕あり。胴部に径 1 cm程の穿孔
7		66		整 4	40		- [2.6]	- [9	ナデ	ロクロ成形のまま	1	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好。		にぶい褐色	奈良・平安時代
8		120		8	(3	(9.8) 3.1	.1 12.3	.3 13.1	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデ ミガキ	ヘラナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好 票	にぶい黄橙色・明赤褐色・ 黒褐色	橙色・明黄褐色・黒色	内面に輪積痕あり
6		145		海 英麗	底部 100 開部 100	- 5	.6 [15.4]	.4] 16.3	11-1-	トナナル ナル	ヘッナボ	石英・黒色石等の微砂粒やや少	良好。	にぶい橙色~黒褐色	にぶい赤褐色・にぶい黄橙色・ 黒褐色	内面口縁付近・外面一部にスス 付着
10	23	128,946		亜	口縁部破片		- [4.2]		ナデ	ナデ 指ナデ	1	石英・黒色石等の微砂粒やや少	良好用	明赤褐色	橙色	
11		10,11,9		製	85	15.8 (7.	(7.0) 22.	.9 23.5	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ	石英・黒色石等の微砂粒やや少	良好。	にぶい黄橙色・黒褐色	にぶい黄橙色・黄橙色・黒褐色	胴部の下方は恐らく成形中に重 さで歪んだか?
12		87,88,201		※	80 1	17.2 7.	7.8 25.6	.6 23.8	ヘラナデ ナデ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	ヘラナデ	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや少	良好用	明赤褐色~褐灰色	明赤褐色~褐灰色	
13		84,200		9	09	(12.2) 5.	5.5 24.4	22.0	ヘラナデ ナデ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	ヘラナデ	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	良好棒	橙色~黒褐色	橙色~黒褐色	器形に歪み
14		24,26,27,29, 93,100,126, 144,200,201, 207,222,943, 946		() () () () () () () () () ()	口緣部 100 開部 60	13.7	- [27.3]	.3] 25.0	ヘラナボ ナボ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	I	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	良好 柞	橙色~褐灰色	にぶい黄橙色・橙色・褐灰色	
15		147,156,157, 168,188,203, 209,213,214, 218,220,946		数	80 (1	(15.8)	- [27.2]	-	ヘラナボ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ	I	石英・黒色石の微砂粒やや少	良好棒	橙色~黒褐色	發色・明黄褐色・黒色	

第9表 土師器観察表 (3) []:遺存值():復元值

_		_	_	_	_		_				_				_	_	
	垂		底部に木葉痕の重複?	外面に赤彩あり	内面剥離顕著			写真のみ	写真のみ	ミニチュア土器の器台の可能性 ある不明土製品		円形透かし穴3個			内面に輪積痕あり。外面赤彩		ハケメ状のヘラケズリ、ナデ
	外面	にぶい褐色	赤褐色	明赤褐色~橙色	にぶい橙色	明赤褐色	橙色	橙色~褐灰色	橙色~褐灰色	橙色~にぶい赤褐色	橙色~褐灰色	橙色	橙色~にぶい橙色	橙色~にぶい赤褐色	赤色	橙色~褐灰色	明赤褐色~赤灰色
色	内面	赤灰色	にぶい褐色~灰褐色	黒褐色	橙色	にぶい褐色~褐灰色	にぶい褐色	にぶい赤褐色~橙色	にぶい橙色~黒褐色	褐灰色	橙色	橙色	にぶい橙色	橙色~にぶい褐色	橙色	にぶい橙色~褐灰色	橙色~灰褐色
焼成		良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好							
胎		石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	石英・長石・黒色石等の微砂粒やや多	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや多	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや多	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや多	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少	石英・黒色石・長石等の微砂粒やや少
	底部	ヘラケズリ	木葉痕	ヘラナボ	ヘラナボ	ヘラケズリ	ヘラナボ	ı	ı	外周無調整 内側指ナデ	ヘラナボ	ı	ı	ı	1	1	_
望 整	外面	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ハケ	ヘラケズリヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	粘土ひも貼り付け 後つまみ上げ	トナナ ナナ	ヘラナボ ナボ	ヘラナボ ナボ ミガキ	ヘラナボ ナボ ミガキ	ヘッナボ	ヘラナデ ナデ	ヘラケズリ ヘラナデ ナデ
	内面	ヘラナデ	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナナヤイ	ナナ	ヘラナギ	デナレく	強めの指ナデ	トナナナ ナナ	ヘラナデ ナデ ミガキ	ヘラナボ ナボ ミガキ	ナデ ミガキ	ヘラナボ ナボ	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ
	胴部 最大径	ı	1	ı	ı	ı	ı	I	I	I	ı	ı	ı	ı	Ι	16.1	24.6
(cm)	器	[2.3]	[3.4]	[2.4]	[5.4]	[5:9]	[3.9]	I	ı	1.3	4.9	6.3	6.4	[4.8]	[6.5]	[6.5]	[17.0]
計測值	底径	7.0	2.7	5.6	5.6	7.0	8.2	ı	I	4.5	5.6	8.4	8.5	I	ı	ı	ı
	口	1	ı	ı	ı	ı	ı	ı	I	4.0	14.7	6.7	9.9	15.3	ı	(16.8)	18.9
単た中	(%) (%)	底部 100	底部 100	成部 100	底部90	底部90	底部30	開第30	順部 40	92	09	100	06	20	脚部20	10	20
	器	難	難	壷か	凝	影	凝	御	瓤	器台?	*	器	器	新	高杯	凝	難
	遺物番号	178	91	201	943,945	155,218	48	104,111	85,142,148, 156,163,169, 212,215,220, 227,233	П	13,72	26	26,72	45	18	52	$60,62 \sim 65.69.72$
	遺構番号					00010	21009			SI012				SIO11			
	図	ı	ı	ı	ı	ı	ı	23	24				24				
	図 毎 中	16	17	18	43 19	20	21	1	ı		2	т	46	ιΩ	9	7	∞
1	描図	l			4			'	'	l			4				

第 10 表 古墳時代土製品観察表 []:遺存值 ():復元値

+46 1508	番号	tool like:	遺構	遺物	種類	遺存度	fin	+測値(mm)	重量	成形・調整	胎士	色 調	備考
押凶	曲万	凶水	番号	番号	性規	(%)	最大径	孔径	高さ	(g)	DX.775 * 詞(全	府 工	巴 胸	/明 - 今
34	3	24	SI005	16	土玉	90	30. 5	8. 5	26. 0	21.7	手づくね後軽いミガキ。丁寧	石英他の微砂粒少量	にぶい赤褐色	
	5	24	SI008	9	土玉	95	33. 5	7. 5	29. 0	29. 9	手づくね後軽いミガキ。丁寧	石英他の微砂粒少量	褐色	
40	6			5	土玉	90	29. 5	6. 0	29. 2	26. 0	手づくね後軽いミガキ。やや雑	石英他の微砂粒多量	にぶい赤褐色	
	7			12	土玉	95	25. 8	5. 0	26. 2	18. 0	手づくね後軽いミガキ。やや雑	石英他の微砂粒少量	明褐色	
43	22	24	S1009	177 179	工具?	95 ?	18. 0	長さ	96. 5	37. 1	手づくね	石英他の微砂粒少量	黒色 (表面・胎土共 還元焼成)	右手の親指と人差し指ではさみ、 他の指で支えた痕跡がある。先 端部が欠損していると推測され、 滑石工房の工具的なものの可能 性も想像される
	23			221	炉材?	?	[67] >	< [120] >	< [21]	141. 9	指頭による整形 部分的に残存	長石他の砂粒多量	明赤褐色	板状土製品の破片。炉周辺の部 材の可能性あり
	9	24	SI011	52	土玉	70	33. 6	6. 8	30. 2	18. 8	手づくね後軽いミガキ。やや丁寧	石英他の微砂粒少量	にぶい赤褐色	
	10			69	土玉	95	26. 9	7. 3	24. 6	15. 8	手づくね後軽いミガキ。丁寧	石英他の微砂粒少量	灰赤色	
46	11			36	土玉	100	26. 3	8.8	22. 5	14. 6	手づくね後軽いミガキ。やや雑	褐色石粒やや多量	明赤褐色	
	12			29	土玉	30	(25.0)	8. 0	[19.0]	3. 9	手づくね後軽いミガキ。やや雑	褐色石粒やや多量	赤褐色	
	13			74	土玉	50	(25.0)	(6.0)	[25. 6]	7. 3	手づくね後軽いミガキ。やや雑	石英他の微砂粒少量	黒褐色	

第11表 古墳時代滑石類遺構別組成表

器種遺構	SI001	SI002	SI003	SI004	SI005	SI007	SI009	SI011	遺構外	総計
白 玉						16 0. 91	10 0. 78			26 1. 69
日 玉 未 成 品		7 0.81				4 0. 36	5 0. 22			16 1. 39
勾 玉						1 0. 24				1 0. 24
有 孔 円 板						5 8. 53				5 8. 53
有孔円板未成品	1 3. 03	2 4. 69							1 0. 82	4 8. 54
剣 形 品	1 2. 24	1 2.09					1 2. 44			3 6. 77
剣 形 品 未 成 品	1 1. 98				1 1. 13	1 5. 70			1 42. 16	4 50. 97
母岩				1 6. 15			1 27. 48		3 65. 80	5 99. 43
板 状 品	38 34. 80	314 113. 32	31 17. 60	1 0. 23	5 3. 58	207 77. 29	526 216. 17	9 3. 26	22 16. 83	1, 153 483. 08
板状品砕片	1 0.05	118 3. 51		1 0. 05		133 3. 37	1, 213 25. 52	5 0. 10	5 0. 20	1, 476 32. 80
軽 石						6 18. 61			1 0.83	7 19. 44
合 計	42 42. 10	442 124. 42	31 17. 60	3 6. 43	6 4. 71	373 115. 01	1, 756 272. 61	14 3. 36	33 126. 64	2, 700 712. 88

[上段:点数、下段:重量(g)]

第12表 鉄鏃計測表

遺構	遺構種類	挿図	番号	図版	遺物	取り上	材質	名称	全長		鏃身			頸部		重量	備考
. 返1件	息特性規	押凶	留り	IZITIX	番号	げ方	何貝	油柳	土灰	長さ	幅	厚	長さ	幅	厚	里里	/#I ∕5
		45	41	24	149	点上げ	鉄	鉄鏃	⟨45. 0⟩	45.0	19.0	3.0	⟨8.5⟩	6.0	2.5	10.7	鏃身部の残存は良好
SI009	古墳時代中期 竪穴住居		42		944	一括	鉄	鉄鏃	(27.0)	(27.0)	⟨24. 0⟩	3. 0	_	_	_	4. 1	F-2 の a, b は別個体の可能
	327422		43		944	一括	鉄	鉄鏃	⟨24.0⟩	⟨24. 0⟩	(25.0)	2.0	-	_	-	3. 9	性の方が高い

第13表 煙管計測表

遺構	遺構種類	挿図	図版	遺物	名称	材質	長さ	火』	 II径	肩部	7径	重量	残	存羅宇	(竹製)		備考
退件	退件性規	押凶	凶加	番号	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	付貝	KO.	外径	内径	外径	内径	里里	長さ	外径	内径	重量	1佣 行
				3	雁首	銅	44. 0	16. 0	14. 0	12. 0	10.0	12, 4	⟨25. 5⟩	⟨8. 0⟩	⟨5. 0⟩	(0.9)	断面は六角形。F-3 と F-4 は羅宇 でつながるセット。羅宇が各部の
SK004	近世土坑墓?	第 47 図	24	遺物	名称	材質	長さ	吸口	先端	肩部	『径	重量	残存網	羅宇 (か	竹製)		内部に残存していたが、乾燥で縮 んでいる。間の部分は腐食で残存
3K004	旦旦上列室 :	1, 2	24	番号	2017	竹貝	KC	外径	内径	外径	内径	里里	長さ	外径	内径	重量	せず。金属部分は126 mm。消失し
				4	吸口	銅	82. 0	6. 0	3. 0	12. 7	10. 0	16. 3	⟨26. 5⟩	⟨8. 0⟩	⟨5. 0⟩	(0.5)	た羅宇部分も含めると全長は約 250 mm前後と推定

第14表 銭貨計測表

挿図	番号	FOR IME	遺構	遺物	銭 種	材質	推定鋳造地	初鋳年	F	外縁	外径	外縁	内径	内郭	外径	内郭	内径	外縁	内面	重量	備考
押凶	番万	凶加	退件	番号	支 性	村員	推及树垣地	元号	西暦	縦	横	縦	横	縦	横	縦	横	厚	厚	里里	7佣 石
	3		表採	005a	寛永通寶	銅	武蔵国江戸深川亀戸村	寛永5年	1708	22. 5	22. 5	19.0	19.0	8.3	8. 1	6.8	6.8	0.8	0.6	2. 31	5a・5b が貼 り付いてい
47	4		表採	005b	寛永通寶	銅	紀伊国雑賀荘中之島村	元文2年	1737	23. 8	23. 6	18.9	18. 9	7.8	7.5	6. 2	6. 2	1.0	0.8	2.84	
47	5	24	表採	005c	寛永通寶	銅	出羽国秋田川尻村上野	元文3年	1738	23. 2	23. 0	18. 5	18. 8	7. 2	7. 2	6. 3	6.3	1. 1	0.8	2. 56	5d と貼り付 き、鉄錆付 着
	_		表採	005d	寛永通寶	鉄	不明	元文4年	1739	25. 3	25. 1	21. 0	21. 0	_	_	7. 5	7. 2	1.8	1. 2		5c と貼り付 き。錆化で 数値は参考

第4章 まとめ

第1節 縄文時代 (第48~50図、第15表)

竪穴住居跡12軒、陥穴1基、フラスコ状土坑1基、土坑5基、ピット群2群である。帰属時期はおおむね、 前期後葉浮島式期〜興津式期、前期前葉阿玉台式期に比定される。

各遺構出土遺物は、殆どの遺構で複数の型式にまたがって幅がある。第15表に土器の時期別割合を、第49·50図に北区の重量分布を示し、以下、竪穴住居出土土器の割合を記す。太字は割合の多い時期である。

竪穴住居跡

SI010 (円形): 前期中葉 (黒浜) 11%、前期後葉 (諸磯・浮島・興津式) 11%、

中期前葉(阿玉台主体)77%、中期後葉(加曽利E)1%、後期後半1%未満

SI013 (隅丸長方形):早期 4 %、前期中葉 9 %、前期後葉23%、中期前葉64%、

後期後半(沈線文) 1%未満

SI014 (方形): 前期中葉 6 %、前期後葉28%、**中期前葉64**%、中期中葉 (勝坂) 3 %、 中期後半 2 %、後期後半 (沈線文) 1 %

SI015 (方形): 前期中葉 1 %未満、前期後葉47%、中期前葉47%、中期後半 6 %

SI016 (楕円形):前期中葉32%、前期後葉17%、中期前葉51%

SI017(長楕円形):早期1%、前期中葉8%、前期後葉12%、中期前葉78%

SI018 (楕円形 (円形 2 軒か)): 前期中葉17%、前期後葉17%、中**期前葉66**%

SI019 (隅丸方形):前期中葉19%、前期後葉10%、中期前葉58%、中期後葉7%、

後期後半(加曽利B他) 6%

SI020 (楕円形): 前期中葉25%、**前期後葉35**%、中期前葉37%、中期後葉3%

SI021 (不整円形 (楕円形の拡張か)): 前期中葉13%、**前期後葉43**%、**中期前葉39**%、中期中葉 4 %、 後期後半 2 %

SI023 (楕円形 (円形の拡張か)):早期1%、前期中葉8%、**前期後葉55%**、中期前葉36%

SI024 (楕円形): 前期中葉27%、**前期後葉41**%、中期前葉20%、中期後葉11%

十坑

SK001 (SI010を切る円形): 前期中葉2%、前期後葉15%、中期前葉75%、中期中葉7%

SK002 (長方形): 前期中葉14%、前期後葉26%、中期前葉51%、中期後葉9%

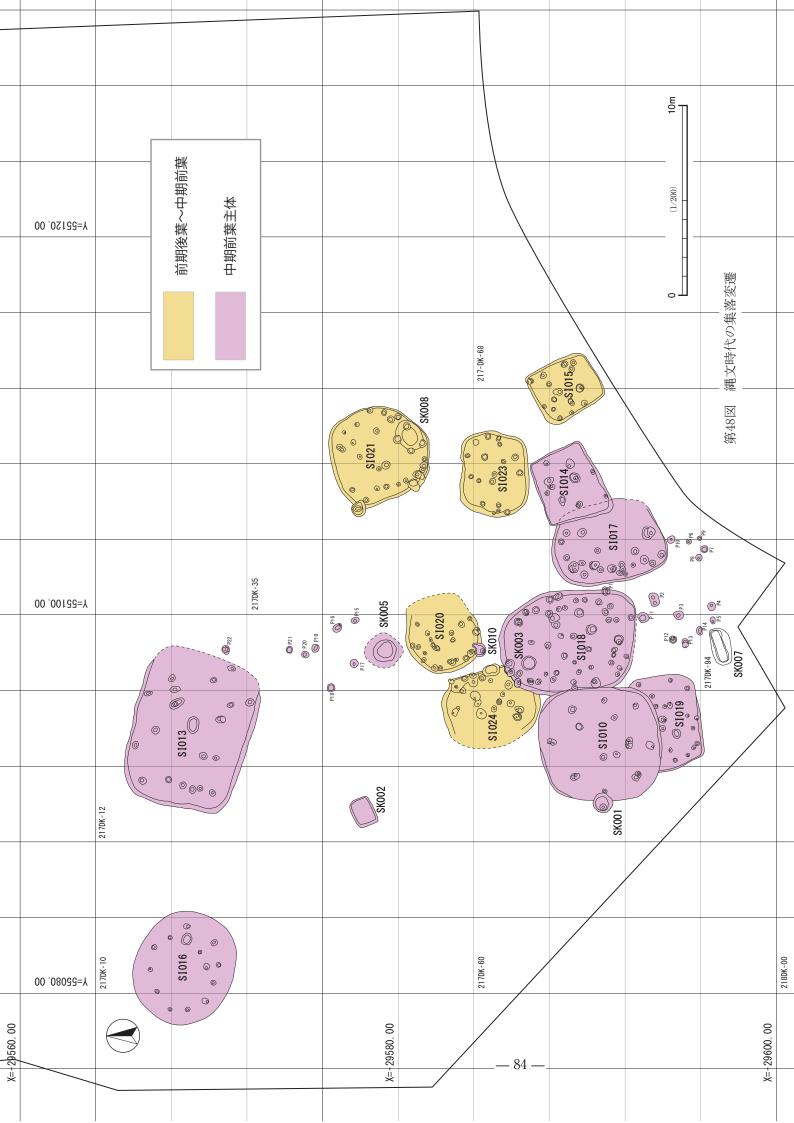
SK005 (フラスコ状):早期1%未満、前期中葉3%、前期後葉4%、中期前葉91%、中期後葉2%

SK007 (陥穴):中期前葉100%

SK008 (SI021を切る楕円形): 前期後葉89%、中期前葉11%

縄文時代遺構外

縄文時代以外の遺構やグリッドで取り上げられた縄文土器は、前期中葉16~18%、前期後葉17%、中期前葉60%前後であり、そのほかのトレンチや表面採集分は約5.2kgで、計約32.2kgである。本遺跡出土の縄文土器総量は、約66kgである。



第15表 縄文土器の時期・遺構別重量(小数点以下四捨五入g、下段は%)

		A	В	С	D	Е	F	G	Н	Ι	
遺構	形状等	早期	前期中葉 (黒浜)	前期後葉	中期前葉 (阿玉台主)	中期中葉 (勝坂)	中期後葉 (加曽利E)	後期後半 (沈線文)	後期後半	晩期	計
SI010	円形		276	278	2,001		17		11	Ì	2,583
			11	11	77		1		0		100
SI013	隅丸長方形	319	719	1,915	5,193			14			8,160
		4	9	23	64			0			100
SI014	方形		146	620	1,352	56	46	27			2,246
			6	28	60	3	2	1			100
SI015	方形		7	847	861		104				1,818
			0	47	47		6				100
SI016	楕円形		168	88	267						523
			32	17	51						100
SI017	長楕円形	26	439	644	4,283	67	40	19			5,518
		0	8	12	78	1	1	0			100
SI018	楕円形		151	146	573						870
			17	17	66						100
SI019	隅丸方形		53	28	157		20		16		272
			19	10	58		7		6		100
SI020	楕円形		260	373	390		35				1,058
			25	35	37		3				100
SI021	不整円形		171	573	517	56		23			1,340
			13	43	39	4		2			100
SI023	楕円形	6	69	449	292						816
		1	8	55	36						100
SI024	楕円形		219	334	163		92				808
			27	41	20		11				100
SK001			3	18	88	9					117
	SI010 を切る		2	15	75	7					100
SK002			40	78	151		26				295
	方形		14	26	51		9				100
SK005		24	162	262	5,597		108				6,153
	フラスコ状	0	3	4	91		2				100
SK007					32						32
	陷穴				100						100
SK008				62	8						70
	SI021 を切る			89	11						100
他時期			1,209	1,330	4,510	16	541	115	16	11	7,747
遺構	縄文遺構外		16	17	58	0	7	1	0	0	100
グリッド		167	3,425	3,290	11,673	5	547	147	16	11	19,280
	遺構外一括	1	18	17	61	0	3	1	0	0	100
	レンチ										545
表面	採集等										4,640
										合計	65,759

これによると、各時期の傾向は次のとおりである。

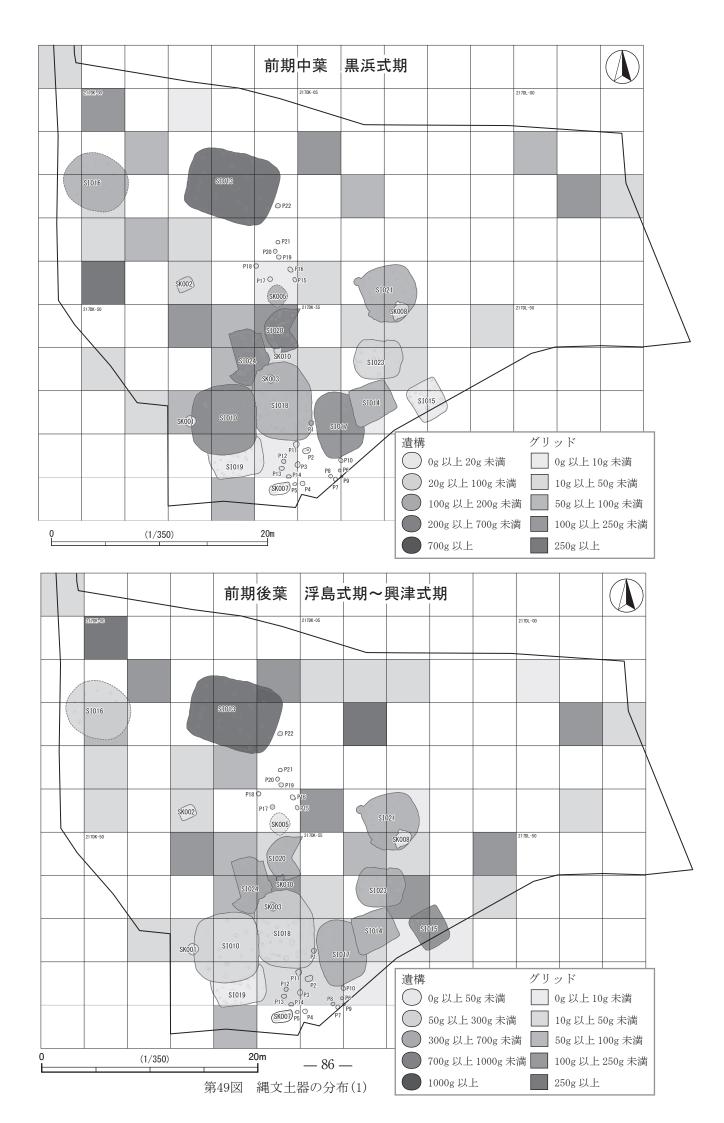
前期後葉主体: SI024 前期後葉~中期前葉主体: SI015·SI020·SI021·SI023

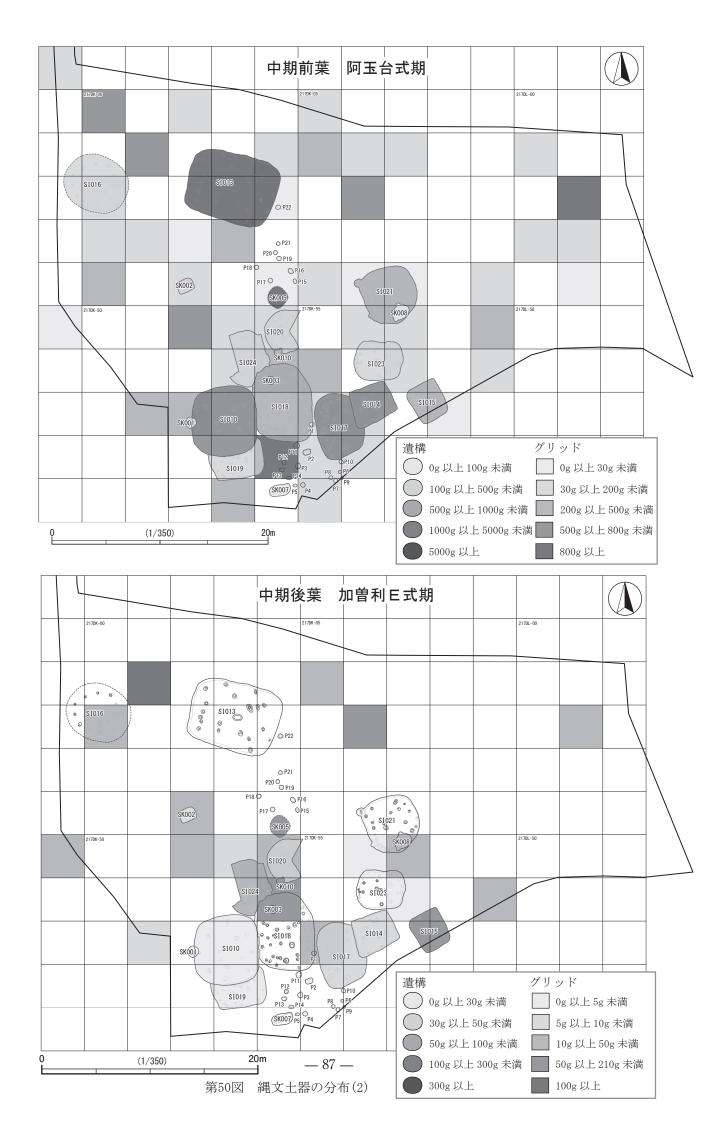
中期前葉主体: SI010 · SI013 · SI014 · SI016 ~ SI019

遺構配置と照合すると、前期後葉~中期前葉の時期が北区中央部にまとまる小型で円形または方形の住居群、中期前葉主体の時期が北区の北側と南側に分散する大型で楕円形主体の住居群である(第48図)。

各住居跡の出土土器群は土器型式をまたがる点は、前代の遺物包含層に掘り込まれ、廃棄後に後の時期のものが廃棄されて混在するが、割合が一桁台等少量のものは流れ込みとして、一定期間定住しながら、多様な型式の土器が搬入・製作されたことが想像できる。また、土坑については、SK007(陥穴)は、全て中期前葉土器であるが、開口して機能したものなので、中期前葉より前に機能して、この時期に埋められた際に周辺土器が入り込んだものと推測できる。また、SK002は前期後葉から中期前葉、SK001は中期前葉、SK005(フラスコ状土坑)は中期前葉に推定される。

石器の帰属時期は、遺構出土と遺構外出土のものを含めてほとんどのものが、前期後葉の浮島式期~興





津式期と後期前葉の阿玉台式期のものと考えられるが、個々の石器をそれぞれの時期に帰属させることはできなかった。器種組成は石鏃と磨製石斧が主要器種である。石鏃は二等辺三角形を呈し、抉りが深い形態のものが主体を占める。磨製石斧はすべて定角式の形態であった。石材は黒曜石の占める割合が高い。

第2節 古墳時代 (第51·52図、第11表)

1 集落の変遷

古墳時代遺構は、古墳時代前期~中期の竪穴住居跡12軒、土坑1基が検出された。各住居から出土した 土師器の年代観からまとめると、以下のとおりである。ただし、重複する住居で前の段階の住居を大きく 切っていたり拡張しているものは確実な遺物の帰属が不明瞭なので、新しい住居の中で出土した古い段階 の遺物を参考に推定した。

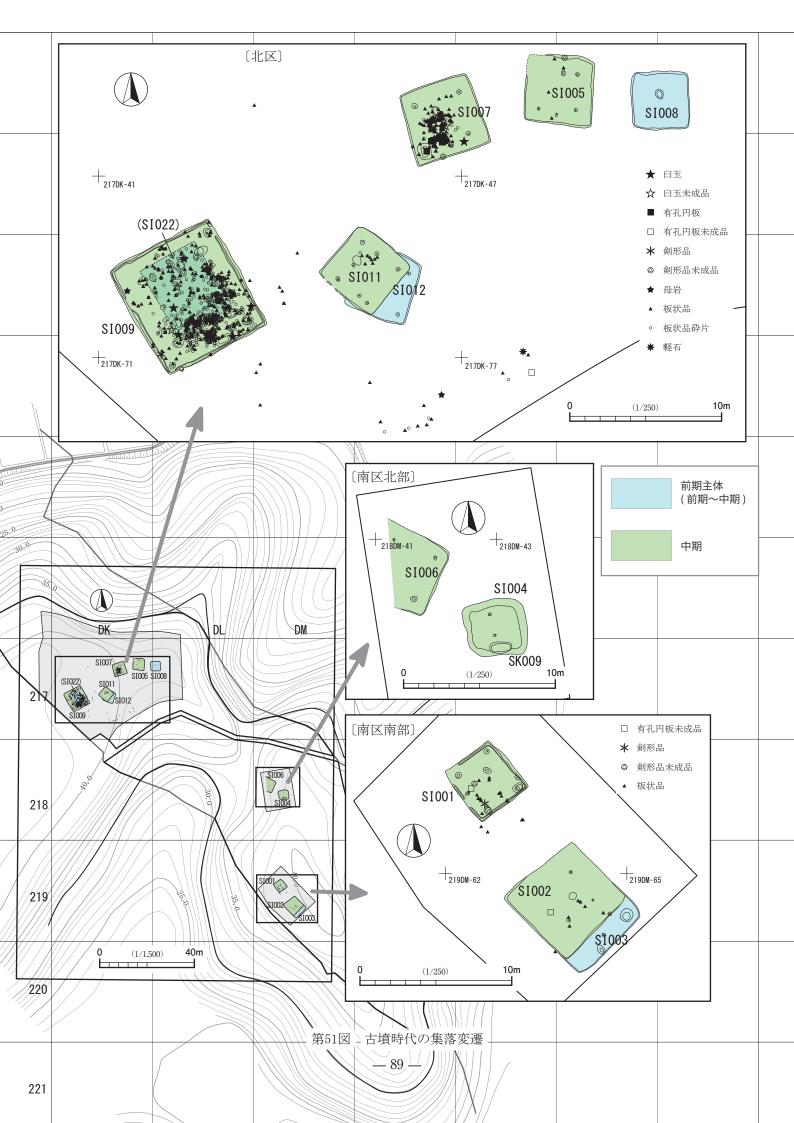
前期 (4世紀後半): SI008・SI012・SI022 前期~中期 (4世紀中葉~5世紀後半): SI003 中期前半 (5世紀前半) SI011 中期後半 (5世紀後半) SI001・SI002・SI005・SI007・SI009 中期 (遺物少量で不確実ながら5世紀代) SI004・SI006

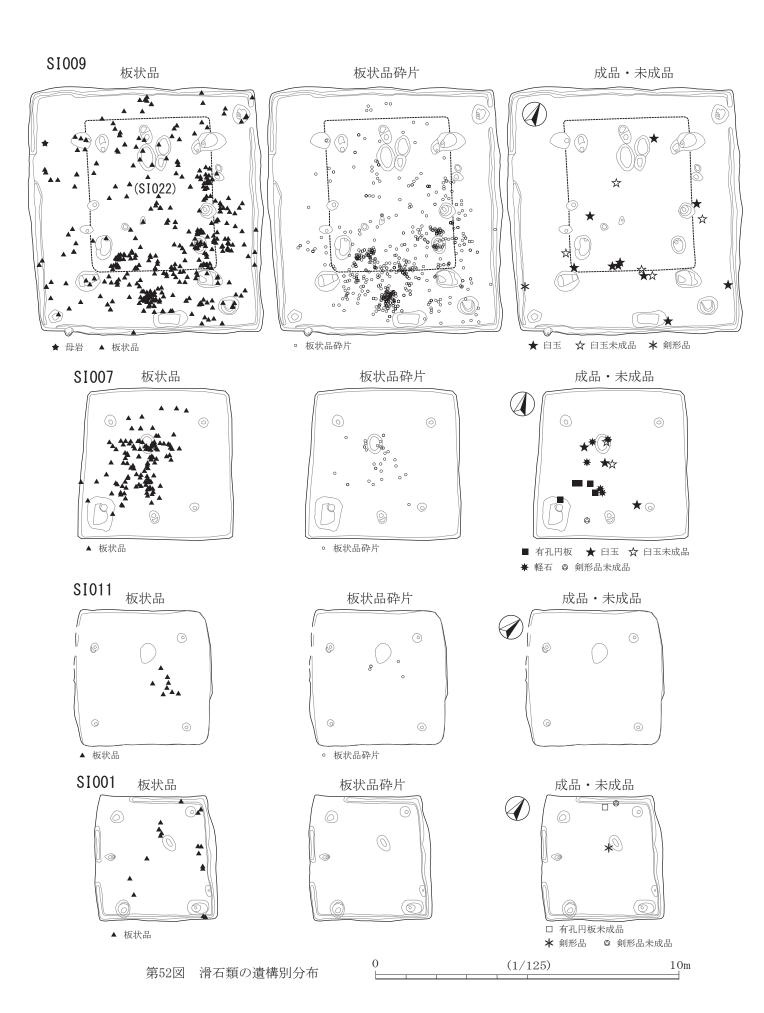
これにより、古墳時代前期主体の住居は北区では中央部に2軒、北東部に1軒、南区南部に1軒の計4軒と散在していたが、中期主体の住居は北区で中央部に2軒、北東部に2軒、南区は北部に2軒、南部に2軒の計8軒と、前期主体の住居を拡張或いは切る様に造られ、集落も拡大したと推測できる(第51図)。なお、弥生時代後期に推定される土器片もSI008と同住居跡を含むグリッド(217DL-30)から各1点出土しているが、細片のため図示していない。また、SI009出土の土師器杯蓋は8世紀代に推定されるものであり、縄文時代竪穴住居跡SI017他からは須恵器甕の小破片が若干出土していることから、当地点においては、奈良・平安時代に土坑等なんらかの遺構が存在したことが想像できる。

石製模造品製作に関連するものは、古墳時代中期に帰属する8軒(SI001・002・004~007・009・011)の竪穴住居跡とその周辺から滑石製模造品(滑石類)が総計2,700点出土した。遺構別の組成は第11表のとおりである。前期に竪穴住居4軒の小規模集落が営まれた段階では、石製模造品の製作は行われていない。中期になると竪穴住居が8軒で集落規模が大きくなり、滑石製模造品の工房が営まれるようになる。後期には集落が消滅している。なお、SI009はSI022を拡張した竪穴住居跡で、出土遺物はSI009にすべて帰属する。また、SI003出土の滑石類は、出土状況からSI002に帰属するものと考えられる。

2 滑石製模造品の製作過程

古墳時代中期の滑石製模造品製作過程(主に臼玉製作過程)と遺構別作業内容についてまとめることにする。遺構の分布域(第51図)は、北区・南区北部・南区南部の3群に分かれる。南区南部はSI001・002の2軒で構成され、滑石類の出土点数が少ない。成品では剣形品が2点出土し、剣形未成品・有孔円板未成品が出土しているが、臼玉・臼玉未成品は出土していない。南区北部はSI004・006の2軒で構成され、3点出土(一括遺物のためドット表示なし)している。北区はSI005・007・009・011の4軒で構成される。SI005・011の出土点数が少なく、成品は出土していない。SI007は臼玉・勾玉・有孔円板等成品の占める割合が高く、成品の最終工程が行われた竪穴住居跡と捉えられる。SI007のみの出土である軽石は、6点出土しており、成品の研磨に用いられた可能性がある。SI009は滑石類全体の半数以上の1,756点出土した。成品では臼玉10点、剣形品1点出土しているが、99%が板状品・板状品砕片で占められる。素材作成工程





を主に行った竪穴住居跡と捉えられる。

滑石類がまとまって出土した4軒の竪穴住居跡を遺構別分布を器種別に示したものが第52図である。各遺構を製作工程別に把握可能になるように、左図に素材(母岩・板状品)、中央図に素材の形割・切削(板状品砕片)、右図に成品・未成品の分布を示した。この3図の遺物集中域が異なる傾向がみられ、それぞれの作業空間が異なることが想定される。SI009は最も大きな竪穴住居跡である。板状品は全面に分布し、板状品砕片は南壁・東壁付近に数か所の密集域がみられ、成品・未成品は中央部付近に分布する。板状品砕片が南壁・東壁側に分布しているのは、形割・切割等の細かい作業を行う際に、採光に適した南側・東側の壁際で作業を行ったことが推察される。SI007は板状品が西半部に分布し、板状品砕片と成品・未成品が中央部に分布する。

本遺跡では臼玉が主体的に製作されていた。臼玉の製作を主眼にして滑石類の製作過程をまとめることにする。先行研究¹⁾を参考にしたが、古墳時代中期の滑石製模造品が多量に出土し、類似した内容を持つ袖ケ浦市八重門田遺跡²⁾で示された5つの工程をもとに製作過程を捉えた。

I工程(荒割)原石から大型・中型剥片を剥離する工程である。この段階の遺物は、母岩や大型・中型の板状品が挙げられる。

Ⅱ工程(板状化) 荒割段階で方形・長方形を意識して割り出された剥片の表裏面を研磨した板状研磨品を作る工程である。この段階の遺物は、中型・小型の板状品が挙げられる。

Ⅲ工程(形割・切削)板状研磨品を臼玉の大きさにしていく工程である。形割段階で平面を方形に作出し、切削段階でそれを多角形にしていくものと考えられる。SI009において本工程による遺物が多量に出土している。この段階の遺物は、板状品砕片が挙げられる。

N工程 (穿孔) 孔を開ける工程である。この段階の遺物は穿孔破損品・穿孔途中品が挙げられる。穿孔方法の痕跡が残されている臼玉未成品の特徴は、次の点が挙げられる。基本的に片面穿孔ではあるが、反対面から孔の調整が行われているもの(SI002の17 \sim 20、SI007の52)、穿孔方向が表面に対して斜め方向のもの(SI002の14 \sim 20、SI007の53・55、SI009の37 \sim 39)、孔の幅が均等でなく内部付近が狭いもの(SI002の17・19、SI007の52、SI009の36)がある。この工程の穿孔は、穿孔方向が斜めで、孔の幅が均等でないものが多くみられ、反対側からの孔の調整がみられることが特徴として挙げられる。

V工程(仕上研磨) 側面・表裏両面・開孔内部の研磨を行う工程である。SI007において本工程が主体的に行われている。側面研磨において、厚みのあるものは、側面中央部の全周に稜線が形成されるものが多い。表裏面の研磨はⅡ工程で行われているが、最終仕上げとして再度研磨されており、Ⅲ工程では研磨方向が異なるものがみられたが、本工程では表裏面ともに同一方向から研磨されている。開孔内部の研磨は、この工程において重要な仕上げといえる。Ⅳ工程で穿孔された直後の孔の形状は、穿孔方向が斜めで、孔の幅が不均等なものが多い。V工程ではこの形状を整えるために、再度片面から穿孔し、表裏面に対して垂直方向で均等幅の同心円の孔が形成されるように仕上げられている。

3 遺跡の位置付け

石製模造品の生産遺跡は、印旛沼東岸地域、香取海南岸周辺、船橋市・千葉市などの東京湾岸、多古町・ 芝山町などの栗山川中流域に分布しており、水系ごとに数遺跡ずつのまとまりが確認されている³⁾。本遺跡はこの遺跡群のなかの栗山川中流域に立地している。この地域の遺跡(第7図、第2表参照)を詳細に みると、栗山川支流の多古橋川(東側)と高谷川(西側)に挟まれた標高40m前後の台地とその周辺に、 古墳時代中期の滑石製模造品を伴う遺跡が分布していることが窺える。

これらの遺跡を内容別にみていこう。滑石製模造品製作工房を伴う集落は、本遺跡(第7図1)と多古 町林遺跡(83)、芝山町上吹入遺跡(48)・下吹入東台遺跡(59)などが挙げられ、これらは多古橋川や高 谷川に面した台地縁辺部の北部から西部にかけて弧状に隣接して分布し、やせ尾根上等、立地条件が類似している。一方、工房を伴わない集落は、多古町土持台遺跡(86)、芝山町宮門遺跡⁴⁾・殿部田遺跡⁴⁾(第7図外)など、古墳は多古町多古台遺跡(111)・板並白貝古墳群(第7図外)などが挙げられる。特に多古台遺跡のNo.3 地点・No.8 地点の古墳群は、本遺跡の約1.5km東方の多古橋川対岸に位置するが、膨大な量の石製模造品が古墳主体部などに副葬されていた。この様な周辺遺跡の状況から、古墳時代中期、当地域の有力権力者は、滑石製模造品の専門工人集団を複数の集落に配置したこと、本遺跡で製作された滑石製石製品は、主として多古台遺跡などの近隣古墳に持ち込み古墳祭祀で用いられ主体部に副葬され、また、工房を伴わない集落にも持ち込み集落内祭祀で用いられたこと等が想像される。

第3節 中・近世

中・近世は、北区で土坑2基、道跡1条が検出された。SK004は円形で深い形状、覆土のしまり具合、煙管の出土等から土坑墓の可能性が高いものである。また、土坑SK006は方形で多くの炭化物が含まれていたが、壁が被熱していないので、炭粒等が廃棄された炭窯関連遺構の可能性がある。道跡は、北区南端部の一部で北東-南西方向に検出された。現在は南北の低地や集落をつなぐ小道(赤道)が存在するが、江戸時代は北東の五反田村と南東の林村をつなぐ道と推測され、その支道として台地縁辺に沿った道と想像される。調査区内では、17世紀~18世紀の近世陶磁器・瓦片が若干出土しており、表面採集された銭貨も含めると、台地上には畑のほか、木炭づくりや薪・肥料等の採集場としての山林があり、陶磁器破片はゴミとして廃棄され、銭貨は道沿いにつくられた墓地や道祖神等に供えられたことも想像できる。

注

- 1 山本哲也 1991「西上総における古墳時代中期の玉作 文脇遺跡の例を中心として 」『研究紀要 V』(財) 君津郡市 文化財センター
 - 小林清隆 1995「房総の石製模造品製作 臼玉の製作について 」『研究紀要16』(財) 千葉県文化財センター
- 2 黒沢 崇ほか 2018「袖ケ浦市定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡(2)」『袖ケ浦椎の森工業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 3 山口典子 2004「第2章 第4節 古墳時代 2 遺物(6) 玉類の生産」『千葉県の歴史 資料編 考古4』千葉県
- 4 平岡和夫 1974「千葉県山武郡芝山町宮門遺跡調査」『宮門』山武考古学研究会

写 真 図 版





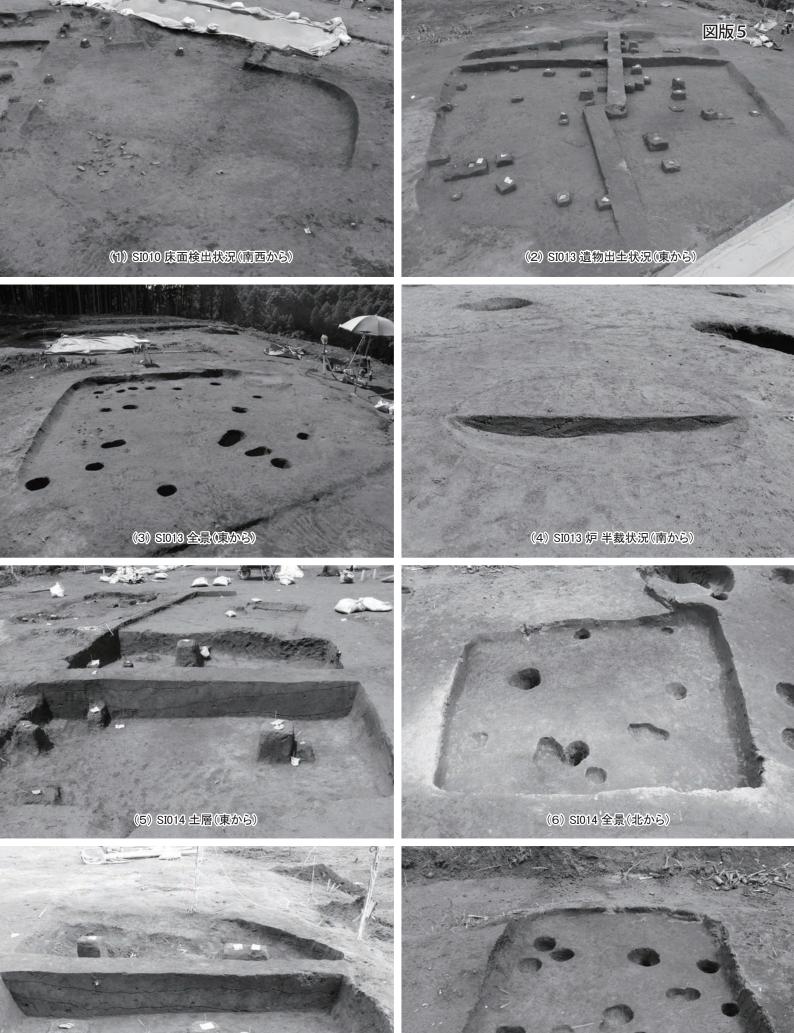




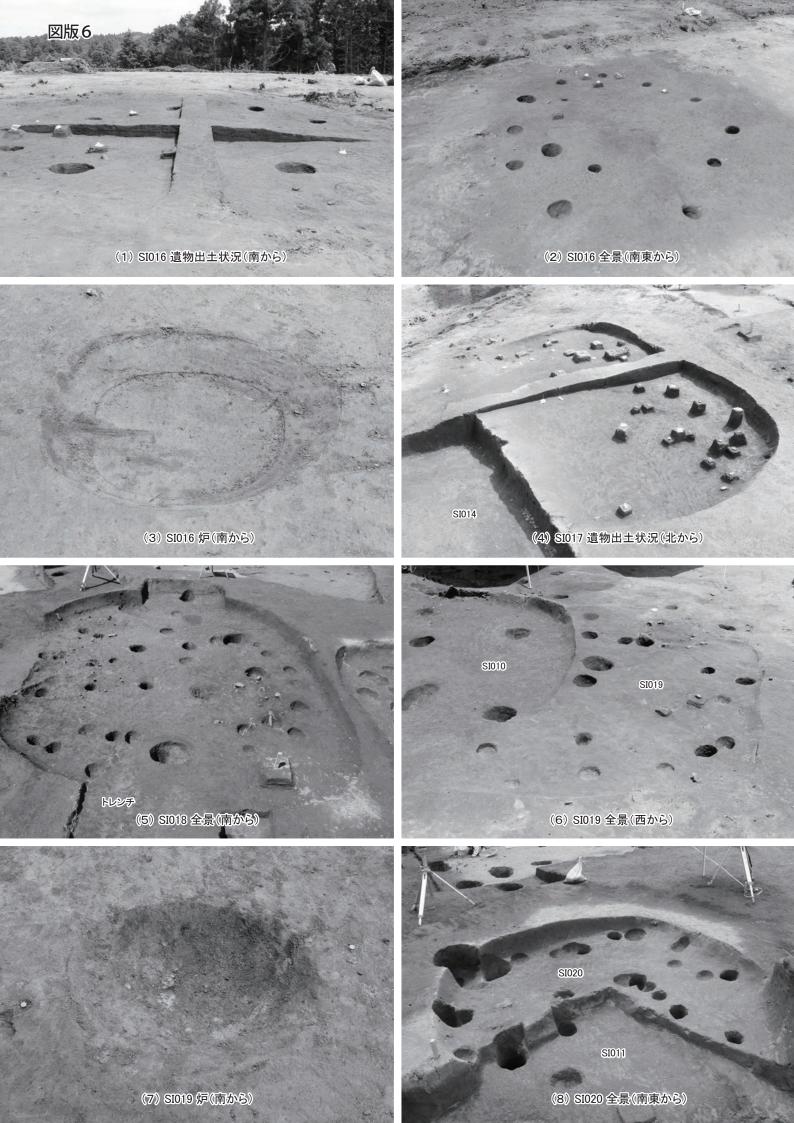


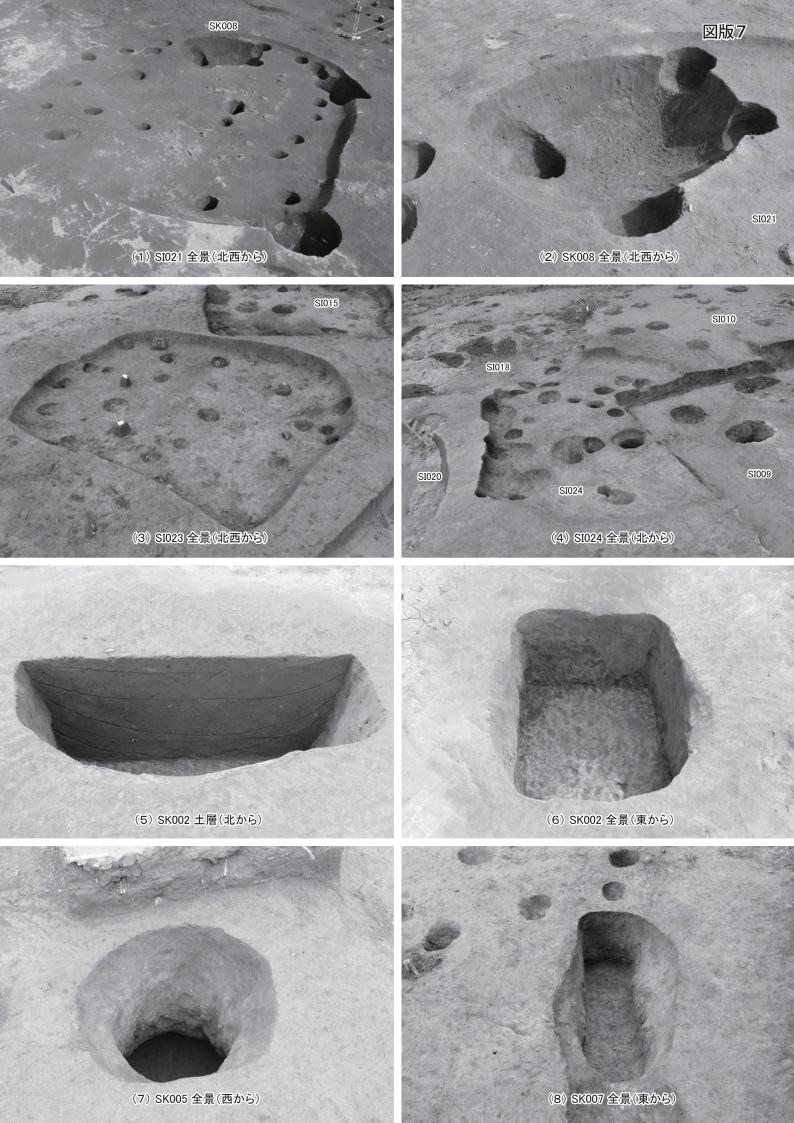
S1021

SI007

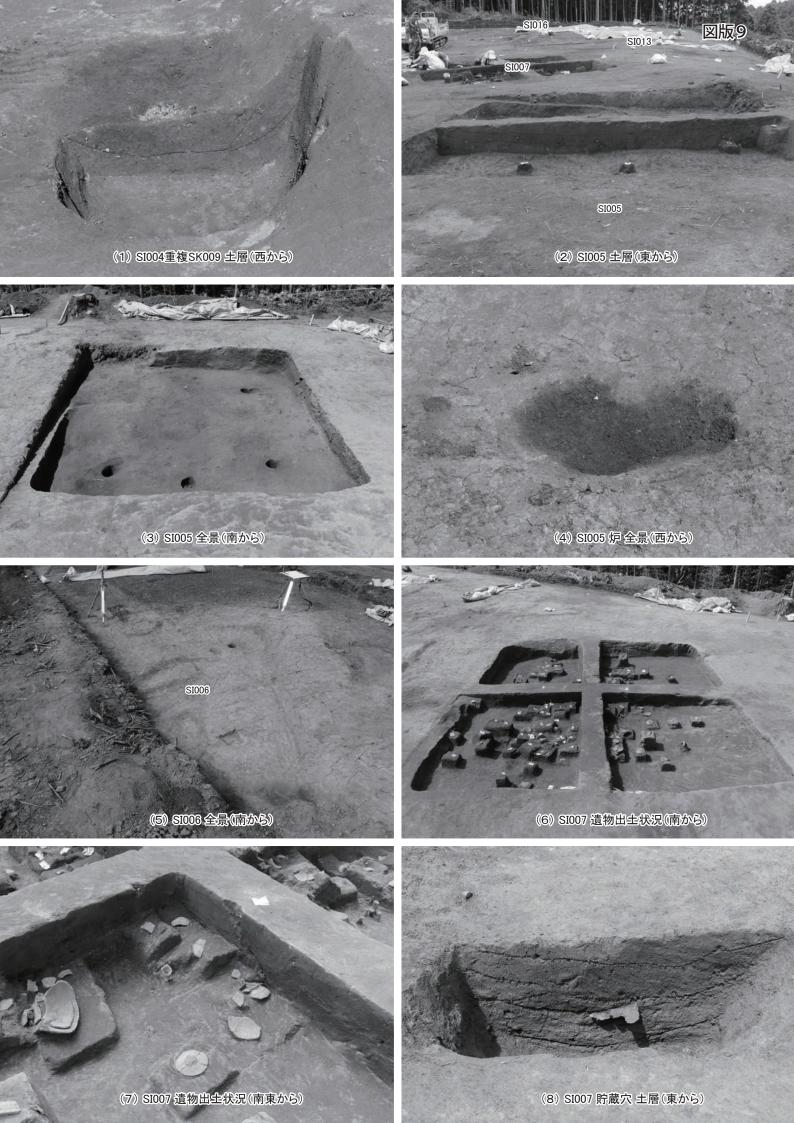


















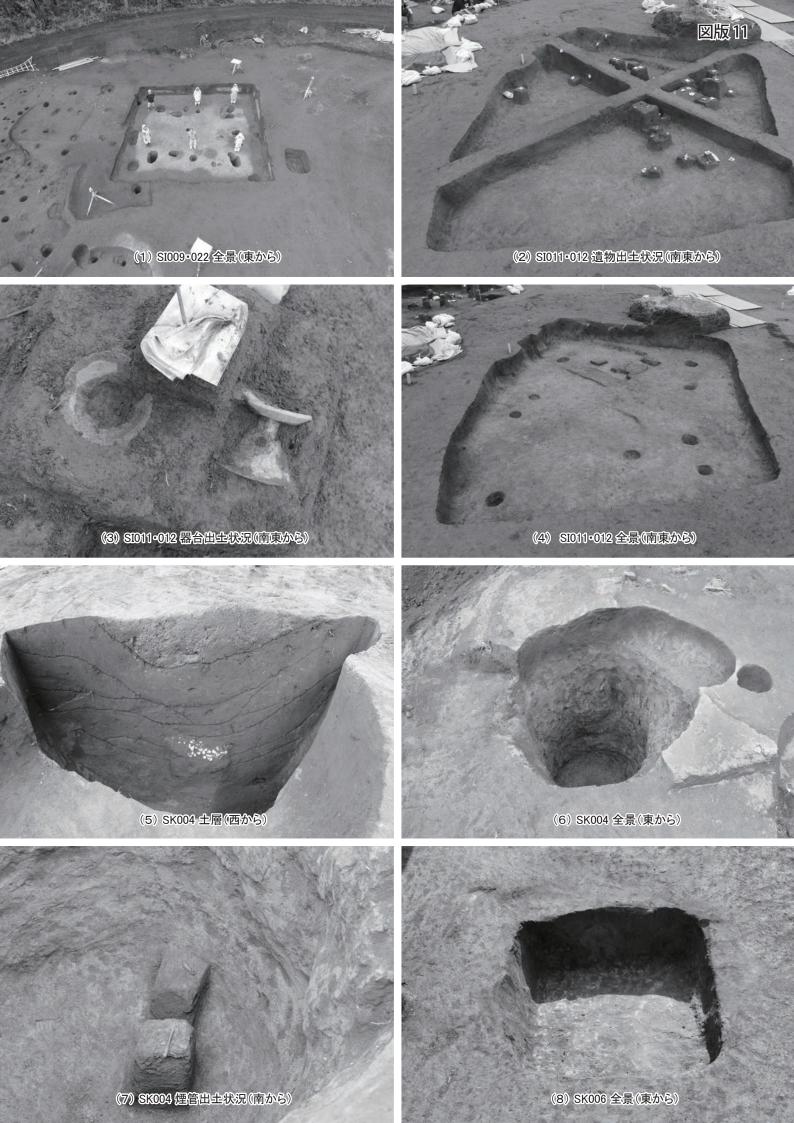


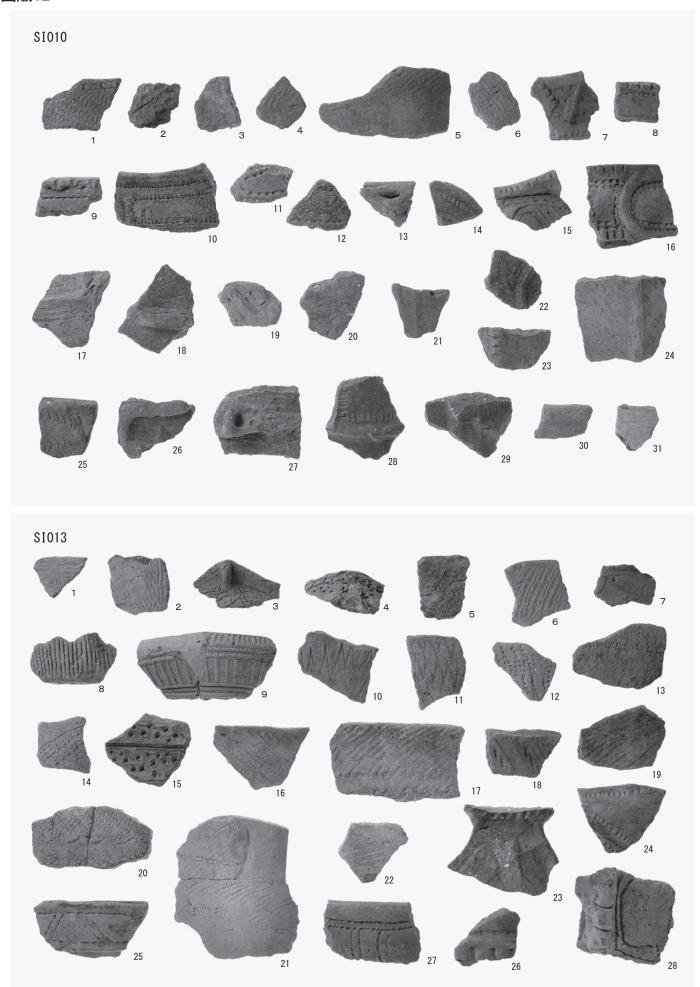




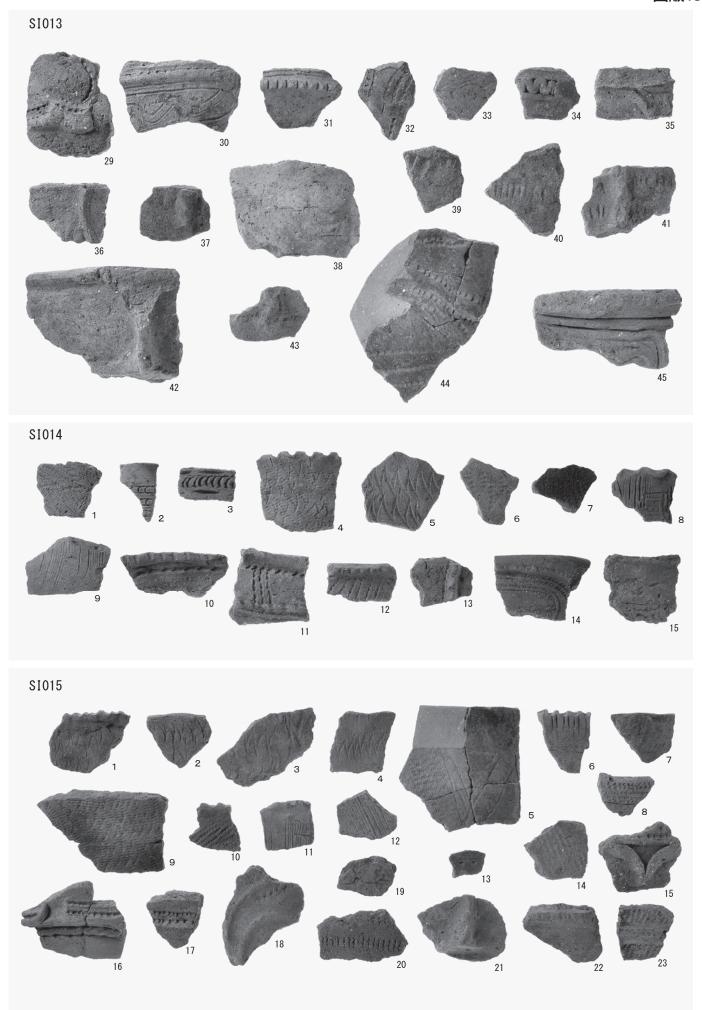




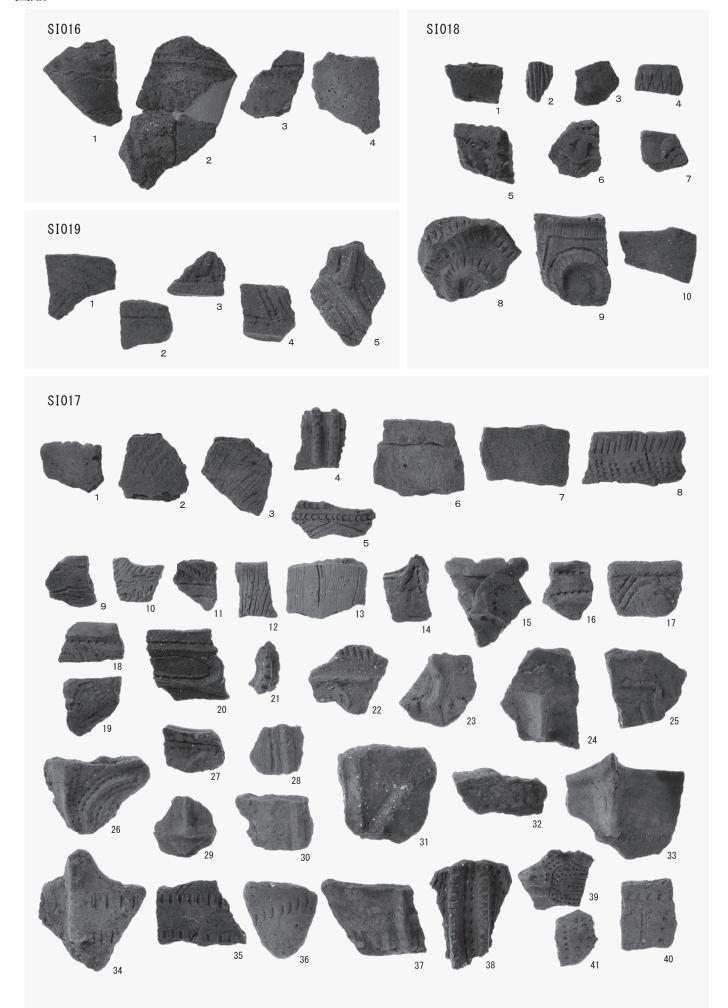




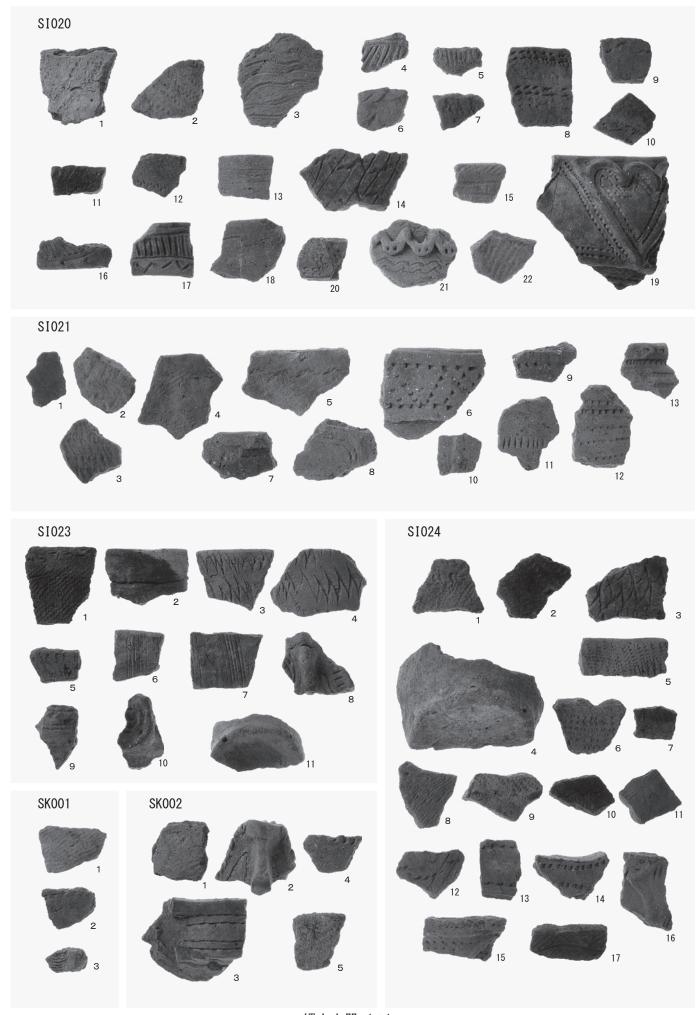
縄文土器(1)



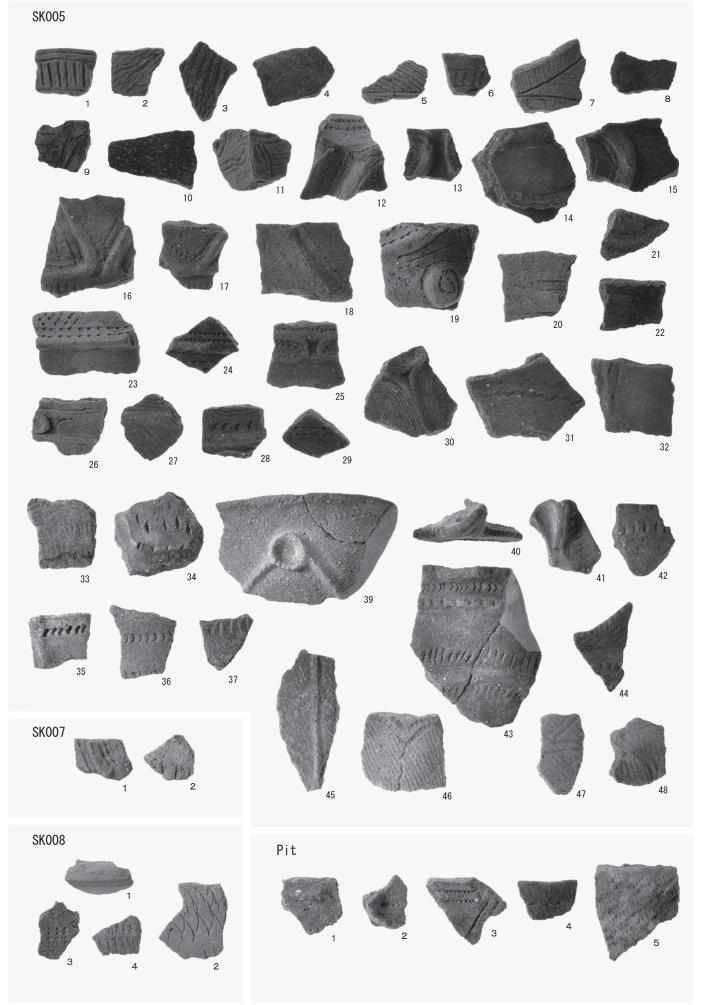
縄文土器(2)



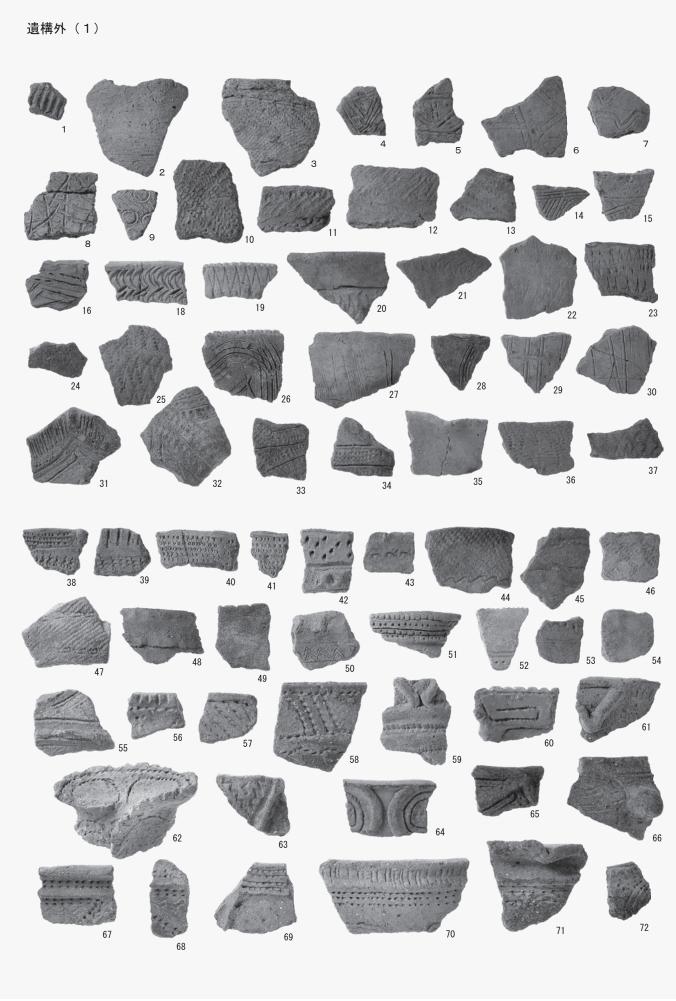
縄文土器(3)



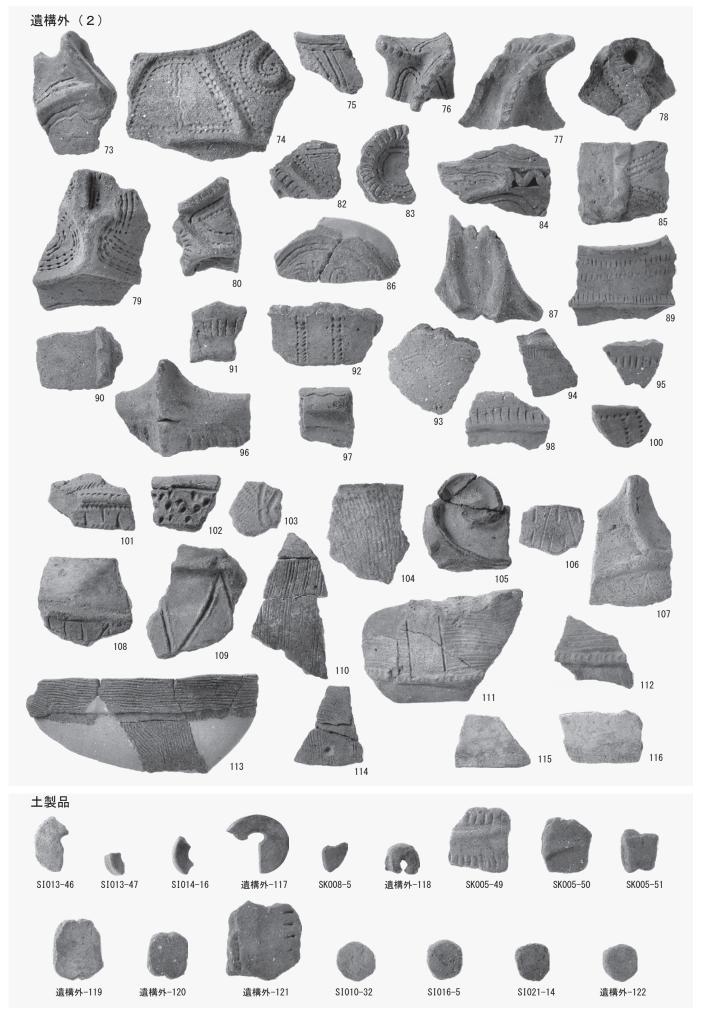
縄文土器(4)



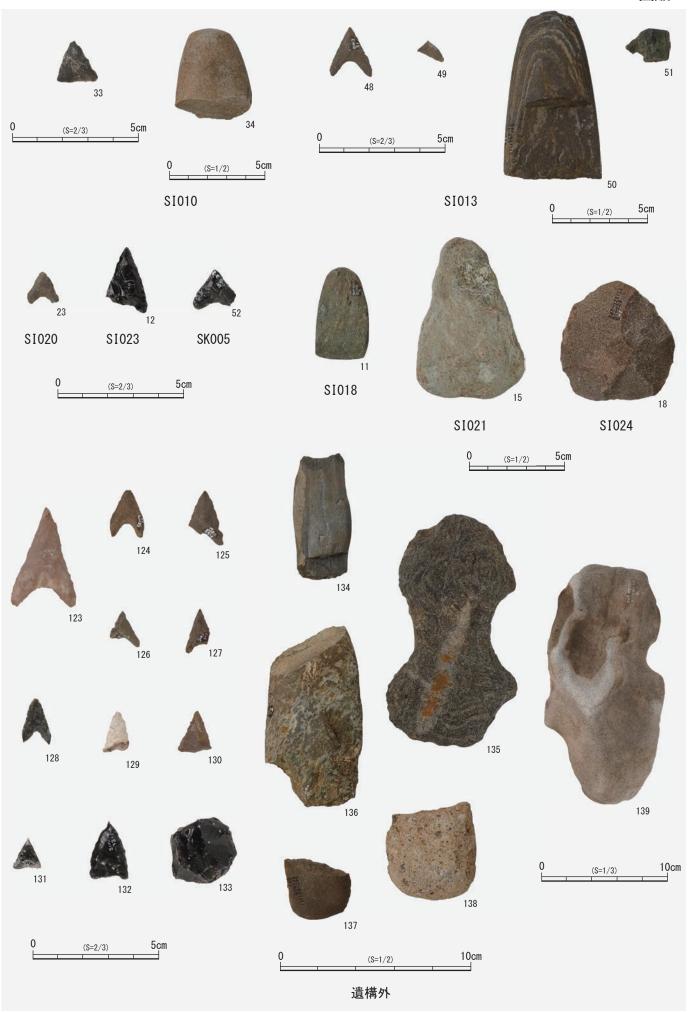
縄文土器(5)



縄文土器(6)



縄文土器(7)・縄文時代土製品



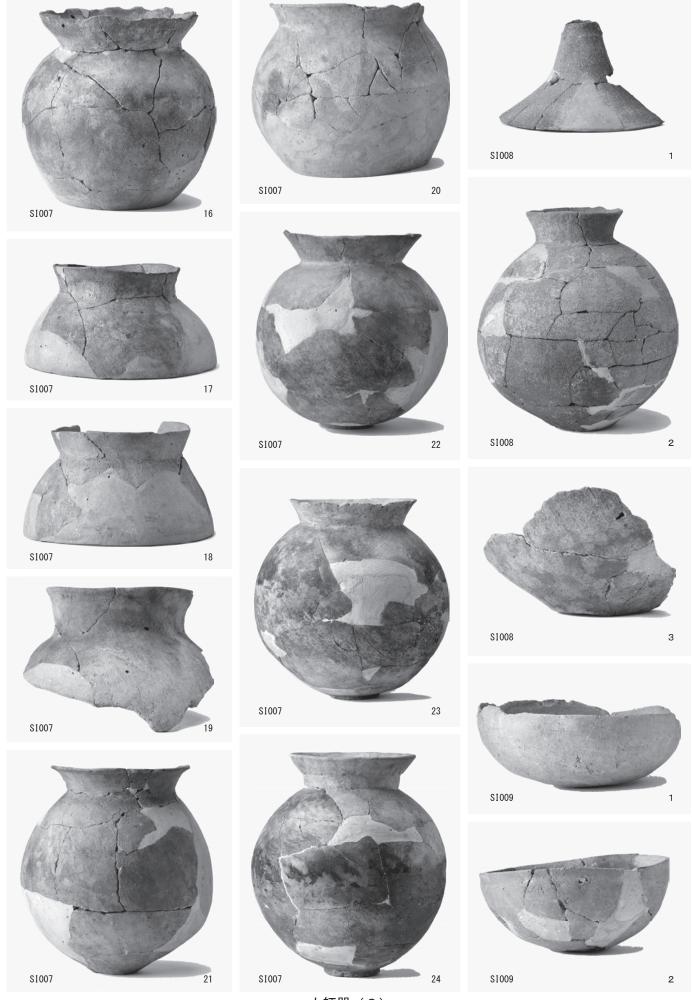
縄文時代石器



縄文土器(8)・土師器(1)



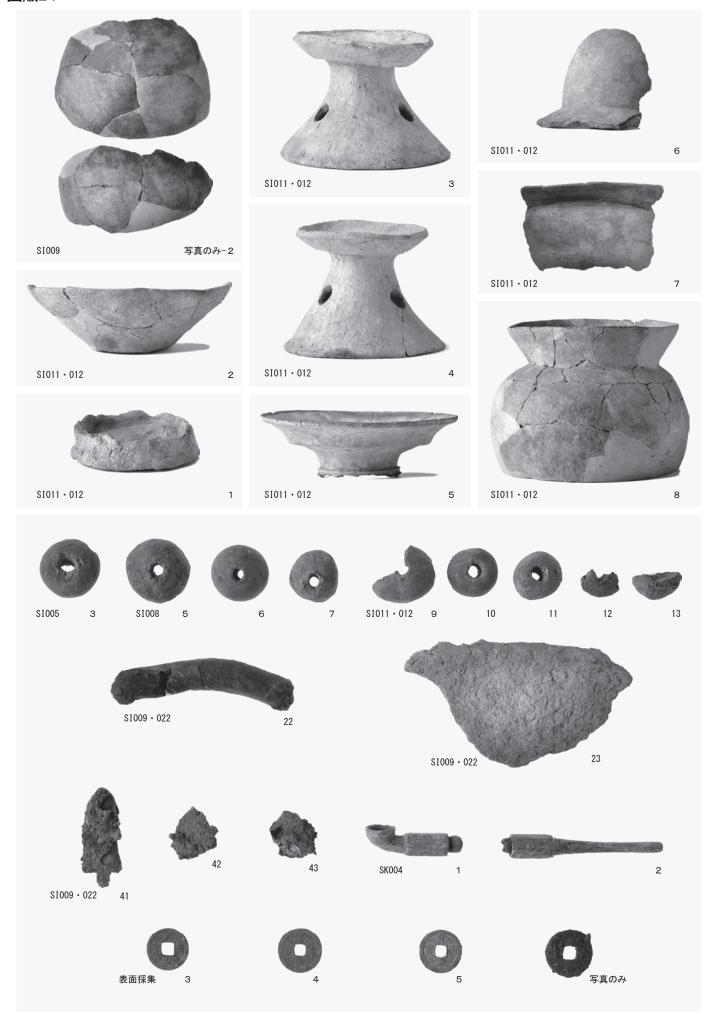
土師器(2)



土師器(3)



土師器(4)



土師器(5) 古墳時代以降土製品・金属製品



古墳時代滑石類

報告 書 抄 録

ふりがた	よしゅとけ	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ								
書	当 首都圏	首都圈中央連絡自動車道埋蔵文化財調查報告書								
副書名	3 多古町	多古町五反田清水沢遺跡(1)								
巻	35	35								
シリーズ名	4 千葉県	千葉県教育振興財団調査報告								
シリーズ番号	第777 集	第777集								
編著者名	3 井上哲!	井上哲朗・新田浩三								
編集機具	【公益財】	公益財団法人 千葉県教育振興財団								
所 在 均	<u>±</u> = 284-0	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848								
発行年月日	西暦2019年3月1日									
ふりがな 所収遺跡名				コ ー ド 市町村 遺跡番号		東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
ごたんだしみずされ 五反田清水沢 いせき 遺跡(1)	香取郡あざなか。	かとりぐんたこまちはやし 香取郡多古町林 あざなか みね 字中ノ峰443-3		021 (1)	35度 43分 55秒	140度 26分 35秒	20170511~ 20170815	10,451	道路建設に伴う埋蔵文化財調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	-	 主な遺構			ナカ 海州		特記事項	
五反田清水沢遺跡(1)	集落跡墓	まな時代 縄文時代 古墳時代 中・近世	代 竪穴住居跡 陥穴 フラスコ状土坑 土坑 ピット群代 竪穴住居跡二世 土坑墓		1基 1基 5基 2群 12軒 1基	縄文土器・土製品・石器			型文時代は前期後葉 場で末葉興津式、中期 長の玉台式主体の集 が、古墳時代は前期~ 間の集落跡である。 間文時代である。 で、高式等の線刻画や多様子の線刻画や多様子の線刻画や多様子の には、古墳時代品景が注目される。	
要 わ 多古橋川中流右岸の標高40m前後の台地上に立地し、平成29年度に調査が実施された。縄文時代は前期後葉浮島~末葉興津式、中期前葉阿玉台式期主体12軒(建て替えを推測すれば13軒の可能性)の集落跡であるが、遺跡全体では早期・後期・晩期の土器も出土した。古墳時代は、前期から中期(4世紀後半~5世紀後半)12軒の集落跡で、複数箇所で滑石製品を生産していたことが確認された。縄文時代・古墳時代とも、遺物群の様相から集落の変遷を推測できた。中・近世は、土坑墓1基・炭窯関連土坑1基などが検出された。										

千葉県教育振興財団調査報告第777集

首都圈中央連絡自動車道埋蔵文化財調查報告書35

一 多古町五反田清水沢遺跡(1) 一

平成31年3月1日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 東日本高速道路株式会社

千葉市美浜区若葉2-9-3

公益財団法人 千葉 県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社ラ イ フ 成田市東和田595